

## 脱走旧幕府軍兵士の戊辰戦記

塩谷敏郎「戊辰ノ変夢之棧奥羽日記」の翻刻

Research Materials

樋口雄彦

本稿は、戊辰戦争に従軍した一人の旧幕府軍兵士の日記を翻刻し紹介するものである。具体的には、慶応四年（一八六八）四月一日江戸を脱走、関東・東北地方を転戦し、同年九月会津で降伏、静岡藩に引き渡された後、明治二年（一八六九）正月釈放され帰郷するまでの記録である。戦争中に記していた原本ではなく、本人が後になってから清書しまとめ直したものはあるものの、類似の他の文献・史料にはない記述が少なくなく、史料価値は高いといえる。もちろん過去に翻刻・紹介されたことはない。<sup>(1)</sup>今回、初めてその全文を翻刻・掲載するのに先立ち、ごく簡単に解説を付しておきたい。

和装本の体裁で三分冊からなる。第一冊と第二冊はともに五五丁、第三冊は五七丁、計一六七丁である。第三冊の末尾には合計「百六十二枚」と記されているが、書き間違い違いであろう。表題は、第一冊の題簽には「戊辰ノ変夢之棧奥羽日記 一」、第三冊の題簽には「戊辰之変夢之棧奥羽日記 三」とある。第二冊の題簽は失われている。第一冊冒頭の内題には「夢之棧奥羽日記」とある。昭和戦後期に所蔵者宅が水害にあったため、本史料も水に濡れたようで、特に第一冊・第二冊は紙面全体に皺がよっている。しかし、文字を読み取る上で支障はない。字数・行数

をそろえ、楷書で丁寧な墨書されている。

筆者は塩谷敏郎という人物である。彼はまさしく幕府陸軍の兵士ではあったが、正規な意味での幕臣ではない。その素性を知るための手がかりは、第三冊の記述の中にある。静岡藩に提出した明細短冊の写しに記された履歴書である。それによれば、塩谷は慶応元年（一八六五）閏五月蕨山代官江川太郎左衛門が募集した兵賦に応募し幕府陸軍の兵卒となり、同三年（一八六七）正月には小頭取締から「御抱入」となり、歩兵嚮導役に進んだ。そして同四年正月には歩兵差図役下役並勤方、その後歩兵差図役下役となることがわかる。五〇俵三人扶持を給されていた。つまり兵卒から下士官に昇進し、正式に幕府に召し抱えられたのである。

明細短冊のすぐ後に「吾輩ハ素々農民」であると記しているように、彼は伊豆国田方郡肥田村（現静岡県田方郡函南町肥田）の農民であった。狩野川沿いに立地する肥田村は東海道三島宿からもほど遠からぬ伊豆北部の農村である。塩谷家はその草分け的な旧家の一軒であり、同村の妙法寺は近世前期に同家が土地を提供し創建されたといひ、総代は塩谷家が他の一軒と交代でつとめることを習わしにしている。最初の檀越と

写真1 「戊辰ノ変夢之棧奥羽日記」全3冊

なった先祖は塩谷主水（慶安四年没）といい、その名前からして土豪的な有力農民だったことがうかがわれる。ただし、史料上、肥田村の名主をつとめたのははっきりしているのは、明治期に村長・県会議員になった小永井治郎兵衛家であり、塩谷家が名主をつとめたか否かについては不明である。

戊辰の戦乱を潜り抜け生き残った塩谷敏郎は、静岡藩士となる道を選ばず、故郷に帰り農民にもどったのである。資産を有する実家があったわけであり、武士になる必要性はなかったであろう。その後の履歴について詳しくわからないのが遺憾であるが、塩谷家の過去帳には「清浄院慈源日応居士 江川代官所家臣、戊辰ノ役ニ徳川軍参戦、下田、熱海警察署長、勲八等桐葉章」と記されているので、下田や熱海の警察署長をつとめたらしい。亡くなったのは明治十一年（一八七八）三月一五日（墓石では一四日）、四三歳であった。墓は妙法寺にある。

敏郎の父は啓三郎といい天保十一年（一八四〇）没。息子は自分と同名で敏郎といい、函南村助役などをつとめ、明治三十九年（一九〇六）四

写真2 第1冊目の冒頭部分

四歳で没。敏郎（初代）は幼くして父を失ったこととなる。また没年齢から逆算すれば、戊辰の際には三三歳であり、また息子敏郎（二代）は六歳である。すでに結婚し子どももいた彼が、何故幕府陸軍の兵賦に応募し、さらに脱走・抗戦という行動に走ったのか、その理由を知る術はない。残念ながら所蔵者宅には他の史料が存在しないのである。

兵賦は、幕府陸軍の近代化と兵力増強を目的に、旗本領や幕府直轄領から召募された兵員である。特に直轄領を対象とした募集は慶応元年五月に達せられた関東を皮切りに、一二月には関東以外の国々に対しても対象が広げられた。伊豆国は一二月布達の対象に含まれる。<sup>2</sup>慶応元年閏五月という塩谷が「江川太郎左衛門兵賦」に応じた時期は、まさにこのタイミングである。ただし、一二月ではなくそれ先立つ閏五月となっている点は疑問である。韭山代官には関東（武蔵・相模）にも支配地があったが、果たして伊豆国の農民を武蔵・相模分の兵賦として差し出すということがあったであろうか。

また以下のような疑問も残る。そもそも慶応元年五月そして一二月に徴募が命じられた兵賦は「御料所兵賦」と呼ばれ、それによって編成された部隊が「御料兵」「御料兵隊」などと呼ばれたことからわかるように、幕府直轄地の村々から集められた農民たちから成っていた。しかし、塩谷敏郎が住む肥田村は大名領（荻野山中藩）であり、幕府領ではなかった。本来彼は韭山代官とは無関係なのである。御料兵は「幕府料の良家の子弟を募集して編成したものにして、幕府の募兵通俗歩兵と称

するものに博徒其の他無頼の徒多きと大に選を異にせり<sup>(3)</sup>といわれており、この点については塩谷の条件はあてはまっている。支配外の村民であつても、自ら希望する者を採用したり、あるいは金銭で代人を雇うなどの事例があつたのだろうか。いずれにせよ、塩谷がどのような立場やいきさつで兵賦となつたのかは不明とするしかない。

さらに、過去帳に記された「江川代官家臣」という記述はどのように解釈すべきか。少ない例であるが、伊豆の有力農民の中には手代として葦山代官江川家に仕えた者もあり、「家臣」とはそのようなことを意味する場合もあろう。しかし、塩谷が代官手代をつとめたというように記録は現在のところ発見されていない。兵賦になつたことを「家臣」になつたという意味で記したのであろうか。<sup>(4)</sup>塩谷がわざわざ支配外の葦山代官領の兵賦に応じた背景には、単なる義務的なものではない何か別の動機があつたことも想定される。先代の江川坦庵（太郎左衛門英龍）には民政官や砲術家として一種のカリスマ性があつたが、葦山近隣の一農民として塩谷もそれを十分に知っていたであろう。江川家に対し並々ならぬ親近感を抱いていたのかもしれない。兵賦とは違うが、葦山代官が

### 写真3 塩谷敏郎

取り立てた農兵には、上層農民の中の有志、まさに良家の子弟が率先して参加していた。慶応年間

には葦山代官所に「学校」「御稽古場」と称する農兵のための教育機関も常設され、「修行人」が集まつていた。<sup>(5)</sup>塩谷が身近な伊豆・駿河の江川農兵の存在に刺激を受けた可能性は大いにある。

さて、以下は本史料の内容そのものに関して述べてみたい。関東・奥羽から蝦夷地において明治新政府軍と戦つた旧幕府軍の諸記録には様々なものがあるが、本史料と関わりが深いのは、やはり総司令官大鳥圭介本人やその配下の士官たちが書き残したものである。その中でも本史料と最も似通っているのが、田中恵親筆「慶応兵謀秘録」である。田中恵親（雅楽助）は御料兵の差図役頭取をつとめ、四月脱走、九月会津で降伏、翌年正月駿河田中城で謹慎赦免と、塩谷と共通する戦歴をたどっているからである。しかし、記述の分量を比較すると、「慶応兵謀秘録」は約四六〇〇〇字、塩谷日記は約九四〇〇〇字となり、塩谷の記録のほうがほぼ二倍であり、本史料の詳細さが際立つ。もちろん、二人は地位も所属部署も違い、完全に同じ足跡を残したわけではないため、双方の記述に出入りがあるのはやむを得ないが、布達・建白等を写した箇所が多いものの、全体として塩谷日記のほうが内容豊富であることは間違いない。

和歌の素養があつた田中がしばしば歌を書き込んでいるのに対し、塩谷にはそのような面はない。むしろ、行く先々の地理・風俗・民情などについてよく記しているのが特徴である。軍夫や間諜として動員され、放火や掠奪によつて苦悩する地元民衆の姿をよくとらえているのも、農民出身の塩谷らしい観察眼である。毎日の天気を欠かさず記している点、宿泊した民家の主の名前などを書き留めている点も他にはない。当然ながら中心になるのは戦闘の経過であるが、多くが客観的な記述のし方であり、自分自身が何をしたのかということはあまり読み取れない。具体的に言えば、塩谷自身が小銃や大砲を打つたとか、敵と刃を交えたといった場面は全くない。しかし、それは彼が担つた隊内での役割による

ものなのかもしれない。

そこで、記述内容からわかる塩谷本人の所属や役職について明らかにしておきたい。慶応四年四月一二日条に「吾隊ハ竜興隊ト唱へ」とあり、その人員六〇名は大砲二門に付属したとある。そして、塩谷の他、松葉権平以下一四名の隊士姓名が記されている。同月一五日条からは、塩谷が「会計補兵糧方宿割兼務」に任命されたことがわかる。同月二六日条には、竜興隊が徹震隊と合併し、以後は大砲隊と称することになったとある。次に六月一九日条に、大砲隊が撤兵隊（御料兵のこと）に合併され、以後撤兵隊と称することになったとある。そして同月二一日塩谷は総督大島圭介・撤兵頭加藤平内（泰壯）より指揮役勤方・撤兵隊会計兼兵糧方心得を命じられている。指揮役勤方とは差図役勤方（中尉に準じる）のことであろう。

このことから、塩谷は、脱走時に有志とともに竜興隊という隊を結成し、主として大砲の護衛・運搬や兵糧・会計関係の仕事に従事、さらに同隊が大砲隊と改称、そしてそれが撤兵隊に合併されてからも同様の任務にあたったことがうかがわれる。彼は輜重担当だったのであり、自ら銃砲を打ったり白刃を振るうことはあまりなかったものと推測される。

竜興隊という隊の存在は、これまで知られていた他の文献には見当たらないようである。大島圭介が戦記「南柯紀行」に、四月一二日下総国市川宿出発時の行軍順序として「先鋒 第一大隊（大砲二門附桑藩<sup>(8)</sup>）」と記したところの、大砲二門に付属したのが竜興隊だったことになる。本史料中、彰義隊とともに上野で戦った諸隊の一覧の中にも「竜興隊」の名があるが、全く別の隊であろう。他に、徹震隊・伝法隊といった名称や二隊が合併してできた大砲隊のこと、回天隊が草風隊に合併吸収されたこと（六月一九日条）なども本史料にのみ登場する記述かもしれない<sup>(9)</sup>。さまざまなグループから構成された脱走軍が、戦闘の過程で離合集散を繰り返したようすがうかがえよう。

本史料は脱走後から始まっており、塩谷の脱走に至るまでのいきさつが全く記されていない。しかし、そのことは田中の「慶応兵謀秘録」から知ることができる。四月一〇日夜、御料兵の差図役頭取飯田嶺次郎、差図役並勤方藤野太郎次郎・松葉権平・上條梅之助、差図役下役池田栄助・塩谷敏郎・小島祐右衛門・岩城庄右衛門・沢田啓左衛門・内田某らが兵卒とともに「西城」（西丸）下屯所を脱し、和田倉門内の第七連隊の歩兵頭並米田桂次郎に付属して大砲護衛隊となり、翌日第七連隊とともに江戸から脱走したということが記されているのである<sup>(10)</sup>。つまり、塩谷は同志とともに御料兵を抜け、最初は第七連隊に付属する形の大砲護衛隊になったのである。このことから考え合わせると、竜興隊とはこの時に行動を共にした御料兵出身の有志であったといえよう。隊員の人数は六〇名だったので、名前が挙がった士官・下士官以外に兵卒が五〇名ほどいたと思われる。

なお、塩谷の階級は、戦中の記事では撤兵隊の差図役勤方になったはずであるが、田中城で提出した明細短冊や謹慎者一覧を記した箇所（明治元年一二月二八日条、二年正月二〇日条）では（歩兵）差図役下役（曹長に相当）となっている。また、他の史料では差図役下役勤方となっていて、混乱が見られる。戦時中の昇進はなかったことになったのだろうか。最終的に塩谷が属した御料兵（撤兵隊）は、田中城で一〇五名が謹慎したわけであるが、前年四月の江戸脱走時には二〇〇名余だったというので、戦死や離脱によった半減したことになる<sup>(12)</sup>。

塩谷がこの「戊辰ノ変夢之棧輿羽日記」を記したのはいつであろうか。明治元年九月二四日付の大久保利通宛伊地知正治書簡を写した箇所に、「此大久保一蔵君ハ後ニ参議ニ昇進シテ内務卿大久保利通公ト称ス支那ニテ英名ヲ顕ス」とあることから、大久保が台湾出兵の後始末のため北京に赴いた明治七年（一八七四）以降であることは確かである。本史料成立が、明治七年から、塩谷が亡くなる一一年までの間であることは間



違う。

第三冊の末尾には、朝廷に菌向かった自分を「頑愚」「頑痴」「短智」であったと後悔・反省し、「過テ改ムルノ諺サ」にならない、「諸君ノ笑ヒ草」にでもなればとの意味をこめ、雨の日のつれづれに書き綴ったものである旨が記されている。しかし、遺族以外にこれを目にした者があったであろうか。たぶん誰にも読まれることなく、長い年月篋底で眠り続けたのではないだろうか。塩谷敏郎の死は早すぎた。明治も十年代半ばから二十年代になれば、旧幕臣の復権がなされ、同時に佐幕派史観というべきものが登場し、戊辰の苦い思い出を語り合い、自らの体験や史料を活字で表現する機会も増えたのであるが、彼はそのような時代の到来を迎えることができなかったのである。もっとも伊豆の一農夫にもどった彼に在京の旧幕臣たちの親睦会に参加する意志や環境が備わっていたかどうかは疑問であるが、釈放後東京への道中で、夜を徹して語り合った後、沼津宿で別れた戦友五名とも再会する機会はなかったのではないだろうか。下士官にまで昇った彼は、無名のまま歴史の闇に消えていった多数の兵卒たちとは違うが、庶民出身である点では同じだった。それだけに、本史料は内容とともに、その存在そのものが独自の価値を持っているのである。

「戊辰ノ変夢之棧奥羽日記」全三冊は、敏郎の曾孫塩谷光夫氏が所蔵されている。史料の調査・閲覧をお許し下さった塩谷氏には心より御礼申し上げる次第である。

# 註

- (1) 唯一、肥田誌編纂委員会編『肥田誌』（二〇〇二年、函南町肥田区発行）には、本史料の存在がわずかに言及され、一頁分の写真が掲載されている。しかし、内容に関してはほとんど立ち入っていない。
- (2) 熊澤徹「幕末の軍制改革と兵賦徴発」（歴史評論）第四九九号、一九九一年。
- (3) 山川健次郎監修『会津戊辰戦史』（一九三三年、会津戊辰戦史編纂会、二〇〇五年復刻、マツノ書店、一二九頁）。
- (4) 塩谷と似た、箱館で降伏した一連隊差図役下役の西脇三喜三（三四歳）という人物がいるが、彼は豆州賀茂郡下田町出身で、「江川太郎左衛門鉄砲方附手代見習」から「撤兵備嚮導役」になった経歴を有していた（山田孝子「碧血の賦―秋田流亡箱館の降伏人たち―」『幕末史研究』第三十六号、二〇〇〇年、三十一人会・小島資料館）。ただし、本当に手代見習であったかどうかは不明であり、下田町から兵賦に応じた御料兵だった可能性もある。
- (5) 静岡県教育委員会文化課編『江川文庫古文書史料調査報告書二―古文書（一）』（二〇〇七年、静岡県教育委員会、三八一頁）、『江川文庫古文書史料調査報告書二―古文書（二）』（同前、五六二頁）。
- (6) 橋本博編『改訂維新日誌』第六卷（一九六六年、名著刊行会）所収。
- (7) 前掲『慶応兵謀秘録』（『改訂維新日誌』第六卷、二一四頁）には、大砲隊士官一覧の中に「元隊へ六月廿二日帰る 下役塩谷敏郎」とあるが、これがこの時のことを意味しているのだろう。撤兵隊すなわち御料兵こそが塩谷にとつての「元隊」であった。
- (8) 日本史籍協会編『幕末実戦史』（一九一一年、一九八一年復刻、東京大学出版会、四頁）。
- (9) なお、「激震隊」の名は、『千葉県東葛飾郡誌』（一九二三年、千葉県東葛飾郡教育会編・刊、一七二頁）に掲載された慶応四年四月一日付布施村届の中に登場する。
- (10) 前掲『慶応兵謀秘録』（『改訂維新日誌』第六卷、二二三頁）。
- (11) 前掲『慶応兵謀秘録』（『改訂維新日誌』第六卷、二二七頁）。なお、塩谷日記では田中城で謹慎したのは、会津で降伏した加藤平内以下の御料兵一〇五名、天野花蔭以下の草風隊五四名、仙台で降伏した大久保七郎右衛門以下の大久保隊四四名、総計二〇三名となっているが、『慶応兵謀秘録』には、加藤平内以下（撤兵つまり御料兵のこと）が一〇〇名、天野華蔭以下の草風隊が五四名、仙台で降伏した逸見鎌策以下の敬身隊が一二名、同じく大久保七郎右衛門以下の新青龍隊が二四名となっており、若干の食い違いが見られる。塩谷日記では下士官・兵が

単に「元銃士」と一括されているのに対し、「慶応兵謀秘録」のほうは嚮導役・撤兵方小頭取締・撤兵勤方といった肩書が全員に付けられているほか、敬身隊・新青龍隊といった隊名も塩谷日記のほうにはなく、この点においては詳しい。

また、塩谷日記の明治元年一〇月二四日条には、一〇六名が千住大橋から築地に着いたとあるが、その数は太政官編纂『復古記』第十冊（一九二九年、内外書籍株式会社、八九七～八九八頁）に掲載された加藤平内以下の氏名の数と一致する。ただし『復古記』では、大久保七郎右衛門以下二六名の隊名は誠意隊となっていて、「慶応兵謀秘録」と違う。

- (12) 脱走軍からの脱走、すなわち敵前逃亡・戦線離脱については、本史料中にもたびたび記述があり、特に負け戦の中で指揮官を悩ませたことがわかる。他の例として、拙稿「荒川重平回想録―昭和から振り返る旧幕臣の幕末・明治―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第一三六集、二〇〇七年）で紹介した荒川重平（敬次郎）は、御料兵の江戸脱走に参加した一七歳の少年士官であったが、途中で離脱した一人である。「慶応兵謀秘録」にも「日光鉢石より川辺光蔵と共に脱走 荒川啓次郎」（『改訂維新日誌』第六卷、二一四頁）、「撤兵隊士官荒川敬次郎（中略）脱走後何れも江戸へ帰る」（同前、一二〇頁）と、脱走者として記録されている。ただし、彼の場合は恐怖にかられてというよりも、公金を横領し逃げた者を見て旧幕府軍の先行きに失望したことの原因があった。

〔凡例〕翻刻にあたっては、以下のような方法を採用した。

1. 原文の通り、句読点はないままにした。
2. 原文にある割注は、本文と同じポイントにして、――の間に示すことにした。
3. 朱書や欄外の文字については、「」をほどこし、（朱書）、（欄外）と表示した。ただし、朱書の○や、については表示を省略した。
4. 明らかな誤字等についても、訂正せずそのままにした。

（表紙・題簽）

戊辰ノ変

夢之棧奥羽日記 一

塩谷敏郎誌

夢之棧奥野日記

塩谷敏郎誌

印

夫慶応四戊辰者海内未曾有之变革ニシテ 王政御維新ト称ス其濫觴ヲ過慮スルニ嘉永度異船豆州ニ入港已来各国並立交際ニ膺リ主務多端ノ折柄江城桜田外ニ於テ時之老職害セラレ亦吉野ノ結党或ハ水府ノ脱臣武田伊賀等妄リニ攘夷ヲ主張シ常野ニ蔓延圧倒シ遂ニ常州筑波野州大平ノ両山ニ集屯ス政府之ヲ討テ其所置ヲナス亦元治元七月西藩ノ脱兵数多京師ヘ妄推 襟闕ヲ襲ヒ銃丸宮牆ヲ貫キ奉驚 宸襟ヲ既ニ抗敵ニ及フ時ニ当テ 王城ノ守護職奥州会津之城主松平肥後守并ニ美濃大垣之城主戸田采女正ヲ首トシ幕府在京ノ諸隊士奮勵シテ 朝敵ヲ追討シ 宸襟ヲ安シ奉リ京都ノ守護一層嚴令国民安康ノ思ヒヲナスト雖モ西藩違 勅ノ形勢因而將軍家ヘ長門征伐ノ 勅語有リ將軍家茂公諸侯ト議シテ慶応二丙寅五月上洛 奏聞ニ及フ諸侯モ將軍ノ召ニ応シ上京軍議ノ上紀伊中納言殿ヲ總裁ニ補シ老職板倉伊賀守小笠原壱岐守若年寄永井玄番頭ヲ始トシテ軍事ノ隊長海陸軍隊ヲ引率ス続テ諸侯ヘ出陣ノ指令有リ順序ヲ以テ井伊藤堂榊原ヲ先頭トシテ發出ス海軍ハ防州附ノ大島ヘ罹テ砲戦ス陸軍ハ防州界ヘ攻撃砲戦ニ及フ將軍家ニモ大坂表マテ御着陣時ニ松平内蔵頭老臣松平相模守老臣建言ス其文ニ曰

建言書

松平内蔵頭老臣  
松平相模守老臣

謹テ建言シ奉ル長防御討入之御手配 官軍井伊榊原ヲ始メ遂ニ敗走御

勝利ノ御模様更ニ承ハラス此際ニ忠諫申上候儀別而奉恐入候得共堂々タル 神州浮沈ノ界ヒ是迄建言仕候得共御採用ナク却テ御疑惑ノ件少ナカラス乍併目今ニ至リ候テハ仮令一家存亡候共 皇国ノ存亡ニ換ヘ難ク不顧万死言上仕候会津宰相儀早ク 帝都御守衛御免加賀宰相ヘ当分被仰付亦小笠原壱岐守儀此度芸州表ニテノ取計方士民疑惑ノ廉不少候間早々被召寄至当ノ御所置御座候様仕度長防御討伐ノ儀根元ハ壱岐守私意ヨリ出テ重大ノ事件輕々敷取計ヒ候事故其次第被仰立諸軍引上ケ寛大ノ御処置相成候得ハ自然幕府之御仁徳列国ノ万民感肺仕候ハ当然ノ儀ト奉存候間出格之御思慮被為渡之ナク候而ハ乍恐御家名ニモ相抱リ候儀殊ニ外藩反逆ノ志シ有之様ニ相聞ヘ仮令如何様 台命御座候共兵士差出ス間敷情実明鏡ニ照シ□害見前ト奉存候累年蒙御鴻恩ヲ候微身此僣傍觀仕候モ本意ヲ失ヒ候間謀知愚存之趣キ荒尾但馬伊木長門差出候間御不審之条御糾問被成下度尚万死ヲ以テ此段言上仕候誠々頓首再拝

六月十八日

右等ノ諫書奉ルト雖モ審議及ヒ難ク諸侯諸隊ヘ御軍配有セラレ將軍家ニモ播州姫路ヘ御着陣井伊榊原ヘ御指令有テ攻撃急也將軍家茂公姫路ニ於テ御不例大坂マテ御帰館丙寅十月御他界在京之御家門諸藩評議之上奏聞ニ及ヒ一橋中納言慶喜公ヘ將軍 宣下被為在則チ御大札ノ式相済直ニ長防進発ノ御沙汰ニ相成発京<sup>ヒメジ</sup>廣島ヘ御着陣遂ニ諸隊奮勵シテ国界ニ逼リ激戦数回ニ至リ何某ヲ生捕説諭ノ上本国ニ還ス彼ノ臣帰城ノ上 官軍ノ軍門ニ臨テ降伏謝罪ス總裁紀伊中納言殿ヨリ將軍家ヘ伺ヒ御指令ヲ待將軍家ヨリ 奏問ニ及ヒ寛大ノ御所置ヲ仰ク則チ 寛典之御処置 仰出サル毛利氏謹慎恭順從臣モ同断同年八月謹慎 御免仰出サレ夫々ノ御処分有リ毛利氏上京薩土ヲ始メ国政之議事屢々之アル由斯テ吾公倩ヲ思召レケルハ吾国昌平ノ久敷ニ慣習シテ国中ノ人氣次第ニ怠慢シ驕奢困迫ノ極リニ至リテ年々兵革ノ患ヘ絶ス閩州何トナク平穩ナラス因テ徳川慶喜公ニ

条ノ城在留ノ期リ慶応三丁卯年十月廿四日其身ノ不肖薄徳ニシテ大任ヲ維持スルニ堪ヘス故ニ將軍職ヲ辞シ申サレ政權ヲ 朝廷ニ歸シ奉ラン事ヲ奏問有リ然レ共諸藩上京ノ上追テ 御沙汰有ル可キニ付夫迄ノ処以前ノ通り相心得可キトノ事ニテ其節 勅許ハ有ラサリシカ十二月ニ至ツテ太政返上將軍職辞退之両条 聞食届ケラレケリ同十二日吾公ハ大勢ノ人数鎮撫ノ為トテ御届書ヲ出シ置会津桑名ノ兩藩ヲ始メ諸兵隊ヲモ引卒シ大坂城ヘ退去セシ由其報状江戸ヘ來着セリマタ会桑兩藩旧幕府ノ從臣在京ヲ禁止ラレシ由然ルニ其年モ遂ニ暮レテ明レハ慶応四辰年正月上旬ニ至リテ府下市中ニ誰言トナク密ヤカニ風聞シケルハ今度伏見大坂ニ於テ幕府方大敗軍ト也危急ノ場ヲ漸ク通レテ蒸氣船ヲ走ラセ公ヲ始メ諸同勢忍ヒテ江戸ヘ帰ラル、由然レ共其敵ハ誰ナルヤ詳ニ知ラスト言モ有リ或ハ長州ノ兵トモ云ヒ又ハ薩州勢ト戦ヒ敗レテ追撃セラレシ共云ヒ其評區々也シカハ江戸ノ混雜大方ナラス然ルニ此月十四日ニ至リテ布令ヲ以テ達セラル、ハ先般尾張大納言松平大藏大輔ヲ以テ上洛致ス可キノ 御内諭ヲ蒙リ去ル三日先隊ノ者関内迄罷越シタル処京地ニ在留藩士ノ中ヨリ謂レナク通行ヲ差拒ミ兼テ伏勢等ノ分配致シ置粗暴ノ挙動ヲ以テ兵端ヲ開キ剩ヘ 朝敵ノ名ヲ負セ諸藩ノ者ヲ煽動シ人心ニ疑惑ヲ抱カセ戦形斯ニ顯然タリ此分ニテハ徒ラ二人命ヲ損シ候ノミ以來宸襟ヲ安シ奉ル可キ誠意自任ノ際ニ当テ典道判然ト立ニ於テハ尤モ不本意ノ至リニテ深ク心痛致ス処就テハ見込モ之アルニ付兵隊ヲ引揚ケ軍艦ニテ一先東帰致シタリ追々申聞ス儀モ有レハ同心協力国ノ為ニ忠節ヲ抽ンス可キ者也ト有司ヨリ触達セラレシカハ此事市中ヘモ略ホ聞ヘテ誰カ驚愕思ハサラン耶悉皆安キ心ハ莫リケリ其後大坂表ヨリ敗兵逐次ニ遁レ帰リテ語りケルハ吾公上洛ヲ致ス可キノ 御内諭ヲ蒙リ去ル三日途中ニ於テ攻戦ニ及ハレ諸兵暴動沸騰ス会桑兩藩モ俱ニ突戦致スト雖モ何等ノ事故ヲ知ラサレハ柔<sup>アライ</sup>受戦ニ時間ヲ過ス而已其向主公ヘ急訴ニ及フ内府ニハ臣等有名無実ノ闘戦ヲ醸シ他事ハ免モアレ 朝廷ニ抗セシモ同様畢竟指揮不行届キ如



何ニモ驚怖奉リ且ハ深キ御思慮モ有セラレ江戸へ帰城他事ナキ思召ヲ貫ク可キ御遠志ニテ即日紀州へ退去和歌ノ浦ヨリ乗船ス夫ニ引換へ伏見ハ幡ノ諸兵混動答戦中へ内府ニハ大坂城ヲ退去ノ由追々ノ報知始メテ無名ノ妄戦ヲ察シ大軍総敗散乱ス天運時節トハ云ナカラ数隊ノ兵士等七裂ハ散各意ニ姿粧ヲ交ヘ紀州へ走り乗船スルモアリ又ハ伊賀伊勢ヲ経テ参宮ノ道者ニ打紛形状ヲ変シ這々歸り来リシト云中ニモ世評宜シカリシ天野加賀守ノ如キハ隊兵千人余モ与リテ指揮スル撒兵頭ナレハ花々敷戦鬪ヲナシ敵ヲモ数多討取可キニ味方ノ内応ニ遮障ヘラレテ空敷引取来リシト云或ハ悽愴惘然トシテ何ヲ言ニモ不慮ノ急戦計策ノ出ル所ヲ知ラス止ム事ヲ得サル柔受軍ニ心ナラスモ敗走シ公ヲ始異船ニ乗込慌々シク帰城アリシト云ヒ或ハ喋々ト誇リ□ニ実事妄説ヲ取交テ味方ハ五万ニ余ル大軍ナレハ輪ク可キ謂レ更ニナシ全ク裏切ノ者モ有リ且大坂表ニテ新規召抱ヘノ歩兵ノ中ニ敵ノ間喋モ有シ故歟斯ル不覚ヲ取レリナト云モ有リ風評区々也ケレハ士民安キ心モナク此上ニ又如何ナル珍事ヤ發出ラント周章大方ナラサリケル暴動中死傷ノ者尤モ多キ由之ハ徳川ノ人数多勢不意ヲ討レ殊ニ主令ナキ無名ノ争戦ナリシ故成ル可シ鼠儕等惟フニ徳川内府ニ於テモ五万ニ余ル軍勢ヲ卒シナカラ反逆ノ素心アラハ名城ノ聞ヘアル大坂城ニ楯籠リ軍ヲ興シ官軍ヲ引受可キニ臣等ノ妄動ヲ恐レ入り直ニ退坂致ス条 朝廷ヘ対シ抗スルノ意ナキハ明ナリ然ルニ内府退坂ノ後正月十二日 勅諭アリ其趣ハ今度慶喜 天朝ヲ欺キ奉リ反状明白既ニ兵端ヲ開キ候ニ付追討 仰出サル、也兵輩随從ノ賊徒反逆顯然タルヲ以テ 官位ヲ止メラレ夫々 御所分仰出サル、由其人々ニハ

徳川慶喜 奥州会津 勢州桑名 讃州高松 予州松山 備中松山 上総太田喜

右慶喜同意反逆顯然候間官爵ヲ削リ悉皆屋敷召上殘兵追放 仰出サレ候事

永井玄蕃頭 平山図書頭 竹中丹後守 塚原但馬守 戸川伊豆守 松

平大隅守 新見相模守 設楽備中守 榎本対馬守 牧野土佐守 岡部肥前守 大久保主膳正 小栗下総守 星野豊後守 高力主計頭 小笠原河内守 大久保筑後守 大久保能登守 戸田肥後守 室賀甲斐守 右之輩慶喜反逆明白賊徒随從反逆顯然候間官爵ヲ削リ追放 仰出サレ候事

若州小浜 志州鳥羽 日州延岡 濃州大垣 丹後宮津

右御所置之次第之アル間入京ヲ止メラレ候事

辰正月十日 参与

又此月京師三条大橋ニ高札ヲ建サセラレ又關州へ 御頒布相成ル其文ニ曰ク

徳川慶喜天下之形勢不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>止察<sub>一</sub>太政返上將軍職辭退相願候ニ付断然被<sub>二</sub>聞食<sub>一</sub>候既往之罪不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>問列藩上座ニモ可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>之ニ豈図ン哉大坂城へ引取候旨趣素ヨリ作謀ニテ去ル三日麾下之者ヲ引卒シ剩ヘ帰国ヲ被<sub>二</sub>仰付候会桑等ヲ先鋒トシテ 闕下ヲ奉犯候勢理彼ヨリ兵端ヲ開候上者慶喜反状明白始終奉欺 朝廷ヲ候段大逆無道其罪不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>遁此上者於 朝廷ニ御宥恕之道モ絶果不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>止已<sub>一</sub> 御追討被<sub>二</sub>仰出候抑兵端既ニ相開候上者速ニ賊徒誅戮万民塗炭之苦ヲ被<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>致度<sub>一</sub> 叡慮ニ候間今般仁和寺宮征討將軍ニ被<sub>二</sub>任候ニ付テハ是迄偷安怠惰ニ打過或者兩端ヲ抱キ或ハ賊徒ニ從ヒ候者タリ共真ニ悔悟憤発国家之為ニ尽忠ノ志シ有之候輩者 寛大之 思召ニテ 御採用可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>在候尤モ御時節ニ至リ不<sub>レ</sub>弁<sub>二</sub>大議<sub>一</sub>ヲ賊徒ニ謀通シ或ハ為<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>潜居<sub>一</sub>候者ハ 朝敵同様嚴刑ニ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>所問心得違無<sub>レ</sub>之様可致事

戊辰正月十日 参与

右ノ趣キ國中ノ大小諸藩ハ勿論都会辺境ノ諸民迄洩ス事ナク御布令アリ又仁和寺宮征伐將軍ニ任セラレ直ニ御下坂御鎮靜ノ由偕又若州小浜濃州大垣ノ兩家ハ是迄入京ヲ止メサセラレシ所謝罪ノ道追々相立チ今度追討ノ御軍御発ニ付北陸東山二道ノ先鋒兩藩へ 仰付ラレ成功ノ後チハ別段



思召モ在ラセラルヘキ事ニ付其旨相心得ヘク様トノ 御沙汰書ヲ以テ  
正月十三日参与ヨリ申渡サレシ由也偕モ征東ノ 御手配不日ニ 御定メ  
有セラレケル由国中ニ其聞ヘ有リ其伝説ノ人名ニハ

御親征大総督 有栖川帥宮職仁親王 参謀 正親町中将 西郷吉之

助 西四辻大夫 林鉄十郎 錦御旗奉行 穂波三位 河鱈<sup>ハタ</sup>大夫

東海道先鋒兼 鎮撫使総督 橋本少将 同副 柳原侍從 同参謀

海口界三 木梨精一郎 東山道先鋒兼 鎮撫使総督 岩倉大夫

同副 岩倉八千丸 同参謀 乾退助 宇田栗園 北陸道先鋒兼

鎮撫使総督 高倉三位 同副 四条大夫 同参謀 小林柔吉

津田山三郎 奥州羽州鎮撫使総督 沢三位 同副 醍醐少将

同参謀 黒田了助 品川孫四郎 海軍総督 聖護院宮雄仁親王

同参謀 庭田大納言 後藤外記 中山前中将 増田右馬之進<sup>カッ</sup>

東海道ヨリ進発ノ官軍諸勢先手ニハ日州佐土原ノ城主島津淡路守肥前大  
村ノ城主大村丹後守 薩州 紀州 長州 尾州 藤堂 備前 因州 越  
前 龜山等也

東山北陸両道ノ官軍諸勢ノ先手ニハ濃州大垣城主戸田采女正若州小浜城  
主酒井若狭守 薩州ノ別軍 長州ノ別軍 土州 因州ノ別軍 肥前ノ別  
軍 水口 郡山等ナリ斯ノ如ク諸道ヨリ道ヲ分テ大軍進発シ江戸城ヲ攻  
討ント隊分既ニ定マリテ不日ニ下向有ル可キ由注進櫛ノ齒ヲ挽カ如シ是  
ニ依テ江城混雑周章府下人民ノ狼狽大方ナラス眉ヲヒソメテ徒然ト時日  
ヲ移スニシタカイ京師ノ事態追々伝承致シ屢々愚議スルニ徳川家ニ於テ  
最初兵端相発キ候儀ハ曾テ承ハラス余義ナキ柔受軍サ然ルヲ現在兵端彼  
ヨリ相開キ候上ハ慶喜反逆顯然賊徒御征伐ノ御沙汰被 仰出蒙昧ノ臣等  
情姿如何ニモ嘆息是全ク幼 帝ノ叡慮トハ恐ナカラ存シ奉ラス何者ノ発  
出スル処ノ儀ナラント疑惑ヲ起シ過悞シテ悔恨ニ堪ス各意各慮ニ籌策ヲ  
建テ或ハ函嶺ノ関門ヲ鎖閉シ嶮岨ニ拠テ防カント云ヒ或ハ中山道ノ隘口  
ヲ杜塞キ敵ヲ待ント云ヒ或ハ海軍ヲ漕運シテ敵ノ空城ヲ襲ハント云ヒ又

ハ日光山ヘ会シ要害ニ兵ヲ伏テ花々シク戦カハンナド衆議ヲ擬<sup>コト</sup>トシテ述  
ルト雖モ左右ノ沙汰モアラズシテ俱ニ時日ヲ費スノミ又小臣兵隊ハ今ニ  
モ防禦ノ分隊手配等ノ触示有ベシト心々ニ準備シテ待設ケシニ憶ヒキヤ  
二月十一日ニ至リテ布達セラル、其文ニ曰ク

此度 御追討使御差向遊バサルベク段 仰セ出サレ候哉ノ趣キ遙ニ承  
知奉リ誠ニ以テ驚入恐入奉リ候次第ニ候右ハ全ク予カ一身不束ヨリ生  
シ候事ニテ 天怒ニ触レ候段一言之申上様之レナキ儀ニ付何様ノ御沙  
汰有之候共遺憾ナク奉命致シ候心得ニテ別紙ノ通り奏問状差出候之ニ  
依テ東叡山ニ退キ謹慎罷リ在罪ヲ一身ニ引受ケ只管 朝廷ヘ御詫ヒ申  
上億万ノ生靈塗炭ノ苦ヲ免レ候様致シ度ト至願此事ニ候就テハ何レモ  
予カ意ヲ體認シ心得違ヒ之ナク恭順ノ道取失ハサル様致ス可キ候事  
奏問状之写

此度 御追討使 御差向在ラセラル可ク哉ノ趣キ遙ニ承知奉リ誠ニ以  
テ驚入恐入奉リ候次第ニ御座候右ハ全ク臣慶喜一身ノ不束ヨリ 天怒  
ニ触候段一言ノ申上様御座ナキ次第ニ付此上何様ノ 御沙汰御座候共  
聊力遺憾ナク畏リ奉リ候所存ニテ東叡山ニ謹慎罷リ在リ其段下々ヘモ  
厚ク申諭シ飯令 官軍御差向御座候共不敬ノ儀等仕ラサセザル心得ニ  
御座候得共敵国ノ儀ハ四方ノ士民輻湊ノ地ニモ御座候得ハ多人数ノ中  
チニハ万一心得違ノ者之ナク共申難ク右辺ヨリ恭順ノ意ヲ取失ヒ不敬  
ノ儀等之アリ候節ハ猶又恐入奉リ候已而ナラズ億万ノ生靈塗炭ノ苦ヲ  
蒙リ候様ニテハ実以忍ヒサル次第ニ付何卒 官軍御差向ノ儀ハ暫時御  
猶予成シ下サレ臣慶喜ノ一身ヲ罰セラレ無罪ノ生民塗炭ヲ免レ候様仕  
度臣慶喜今日ノ懇願此事ニ御座候右ノ趣キ厚ク御諒察成下サレ前文ノ  
次第 御聞届ケ在サラレ候様涕泣歎願奉リ候此段 御奏問成下サレ候  
様願奉リ候以上

戊辰二月

右二通ノ書ト共ニ有司ヨリ大小ノ庶臣ヘ達ス其文ニ曰

此度 上意ノ趣キ御恭順筋トハ申ナカラ 御不束ノ御罪ヲ 御一身ニ引受サセラレ御謹慎在セラレバク候段臣下ノ分ニテハ実以テ恐入リ奉リ候儀ニ付御趣意柄厚ク相弁へ心得違之ナキ様致サレ可ク候事 東叡山へ御謹慎中西城ノ儀ハ田安殿松平確堂へ御頼成サレ候旨 仰出セラレ候間是迄ノ通り相勤メ候様致サレ可ク候事

辰二月十四日

此他自ラ手書セラレ川勝備後守ヲ以テ万石以下大小ノ諸臣へ触達セラル、其文ニ曰

此程相触候通り京都ヨリ 御軍勢 御差向ニ相成実以恐入リ奉リ候儀ニ付只管恭順謹慎シテ 御沙汰相待候事ニ付 官軍へ対シ決而粗忽ノ挙動之アル間敷右ニ付 天朝へ対シ恐入候儀ハ申迄モ之ナク且府下百万ノ生靈塗炭ニ陥入候様相成候儀ニ付実以テ忍ヒサル次第第二候假令忠義ノ心ニ出候共此旨相悖ル者ハ我意ニ背キ却テ予カ身ニ刃ヲ加フルモ同様ノ儀ニ付此旨篤と相弁へ心得違ヒ之ナキ様致ス可キ者也

戊辰二月十六日

此ノ如クニ触ラレケレハ大小ノ諸臣事皆案ニ相違シテ其方嚮ヲ失ヒ暗夜ニ灯火ノ消タルカ如シ斯テ慶喜公ニハ上野大慈院ニ屏居シ給ヒ只管謹慎ヲ而已守ラレ敢テ人ニモ見ミユル事ナク唯徒然トシ引籠ラレ鬱悒寂寥ノ余リニヤ

国の為民のためとしてはし身をしのふか岡にすミ染のそて 慶喜

斯ナン詠セラレケル之ヲ伝へ聞人々何レモ感激ニ堪ヘサリケリ偕モ彰義隊ノ面々ハ公恭順謝罪ノ為メ東叡山ナル大慈院へ謹慎閑居有ルニ付其近傍ノ守衛トシテ山内ノ諸院ニ屯集ス洪沢誠一郎天野八郎ヲ頭取トシテ是ヨリ諸隊士追々上野山内へ移転ノ者多シ茲ニ徳川麾下ノ臣忠義ニ抽ンズル輩衆議ヲ決シ勝某ノ邸宅へ推参シ問テ曰ク吾公恭順ヲ主トシ罪ヲ御一身ニ受サセ億兆ノ人ヲ助ケ給フハ恐入タル上慮ナレ共三百年来ノ鴻沢ヲ蒙リ代々安穩ニ過キ莫大ノ君恩ヲ荷ヒシ吾儕何ソ主家ノ廃亡ヲ坐シテ傍

観スルニ堪ンヤ今哉京坂ノ一事ニ於テ我ヨリ兵端ヲ開キシト有テ反状明白ノ罪ヲ唱シケレ共何レカ家来ノ過悞ナルヘキニ真偽モ糺サズ大兵ヲ加ヘ給フ事ハ吾等カ甘ンセラル、所ナリ原来吾公ノ反心ナキハ数代掌トリタル政權ヲ反上セシニテ忠不忠ヲ証スルニ足りナン殊ニ先年西藩ノ者兵ヲ挙テ 襟闕ヲ襲ヒ砲彈宮牆ヲ貫キシモ今其罪ヲ宥恕セラル別テ徳川ノ祖宗ヨリ 王室ヲ守護セシ勲功ハ天下一般ノ知ル所今一朝ニ滅セントシ給フハ最モ情ナキ 聖断ナリ吾々ハ主ニ棄ラレ一天ノ 君ニ憎マレ武運ノ尽タル処此上ハ国中ヲ敵ニ引受快ヨク戦死シテ累代ノ厚恩ニ報セン足下ハ殊更常々側ラニ從侍セラル何ゾ一言ノ諫モ奉シ玉ハ主ト同シク恭順ヲ良トシ三百年来魏々タル城郭ヲ敵ノ馬蹄ニ踏ル、ヲ耻チ給ハサルハ聴ヘ難シト席ヲ叩ヒテ討論ス何某是ヲ聞テ從容トシテ答フ足下等ノ言ル、所主君ノ恩義臣僕ノ忠節然カ有ルベシ余モ君臣ノ道聊カ知レリ然レ共方今ノ事ニ至リテハ公正ノ大義ニ係リテ私情小節ニ拘泥スレハ其理膺合セサル事アリ其故奈何トナレハ闔州ノ中チ徳川家ヲ始メ諸侯ノ采地ト云ヘル者ハ皆 朝廷ノ有ニシテ幕府ニ預ケ玉ヒシ也幕府又其地ヲ諸侯ニ分千預ケ置レシ者ニシテ賜ハリシニハ非サルナリ昔時清盛頼朝ヲ始メ執権北条足利数代織田豊臣徳川等迄武家ノ權勢盛ンニシテ 王室ノ威嚴衰微ノ時故推テ執政ノ職ヲ履ミ私有ノ如クニ進退セシナリ亦國中億兆ノ士民幕府へ附属セラレシ人ニテ幕府又其地ノ士民ヲ諸侯ニ分テ從者トセシ也是又下サレシ人ニハ非ラス故ニ世々皆職名ニシテ総追捕使ト云ヒ將軍ト云ヒ相国ト云ヒ大臣ト云モ土地人民ヲ預リ申セシ職役ノ名ト知ラル可シ然ルニ其地ヲ我物トシ私有ト思ヒ私ニ与ヘ私ニ奪ヒ其士民ヲ我物トシ私ニ臣トシ私ニ君トスルモ大義ニ於テハ私有ト云フナリ此思誤ヨリ罪ナキ家隸ヲ恣ニ自撃トナシ罪ナキ民ヲ冤枉ニ戮ス暴悪奸私生シト見ヘタリ三百年ノ泰平ヲ稱ヘテ徳川ノ勲功ヲ論スレ共之ヲ太平ニ治ムル事ハ国ヲ預ル幕府ノ職ニテ不平ナルハ其職事ニ疎カナルヨリ生スレハ敢テ誇ル可キニモ非ラス干戈ヲ動カスノミ乱ニハ非ラス動カザルノミ治ニハ非ラ

ス争戦ナシトモ乱レタル世有リ争戦アリテモ太平ナル世有リ然ルニ徳川家中業ヨリ以来中下ノ人心驕奢ノミニシテ上ヲ欺キ下ヲ虐シ甚敷ハ賄賂ナキニシモ非ラス断獄ノ理非撰挙ノ善惡明カナラサル事モ有リ故ニ万民真懷ニ服シタルニハ非ラス権ヲ以テ威服セシ而已是ヲ真ノ泰平トハ称シ難シ昔シ支那戰國ノ前周ノ王室ハ衰微セシカト猶両周ノ地ヲ有テリ我朝廷ハ中古ヨリ恰モ土地ノナキ周室ニ似タリ玆ニ二百余年領セシ武家ノ權政ト国民トヲ今般朝家ヘ返上セシ事当然ノ理トハ言ナカラ尋常ノ人ノ為シ得ザル処ニテ吾公ノ深意感スルニ堪タリ斯大義ヲ而已云ヘハ君臣モ忠義モ入ラヌ様ニ思ハルベケレ共左ニハ非ラス假令其行フ所言所忠義ノ道ニ合フト雖モ君ノ為ニヨロシカラス国ノ為ニ害アレハ不忠不義ニ当ル也足下等一時ノ悍勇ニ慄リ戰死スルヲ忠義トスレ共却テ主家ノ罪ヲ倍シ之カ為ニ無罪ノ士民ヲ殺サン事モ幾千万ゾヤ夫而已ナラス農事ヲ妨ケ国ノ疲ル、基ヲナスハ是忠義ニ似タル不忠ト云ハン乎情ラ之ヲ等スルニ軍ハ九分ノ敗ニシテ多クハ其功ナカル可シ其故ハ大小ノ諸臣驕奢増長シ兎角懶惰ノ久敷ニ流レ論強クシテ技実ニ柔弱ナル可シ吾公幸ヒニ前罪ヲ悔悟シ恭順謹慎ニ決セラル、モ尚申解難キ過失ナリト思ハレシナラン貴辺等若忠義ヲ思ハ、謹慎ヲ主トセラルヘシ然ラスレハ一ニハ吾公ニモ尊體ニ恙カナカルベシニハ千万ノ士卒等億兆ノ庶民塗炭ヲ免カレ三ニハ其謹慎恭順ニ依テ吾主家ノ立時期アナカチナキトモ定メ難シ之ヲ真ノ忠義トモ云ヘク又大丈夫トモ称ス可シ足下等如何思ハル、ヤト説得サレテ何レモ皆公正ノ大義論ニハ伏シ感涙ヲ催シ愁然トシテ暇ヲ告テ歸リ去リシカ偕解難キ魏ハ、朝廷ヘ權政返上セシハ去冬ノ事之レニ心ナキ証ナリ又伏見ノ暴動ハ当正月ノ事件也夫ト是トハ齟齬スルナリ然ルヲ曲テ暴戦ニノミ事ヲ寄ルハ姦藩ノ作謀ニ懼リシ事ナルヘシト更ニ疑惑消滅セス互ニ後会ヲ約シテ別レケル亦函嶺ヨリ西ノ方京拱近クニ采地有ル大小ノ諸侯ヘ達書ヲ以テ申渡サル其文ニ曰

一 祖宗以来今日ニ至ル迄各々忠勤ヲ抽テ候段感謝ノ至リニ候然ル処余

カ薄徳不行届ヨリ不計モ今日ノ形勢ニ至リ関西近畿ニ知行所有ノ面々ハ自然 朝廷ヨリ 御沙汰ノ品モ有之趣ニ付関東ニ罷在候ハ、采地ニモ離レ難洪致ス可ク誠ニ以テ愍然ノ至リニ候銘銘存寄次第采地ヘ退越 朝命遵奉生民安堵ニ相成候様所置致ス可ク候左候得ハ朝廷ヘ対シ恭順ノ旨意モ相立人民干戈ノ禍ニ懼ラス尊 王ノ素心ニ相叶ヒ候間聊カ懸念ナク銘々采地ヘ相越ス可ク候尤モ既ニ采地御引上ニ相成候者共ハ如何様共扶助致シ遣ハサル可ク候間其意ヲ得ヘキ旨 御沙汰之事

#### 辰二月

是ニ依テ江戸表ニ在府セシ外様譜代ノ諸侯何レモ御沙汰ニ依テ二月廿六日迄ニ引取ニ成ルトノ噂ナリ会藩モ二月十八日江戸表ヲ出立ス其節幕府ノ兵隊ニ大隊召連ラル、由庄内藩モ同廿二日ニ発足ス其附属タリシ新徴組并ニ兵隊一大隊願ノ上国許ヘ召連ラレタリ斯テマタ旧幕府ニハ諸臣防禦ノ計議ヲ容レス勝房州大久保一翁山岡鉄太郎其他一両輩ノミヲ召テ意中ノ密旨ヲ細ニ託シ去ル二月十二日西城ヲ出ラレ上野ナル大慈院ヘ閉居シテ訴罪在ラセラル、ニ付日光輪王寺ノ宮最モ慘痛ク思召シ見ルニ忍ヒス 朝廷江嘆願シ奉リ玉ハント上京ノ用意有リ執当覺王院ヲ召連レ二月廿一日發途セラル又凌雲院前大僧正顯王院恵王院ハ東山道追討使ヘ嘆願トシテ三月三日出立有リケリ然ルニ 御親征ノ大総督有栖川帥官并ニ鎮撫使ノ公卿方參謀及ヒ諸藩ノ兵士ヲ引卒シ二月某ノ日京地ヲ発帥有リテ尾州名古屋ニ滞陣シ夫ヨリ東海道ヲ御下向有ル日光御門主ハ既ニ小田原駅ニ滞留セラレシカ大総督既ニ駿府迄進マレ御在陣ノ由聞ヘシカハ三月六日急キ出立致サレテ即日駿府ニ於テ御対顔有リ慶喜恭順謝罪ノ儀段々嘆願仰セ入ラレ只管尽力有レシカハ其旨趣一々聞召奏問ヲ遂ラル可キノ旨御答ヘ有リ日光御門主ハ三月十九日帰山シ給フ又東山道ヲ登リシ東台ノ三院三月八日上州板鼻駅ヘ着此道下向ノ鎮撫使岩倉卿ヘ謁見ヲ請ヒ嘆願ノ旨ヲ申述ヘ暇ヲ賜ハリテ歸リケル斯テ旧幕府ニハ初メヨリ聊カ



恭順ノ意ヲ変セラレス先達テ中ヨリ臣下ノ者ヘ心得違等在ラサル様ニ書  
面ヲ以テ数回触ラレタレ共中ニハ大義ヲ弁ヘサル壮士等主君ノ謹慎ニ念  
ナキヲ云フ甲斐ナシト思フモ有リ同氣ヲ求メテ集会シ或ハ密カニ叩合フ  
風聞雜説穩カナラス之ニ依テ若シ足モトヨリ忘動等ノ異変ヲ生スル事モ  
在ラハ君公ノ配慮モ空ニ帰シテ最モ一大事タルヘシト有司ノ名々商議シ  
テ再ヒ達書ヲ以テ触示教誨諭告スル其文ヲ挙ル

勅使御下向ニ付先達テ中謹慎ノ御趣意相守候様度々仰出サレ候得共多  
人数ノ内ニハ心得違ノ者之アリ表ニ君命ヲ遵奉シ心中竊ニ不平ヲ抱キ  
候輩モ有之哉ニ相聞ヘ候右ハ素忠奮ノ心底ヨリ出候事ニテ臣子ノ今ニ  
於テ尤ノ儀ニハ候得共一兩人ノ心得違ヨリ上ハ我カ君御入寺御恭順在  
ラセラレ候御趣意モ水ノ泡ニモ相成リ下ハ億万ノ士民無罪ノ者塗炭紛  
乱ノ端共相成申ス可ク千歳ノ後迄モ御当家不正不信ノ名ヲ受サセラレ  
候様ニ相成候ハ、仮令誠忠ノ心ニテ一死ヲ遂ケ候共真ノ武士道ニ相叶  
ヒ申間敷候ニ付能々勘弁致シ忍ヒ難キ儀ヲ忍ヒ居リ候事ヲ忠良ト申候  
尤昨今 大総督府并ニ 官軍先鋒ヘモ夫々御申立ニ相成候次第モ有之  
候間御主意柄厚ク相守リ不忠不義ノ挙動致サス候様心得ラル可ク候

三月十五日

此外忘動ヲ制スルノ達書先日ヨリ数回触示ス夫ニ引替ヘ市中ニ張札有リ  
何者ノ所為ニ耶知ラス茲ニ挙ル

天地ヲ経論シ宇宙ヲ総統スル者唯名義之存スルヲ以テ也一日之ヲ廢ス  
レハ天地傾倒万姓塗炭ニ陥ル事言ヲ待ス窃ニ惟ルニ名文ノ廢滅今日ノ  
甚キカ如キ者非ス抑モ慶元以來至運日々開ケ横目豎鼻之者五常之廢ス  
ヘカラサルヲ知ラサル者ナシ保元乱天子義朝ニ詔リシテ父ヲ殺セシム  
万世之猶其肉ヲ噉ハン事ヲ欲ス王政ノ過チ是時ヨリ甚シキハナシ今日  
ノ形勢何ヲ以テカ之ニ異ナラン今般衆諸侯ヲシテ徳川家ヲ討シム其一  
ニヲ挙ケレハ因州備州ノ如キハ徳川内府ノ弟也井伊榊原ノ如キハ徳川  
家ノ臣也其他三百年來徳川家ニ臣従スル者也而シテ弟ヲシテ兄ヲ討セ

シメ臣トシテ君ヲ殺セシム天下後世是ノ政ヲ何トカ云ハン為義義朝ヲ  
殺ナリ為義ノ朝敵タル事明白也然レトモ尚屢々哀訴シテ命ヲ請フニ至  
ル況ンヤ今徳川内府ハ 天朝ニ対シテニタ心ナキハ万民ノ知ル処也假  
令真 勅ヨリ出ル共奉命スヘカラス然ルヲ今 天子幼冲姦臣權ヲ竊ミ  
猥リニ詔リヲ矯シテ追討ノ命ヲ下ス苟モ人心有者諫争シテ之ニ繼ニ死  
ヲ以テスヘシ是 皇国ノ大綱人臣ノ大義也而テ狗鼠ノ輩は大義ヲ知ラ  
ス甘メ姦臣ノ驅役ヲ受ケ東ニ向テ兵旗ヲ翻サント欲ス不義無道是ヨリ  
甚シキハナシ嗚呼当今天下文明五常ノ道照々タル世ニ生レテ嘗テ一人  
モ之ヲ諫メ之ヲ争フ者ヲ聞ス天日地ニ落テ海内俄ニ冥々タリ悲痛歎惜  
是ヨリ甚タシキハナシ苟モ之ヲ知ル者ハ志ヲ立テ迅ニ義兵ヲ挙ケ君側  
ノ惡ヲ誅シ名分ヲ正シ万世ノ後ヲシテ今ノ保元ヲ見ルカ如クナラサ  
シムル事今日人臣ノ節之ニ過ル者アランヤ然ラスシテ甘シテ賊ノ驅役  
ヲ受ル者ハ己レ不義ニ陥ルノミナラス 天朝ヲシテ不義ニ陥ラシメ四  
海万国ニ対シ 皇国ノ大名ヲ汚サシムルニ至ル其罪アケテ数算フヘカ  
ラス庶幾氣節ノ士之ヲ四海ニ伝ヘテ天下ノ義氣ヲ鼓舞作興シテ綱常ヲ  
維持セヨ

右等ハ主意ニ反スト雖モ誰有テ見咎メル者モナク復テ意ヲ同一ニスル者  
密々之アル由偕モ内府上野ヘ閉居ノ後ハ一橋田安両殿ヘ御遺託ニ相成且  
両殿ヨリ嘆願等ノ儀モ種々伝聞アレ共何レモ同意ノ文故省略ス斯テ追討  
官軍ノ御先鋒既ニ品川駅ニ着陣在リ時ニ徳川麾下ノ臣勝安房守軍門ニ  
至リ參謀西郷隆盛ニ見ヘ慶喜恭順ノ意ヲ述テ軍事ヲ止メラレン事ヲ請フ  
隆盛其謹慎ノ実否ヲ問ヒ定メ是ヲ 大総督ノ宮ヘ啓シテ其実行ヲ立可キ  
ノ由ヲ命ス尤モ其間勝房州ノ往復数回懇悉ノ周施仰渡サレノ条々畏リ奉  
ルノ旨ヲ陳狀ス此房州ト隆盛ノ両士ハ元來同学ノ人ニシテ兼テ相識ル中  
ナリシカハ此大難事ヲ解ニ至レリ且大久保一翁山岡鉄太郎トモニ之カ羽  
翼トナリテ尽力セラレシヲ以テナリ今此人々ナカリセハ府下億万ノ生民  
塗炭ヲ免ル可ケンヤ実ニ希世ノ良士ト称ン乎時ニ有栖川宮評議有テ諸軍



へ命令ヲ伝ヘラレ暫ク攻戦ヲ制シ止メ諸道ノ 官軍ヲ府内ニ置キ其非常ヲ戊ラシメ且東北ノ遠近諸州ヲ鎮定スルノ設ケトス是ヨリ諸軍追々ニ江戸ヘ入テ処々ニ屯居ス斯テ四月四日 勅使江城ヘ御入り有リ徳川ノ臣等礼服ヲ整ヘ各々道ニ出迎ヒ田安中納言之ニ謁セラル橋本柳原両卿ヨリ相渡サル、 宣旨ニ曰ク

徳川慶喜 天朝ヲ欺罔シ奉ルノ末終ニ言可カラサルノ所業ニ至ルノ段深ク 宸襟ヲ悩マサル之ニ依テ 御親征海陸諸道進軍ノ処悔悟ニ念ナキノ趣 聞シ召レ 皇愍ヲ垂サセラル、ノ余リ別紙之通 仰下サレ候条謹而御請之有ル可ク候就テハ本月十一日ヲ期限トシ各件所置致ス可キ様 御沙汰之事

右限既ニ寛悠之 御沙汰ニ候上ハ更ニ嘆願哀訴断然 聞召サレス恩威両確乎不拔之 叡慮ニ候速カニ拝膺異儀有ル可カラサル者也

# 別紙

## 第一条

慶喜去ル十二月以来 天朝ヲ欺キ奉リ剩ヘ兵力ヲ以テ 皇都ヲ犯シ連日錦旗ヘ発砲シ重罪タルニ依リ追討トシテ 官軍差向ラレ候処段々真実恭順謹慎ノ意ヲ表シ謝罪申出候ニ付テハ祖宗二百余年治國ノ功業少ナカラス殊ニ水戸贈大納言積年勤王之志業浅カラス旁以テ格別深厚ノ思召在セラレ左ノ条件実行相立候上者 寛典ヲ処セラレ徳川家名立下サレ慶喜死罪一等宥メラル、ノ間水戸表ヘ退キ謹慎罷リ有ル可キ事

## 第二条

城明渡シ尾張藩ヘ相渡ス可キ事

## 第三条

軍艦銃炮引渡シ申ス可シ追テ相当差返サル可キ事

## 第四条

城内住居ノ家臣共城外ニ引退キ謹慎罷在ル可キ事

## 第五条

慶喜叛謀相助ケ候者重罪タルニ依リ嚴科ニ処セラル可キノ所格別 寛典ヲ以テ死一等ヲ宥メラル可キノ間相当之所置致シ之ヲ言上スヘキ事但シ万石以上ハ 朝裁ヲ以テ 御所置有ラセラル可キノ事

右ノ通り 勅状御渡シ有シカハ田安殿 命ヲ奉シ即日上野山内成ル内府ノ屏居ヘ至ラレ 宣旨別紙共ニ達セラレケリ是ニ依テ仰渡サレシ旨趣并ニ五箇条之儀領承仕リ決テ違背之ナキ段速ニ御請有テ其向向ヘ令セラル且右之 勅書別紙ノ写書ニ添テ大小ノ諸臣属ニ布達スル其文ニ曰ク

昨四日 勅使別紙之通り 仰渡サレ予カ恭順謹慎ニ念ナキノ段辱クモ 叡聞ニ達シ 皇愍之余リ寛典ノ 御沙汰ヲ蒙リ候段実以難有仕合ニ候素ヨリ一同ニ於キ 聖旨遵奉致ス可キハ申迄モ之ナク候得共若心得違ノ者之アリ候テハ相済ス候右ニ付兼々相達シ置候事ニテ今更教誡ニモ及バサル儀ニ候得共猶又厚ク相心得 叡旨尊奉致ス可キ事

# 四月五日

斯ノ如ク認メテ有司ヨリ諸向ヘ触ラレ夫ヨリ江戸表テ都而ノ事ハ田安殿ヘ御遺託在リ内府ニハ四月十一日ニ上野東叡山寛永寺ヲ退幽水戸表ヘ発駕セラル従者少々召連タルモ悉皆質素ヲ宗トシ其様姿如何ニモ省略恭順謹慎ヲ守レルノ牀諸人遙カニ望ミ見テ感嘆スル者多カリケリ是ニ依テ江戸ノ本城西城内外郭共田安殿一橋殿指令シテ改メノ上官軍ヘ相渡サレ徳川家累代伝来ノ重器ハ残ラス上野ヘ転送シ寛永寺ノ中堂ニ納メ置キ彰義隊ノ輩ラニ此護衛ヲ命セラレタ此彰義隊ハ内府上野ニ屏居ノ節願ノ上市中ノ非常ヲ警メノ為メ上野ニ集屯ス又日光輪王寺ノ宮ヲ守護ス然ルニ彰義隊ノ人数ハ日増ニ追加ス今ハ一千余ニ及ヒ附属ノ隊最も多シ其外徳川家唱義ノ名々万石以下高知ノ人此内ニ加ハル面々ニハ

池田大隅守 春日左衛門 吉田貞二郎 天野八郎 菅沼伊勢守 小田井藏太 川上専三郎 織田主膳正 小村俊之助 洪沢誠一郎 近藤武雄 新井良太郎 相山左門 大塚霍之進 加藤順一郎 酒井宰輔 本田真十郎 松本主膳正 大河内扇吉

彰義隊江附屬ノ隊々伝聞ニ由テ挙ル

純忠隊二百人 遊撃隊百人 八連隊三百人 万字隊百余人近田六良太  
夫 神木隊百人百瀬雄二良 臥竜隊三百人 旭隊百五十人 松石隊七  
十人 一番隊土井八郎 二番隊菅沼房二郎 三番隊松本左エ太 四番  
隊島井常哉 五番隊松本鼎 六番隊浅川文二郎 七番隊石川善一郎  
八番隊木下七郎 九番隊大谷口竜太良 十番隊高橋真吉 十一番隊佐  
久間末二良 十二番隊比良田良八 十三番隊安藤寛造 十四番隊今井  
磐 十五番隊古谷万太良 十六番隊西村賢八良 十七番隊村越三十良  
十八番隊山崎政五郎 遊軍隊加藤光造 同副新見鎌作

本宮

寒松院詰  
秋元幸之丞  
丸茂鞆負

高山健太郎  
斎藤亀吉  
天王寺詰  
加藤大五郎

中川喜代之進  
今井貞次郎  
花股仙之助

小川昌太郎  
久保田俊輔  
記録掛  
斎藤金左エ門

阿部杖策

器械掛  
松崎平三郎  
田中清三郎

飯田豊之丞  
百井求之助  
會計掛

右ハ旧幕府ノ役員何レモ組頭以上ヲ勤メラレシ名々也  
此外山内ニ群集スル人々ニハ

酒井雅楽頭 板倉伊賀守 小笠原孝岐守 竹中丹後守 久世隠岐守  
室賀美作守 加藤下総守 永井主水正 春日半五郎 大久保七良左衛  
門 中条金之助 竹本七良左衛門 榊原鍵吉 大谷源右衛門  
諸藩脱走之士

榊原式部大輔之浪士 酒井修理大夫之浪士 松平右近之将監之浪士

松平兵部大輔之浪士 牧野備前守之浪士 本多美濃守之浪士  
仙台藩之浪士 米沢藩之浪士 会津藩之浪士 庄内藩之浪士  
此外

清風隊 貫義隊 水心隊 明石隊 誠意隊 青龍隊 竜興隊 赤心隊  
歩兵隊 撒兵隊 騎兵隊 等也

右之諸隊士悉ク寛永寺ノ諸寺院ニ集屯スサシモ広大ナル山内ニ充滿シ一  
ハ輪王寺宮ヲ守護シニハ江戸府下ノ非常ヲ警メ三八徳川家ノ重器ヲ護衛  
シ四ハ主家累代ノ墳墓ヲ守衛ス然レ共其実情ハ旧幕府ノ恭順謹慎早晚  
朝廷之寛典ニ逢ヒ徳川家名ノ再興ヲ俟ツ而已其興発ノ有無ニ由テ名々我  
カ身ノ進退ヲ定メントスルノ意ナルヘシトノ聞説有リ是ハ彰義隊ノ目途  
鼠价等惟フニ兼テ前件ニモ申セシ如ク大義ノ論ニハ伏スト雖モ現在ノ成  
行ニハ伏シ難ク其故如何ン夫徳川内府太政返上ハ去冬ノ事はハ 天朝ヲ  
欺キ奉リシニハ有ヘカラス其身不肖ニシテ政權保護行ヒ難キヲ以テ也又  
伏見表ノ暴動ノ件ハ当正月ノ事ナリ譬ヒ吾「此レ」ヨリ兵端ヲ開キシニ  
モセヨ主命ナキ無名ノ争戦是レ「皆」從臣ノ過失ナリ其証ハ内府即日東  
帰直ニ恭順臣等ノ過罪ヲ一身ニ引受屢々哀訴ス 朝廷其実否ヲ糾問シ其  
上徳川家逆意アラハ 御討伐有ルヘキニ左ハ無クシテ只「畜」伏見表ノ  
變動而已ヲ挙テ彼ヨリ先ヘ兵端ヲ開キシト作謀シ違心モ糺サス喋々ト唱  
鳴シ錦旗ヲ御差向遊ハサレ候ハ真ノ 聖断トハ恐ナカラ存シ奉ラス只管  
激憎ノ所意真 勅ニ有ラサル可シト頑辟憤嫉過悞ノ邪念消滅セス又頑愚  
ノ者商議スルニ抑モ保平以來天下ノ動乱梟雄奪ヲ事トシテ生民塗炭モ  
亦極ル此時ニ当テ東照宮奮然大義ヲ唱シ百戰千闘卒ニ天下ヲ戡定セラレ  
上ハ 帝王ヲ安ンシ奉リ下ハ万民ヲ撫育シ朝典文明ニシテ四海仰光諸侯  
業ヲ伝ヘテ世太平ヲ謡フ事殆ント三百年尊 王安民ノ功是ニ超ル者アラ  
ン哉 天朝之ヲ啓嘉シテ以テ將軍ニ權叙シ以テ不次ニ位シテ今ニ至ル  
皇恩ノ厚キモ亦至レリ尽セリトス然ルニ去冬非常御改革以來 天意幕情  
隔絶致シ稍嫌疑事件有リト雖モ否ム事ナシ又天下ノ協力万国並立ノ策ハ

徳川幕府ノ素心ヲ 奏聞シ 宣旨ヲ請フテ掟約ヲ決ス豈敢テ 天意ヲ背  
キ 闕下ニ抗スルノ意ナキハ神心ノ知ル処論ヲ待タスシテ明カナリ仮令  
兵端相発ラキ 宮裏ヲ驚シ奉ル条ニ至ル共恐懼謝罪ハ臣子ノ常分入寺恭  
順無他ノ真情顯レ候上ハ祖宗以来ノ奮功御垂愍ノ上百世御宥有ラセラ  
レ可クト 聖恩ヲ仰キ奉ル所図ンヤ内府水府へ退幽城地器械船艦共御取  
上ノ 御沙汰ヲ蒙リ三百年來ノ奮業一朝ニ絶滅ニ至ル然ルト雖トモ内府  
ニ於テハ無他ノ情願ヲ貫通シ時々ノ触書ヲ以テ臣等動揺有テハ 天朝へ  
対シ恐入誠意モ相立ス万民塗炭ニ陥リ候様相成ルヘクト深キ御尊慮ノ程  
有リ難タケレ夫レ反対シ鼠价等事態ヲ過失シ唯々幼 帝ノ真勅ニ有ラサ  
ルベシ姦臣甘心ンシテ妄リニ詔リヲ矯シテ錦旗ヲ動カシ追討ノ命ヲ下ス  
成ヘシ徒ラニ傍觀スル所ニ非ラスト商議決シ日光山ニ拠リ主家ノ回復ヲ  
祈ラント有志ヲ募リ四月十一日曉天ニ江城ヲアトニシ出發ス「扱テ」今  
日城渡シノ御都合ニ相成両城受取トシテ 官軍早天ニ諸口ヨリ御大勢御  
操込トノ趣キ昨夜御達シ有リ斯テ此日脱藩ノ各士ハ下総国市川宿へ追追  
ニ馳着シ既ニ千有余人ニ及フ会津庄内ノ脱士モ合併ス又茲ニ於テ諸士ト  
會議シ斯成リ果ル上ハ主家ノ回復ヲ祈ルノ外策量ナシト決議シ兼テ希望  
ノ日光山神靈ニ謁拜シ義心ヲ立ヘシト淺織ノ愚々タル瞎談ヲ梁トス依テ  
ハ路中ノ非常モ如何ト隊伍順序ヲ定ム又爰ニ肝要ノ一事物有リ其故ハ此  
混動ニ事ヲ許リ近アフレ者杯压倒シ人民ヲ威シ金銀ヲ檀奪スル族ヲモ有  
ルヘシ又隊中ノ者タリ共油斷ハ成リ難シ之ニ依テ其警メ方ヲ設ケ可シト  
議スル者有リ是レ至極ノ事ト決シ一隊毎ニ軍目四名ヲ置キ其變異ヲ昼夜  
共ニ制ス(朱書)「其則タルヤ」第一人民ヲ威シ妄ニ金銀衣類等ヲ借り  
受ケ或ハ路傍ノ人民へ迷惑ヲ懸ケ又ハ農事ヲ妨ケ侵害ヲ醸ス者ハ輕重ヲ  
論セス軍例仮則ニ拠リ直ニ罰首致スヘキ旨隊々ハ嚴重ニ諭告スハ途中  
ト云ヒ罪ヲ糺スノ余暇有ラサレハ也偕○十二日快晴早天ニ隊伍順序ヲ立  
テ市川宿ヲ發途ス其順伍吾隊ハ竜興隊ト唱へ第一番人員六十名大砲二門  
附屬故へ諸隊ノ先頭ニ立第二番傲震隊人員六十名大砲護衛ヲ兼ル第三番

伝習兵隊人員凡六百名第四番工兵隊人員三百名第五番回天隊人員百名余  
總計千百余人總轄ハ大鳥圭介隊長加藤平内同副内藤隼人朝比奈虎之助分  
隊長天野加賀守逸見鎌策秋月登之助天野電四郎和田久太郎飯岡欽二郎軍  
事掛リ會計兼会藩工藤衛守松井九郎等也吾カ竜興隊松葉權平上条梅之助  
小倉源二郎浜村米三郎川崎準三郎小山精一郎川村国太郎藤野太郎二郎塩  
谷敏郎金田吉十郎内田鎧三郎小島介左エ門沢田啓十良岩城庄平池田榮助  
右大砲打方ヲ心得交番ニ指揮ス外ニ銃士四十余名市川宿ヲ發シ同国小金  
井宿小休ミ旅泊ス此返都テ田畑共少クシテ原野平山多シ○十三日快晴小  
金宿出立行程五里同国布施宿旅泊此近傍ニ昔シ平親王相馬將門ノ築シ古  
城ノ跡有リ里人内裏カ原ト唱ス草芒々トシテ外堀ハ深シ又池沼多シ故ニ  
鯉鮒ノ類ヒ多獵ス○十四日快晴布施宿出發行程凡二里進歩ノ所藤田光造  
馳セ来リ急変モ計リ難シ至急布施宿迄引返シ度由報告ス依テ布施宿迄直  
引返シ方面へ探索ヲ出シ隊ヲ分配シテ報知ヲ待ツタ刻ニ到リ探索ノ者  
追々立復リ告テ云フ今朝ヨリ関宿辺ニ当テ砲声盛シニ聞ユ此近傍ニハ別  
異ナキ由併ナカラ関宿迄ハ纔カ五里以内ノ距離殊ニ夜中ト云ヒ油斷致ス  
間敷様ト触ラル此夜ハ布施宿近在ノ寺院ニ宿泊ス番兵最モ堅固ナリ變事  
ナシ○十五日快晴同宿出立同国水海道宿へ着塩谷敏郎儀今日ヨリ會計補  
兵糧方宿割兼務託サレケリ偕々刻ニ到リ草風隊五十名追着ス則チ合併尤  
モ短兵多シ当宿ハ水戸街道ニテ田舎ニ稀ナル繁昌ノ地也○十六日快晴同  
宿出發正十二時同国宗堂村へ着中飯茲ハ名ニ逢フ緒川ノ端ニシテ川魚多  
シ当所ニ於テ遠近ノ模様ヲ搜リ得ルノ為メ暫ク憩息ノ内午後三時頃西北  
ニ当リ大砲聲頻リニ相聞ユ依テ斥候ヲ走ラセ否哉ヲ待ツ二時程過テ立戻  
リ是ハ結城ニ戰爭有ル由ト報ズ隔ル事爰ヨリ四里又途中ノ雜説ニ奥州街  
道ヘモ江戸方多人數御通行ニ付所々ニ戰爭有リ今日ノ砲声モ結城ニ於テ  
江戸方ト戰爭ナルベシトノ風説有リシト告ス又真岡表ノ某ヨリ報知有リ  
茲ヨリ東北ニ当テ四里余野州下館ノ城主石川某徳川脱士日光ヘノ通路ヲ  
塞キ討取ツテ感賞ヲ請フ可シト専ラ用意セラル、由急告有リ之ニ依テ評



議有り隊中へ触レケルハ吾輩等素々闘戦ハ求ル所ニ非ラスト雖モ余義ナキ場合ニ逼ラハ可否ヲ論スルニ及ハス何レモ其心得ニテ差図ヲ待ツヘシト也偕又爰ニ下妻ノ城主井上某ノ老臣今村昇金子健作外ニ士分五人兵卒四人大砲一門転運シ脱シテ吾隊へ合併ス斯テ此夜十時頃急ニ銘銘へ腰兵糧ヲ渡シ宗堂村ヲ雷発ス之ハ下館城へ不慮ニ迫ランカ為ノ策謀也○十七日快晴昨夜ヨリ四里余ノ道ヲ今朝マダ薄ス暗ラキニ下館町へ着城下或ハ近傍ノ形勢ヲ探ルニ攻戦ノ論議決スト雖モ城主ハ官軍ノ召シニ依テ宇都宮へ出頭家臣ハ城下某寺へ集合シ軍議決スト雖モ兎角因循ノ由斯テ吾カ総隊ハ城ノ諸口へ隊ヲ配当シ大手并ニ某寺へハ大砲ヲ準備シ事宜ニ及ハ、迅速ニ炮発致スヘキ姿勢ヲナス又草風隊ハ鎗鋸ヲ携ヘ市中ヲ旋回シテ其威風ヲ顯ハス市中ノ周章大方ナラス偕テ又内藤隼人松井九郎ノ兩人ハ一小隊護衛ニテ城中へ参向重役ニ面会シテ談判ニ及ブ諸隊ハ両士ノ報告ニ依テ戦争ニ相成ル可シト何レモ奨励シテ相待チケリ然ル処午前十時頃重役二人内藤松井ト連立門外迄出諸隊長へ懇篤ニ礼有り城内へ案内ス其上曾テ違心無キ意ヲ述テ其証トシテ兵ヲ指出ス依テ此日当町ニ滞在シ東照宮ノ御祭日故快ヨク祭典ヲ遥拝ス○十八日快晴石川氏ヨリ差出セシ兵五十名総隊へ交附シ下館ヲ出発ス―石川氏ヨリ出セシ人数何レモ士分ニテ立派ノ出粧ナリシカ十九日宇都宮攻戦ノ節不殘逃亡致シタリ是ハ砲声ニ恐怖シテ歟又ハ仮ニ和談シテ一時患ヲ遁レシニヤ不詳―行程五里長田村当村へ宿泊ノ積リ小里ニシテ如何ニモ不都合殊ニ糧米買上ケ方ニモ差間へ近郷へ夫々分宿ス吾隊ハ爰ヨリ凡菴里上ミ緒川ノ端ナル勝瓜村へ宿泊里人ニ此辺ノ景況ヲ問フニ宇都宮ノ人数今朝迄川ヨリ菴里程隔テ陣ヲ張り候由之ハ江戸方ノ通路ヲ断切ルト云フ説有り又昨夜篝火モ相見ヘタリト云フ又有説ニ今朝引上ケタリトモ云ヒ事実判然ナラス□□諸長衆議ノ上夜十時頃俄カニ触ラレケルハ至急川ヲ越ヘテ宿泊致ス様之ハ緒川ノ渡船ヲ止メラレナバ頗ル難儀ナル故也又川ヲ後ロニシテ宿陣スレハ味方ノ奮勵究ル事古書ニモ見ヘタリ夫ヨリ窃ニ川ヲ渡レハ直ニ蓼沼村当所へ

宿ス百方へ哨兵ヲ出シ油断ナク旋回ス宇都宮ノ人数ハ今朝引上ケシ由ニテ異変ナシ明レハ○十九日快晴同村出立行程二里北川村道ノ傍ラニ篝火ノ跡有り村人ニ様子ヲ聞ニ昨夜迄宇都宮ノ人数固メラレシカ今朝俄カニ引取りシト云フ又聞ク此方共来リシ故ナルカ左様ノ事ハ存セス昨夜宮ヨリ使者来リタリ夫故引払ヒタルヘシト云何故ニ引取りシヤ真偽分ラス不思議ニ存ス愈疑ヒ爰ヨリ斥候ニ清兵ヲ立伏兵ノ有無ヲ探リ行進ス此辺ハ都テ原野曠々トシテ樹木生茂リ人家少ナシ凡菴里程進歩ノ所又左右ノ路傍ニ篝火ノ焚残リ多シ一村有リト雖モ戸ヲ閉テ人無キ躰故猶以テ不審堪ヘス爰ニ至テ差支ノ一事有り今朝程飯米乏シクシテ腰兵糧ノ用意ナシ依テ当村へ其用意ヲ頼トスヘシト漸ヤク人ヲ尋ネ求ム斯テ諸隊当村ニ休息ス又人ヲ走ラセテ村長ヲ招ク村長ニ昨今ノ形勢ヲ問フニ村長ノ曰ク江戸方大勢ノ趣キ風聞有り依テ所々へ出セシ人数ヲ引上ケ一纏メニ成ツテ攻戦致ストノ説ナリ偕又近在へ昨日急ノ御触書ハ今日中ニ逃去ルヘキトノ事依テ老幼ハ早速遁シ男菴人宛残リシ所へ各方御通ト見受一散ンニ我々モ遁ケ去リタリト云フ又宇都宮勢一手ニ成リ固ク喰留メ討取ルトノ趣キ故御用心肝要ナリト告ス其深切成ル面ニ顯ハレケリ又兵糧ノ用意ヲ頼ムニ心能引受早速取掛ル追々二人夫モ来ル様子併シ宇都宮近ノ事故斥候ヲ出シ辺リヲ巡邏致サセ堅固ニ守衛致シケリ斯ル所ニ午前九時頃宇都宮辺ヨリ来ル馬有り戸障子或ハ雜物ヲ附交セタリ馬夫ヲ呼留メ宇都宮辺ノ様子ヲ聞ニ更ニ知ラサル由其様マ偽言ト察シ殊ニ荷札ニ宇都宮家来何某ノ名号有り依テ馬士不都合ノ申訳ヲ遍テ問フ馬士理ニ伏シ明白ニ云フ之ハ宮某ノ品ナリ真岡ノ親類へ附送ルニ相違ナキ由又爰ヨリ凡三十町程先キ麦田ノ中又ハ畔陰ニ凡二三百人モ潜伏致シ居リ誰ニ逢フテ問ハル、共必ス爰ニ人有リト云事ナカレト固ク断リタリト云フ此事偽リニハ非ラスト察シ其者ハ放シヤリ村長ニ扨テ伏兵ノ地理ヲ問フニ是ヨリ西北ニ当テ少サキ川有り地窪クシテ宇都宮城ノ堀水ノ流末ナリ夫ヲ伝フテ進マハ伏勢ノ後口へ出ヘシ是ハ細キ畦道故定メテ要害ハ有ルマシト云然ラハ敵ノ虚



ヲ打破ルヘシ此所ニテ時ヲ移シ敵ニ探ラレナハ喻々敷大事ナリト兵糧モ其俣ニ捨テ置キ勇兵ヲ斥候ニ出シ本道ニ進軍スル隊ニハ先鋒ハ吾カ竜興隊大砲三門前後護衛隊続テ伝習大隊回天隊工兵隊本営ノ前後ハ別伝習伝法隊ナリ閑道ニハ草風隊士官隊伝習ノ三分隊里人ヲ案内者ニ立進軍ス本道ノ隊凡廿町程進ミシ所斥候隊砲発スルヤ否ヤ麦田ノ中畔蔭ヨリ小銃ヲ打出ス事乍左雨ノ如シ又正面ヨリ大砲二挺激烈ス味方モ左右ニ開キ畔陰小溝ニ鉢ヲ寄セ銃丸ヲ除ケ容捨ナク散弾戦闘スル事凡一時間其内兼テ閑道ヲ進ミシ隊地神ノ森ヲ楯ニ取テ敵ノ斜メヨリ打掛ル事急ナリ敵不慮ニ打掛ケラレ防クニ策ナク狼狽ノ色見ヘケレハ此勢ヒニ踏チラセト進軍喇叭ヲ烈ケ敷吹セケレハ此勢ヒニ敵シ難クヤ大砲銃器モ棄テ敗走ス味方此図ニ乗テ突入ルヘシト烈敷下知ス吾カ兵火急ニ攻撃ス城兵町口ニ火ヲ放ツテ急場ヲ防キ周章タ、シク城中ヘ引上ル此頃ノ日和続キニ風少シ有テ火先紛散猛火翻々トシテ焰ヲ盛ン也依テ近傍ヘ寄附ク事態ハス斯テハ果テシト東南ノ両門ニ逼ル城兵堅ク門扉ヲ閉シテ防禦ス又大小砲ヲ散弾スル事恰モ霰ノ降カ如シ吾兵モ急ニ堀際マテ切迫シ壘境ニテ銃丸ヲ凌キ大砲ハ地神墳ヨリ本丸ヲ目適ニ発砲ス双方ノ激弾乍左大雷ノ如シ其内風変テ煙リ東ニ這ヒケレハ隊長急ニ回天隊ノ鎗士ニ指揮有リケルハ大手ノ方今空ナリ迅ニ短兵ニテ突破ル可シ城兵大手ヘ人数ヲ援サ、ル内ナリ又砲隊ハ東南ニ向テ猶モ烈敷激発スベシ又伝習隊ハ回天隊ノ羽翼トナツテ大手攻撃ノ援ケヲナスヘシ斯八方ヘ逼テハ城兵防禦ノ度ヲ失フ可シ早く短兵大手ヘ突戦ス可シト乗回テ透モナク下知ス銃士奮勵シテ打掛ケレハ案ニ違ハス城兵防ク策ヲ失ヒシニヤ銃勢空丸ノミ多シ此氣ニ乗シテ回天隊大手ヲ突破リ門内ニ入りテ攻戦シ味方死傷多シ尤モ刀撃故ヘ敵ヲ討事モ多シ此勢ヒニ当リ難クヤ敵本城ヘ楯籠ル偕東南ノ銃士モ大手ノ破レシヲ聞テ奨励シテ一ト按ニ打破ント打立テケレハ此敵モ本丸ヘ引上ケル吾カ兵三ノ丸ヘ乗込ミ是レヨリ三ノ丸ニ暫時砲戦城兵勝利ナキヲ量リシニヤ城主戸田氏ハ西門ヨリ雀ノ宮ノ方ヘ落走ス其由諸隊ヘ報シケレハ味方

倍ス氣ヲ得テ攻戦激烈ス城兵防キ砲ヲ飛スコト以前ニ倍セリ時ニ軍目馳廻リ高声ニ告テ云城兵ノ防キ弾ハ主人ノ落延ル迄ノ防キナリ最早空城モ同様取フ一ト奮発ニテ攻メ抜クヘシト触示ス吾カ兵勝鯨波ヲ上ケテ総軍一声ニ懼ル此勢ヒニ辟易シテヤ鯨波ノ声ヲ合セテ間モナク開城ス吾カ兵之ヲ敢テ追討セス只日光山ノ通路サヘ開ク上ハ曾テ開戦ヲ望マス偕落城ニ相成ケレハ本丸ニ乗込一見ス又落残リテ潜居致ス者三人捕押ヘ城中是迄ノ様姿ヲ聞ク処屯人ハ野州真岡町御代官山内某ノ手代松井某ノ伴作之助ト云フ外二人ハ常州笠間ノ城主土屋氏ノ夫卒ノ由偕城中ニハ薩州長州ノ人数凡百人笠間下館壬生三家ノ人数凡百五十人彦根大垣ノ人数凡三百人当城ノ人数共凡八百人計リ又笠間下館壬生彦根ノ勢ハ去ル十七日小山宿ノ争戦ニ敗走シテ当城ヘ引上ケ休兵ノ由事他ハ存シ申サストノ事彼等ノ申ス処偽言ニモ之ナク又サシタル者ニモ有ラサレハ三人共放逐ス時ニ討取首級調ヘシ処士分十九夫卒五ツ何レモ姓名存セス依テ其俣夫人ニ埋サセケリ又吾隊ヲ調ヘシ所討死十六人手負十八人死骸ハ城外寺院ニ埋葬ス吾カ大砲隊ニテ討死差図役小倉源二郎深手同浜村米三郎深手銃士角田梶太郎外二兵卒二人大隊ノ死傷ハ印スニ暇マアラス今日ノ争戦午前十時ニ発シ午後四時ニ畢ル偕又戦闘中近隣ノ村家ヨリ掘リ飯ヲ持ラヘ軍サノ見舞トシテ軍中ヘ運フ事夥タ、シ察スル処城主ニ懷伏セスト見ヘタリ偕又城兵落去トハ云ナカラ不案ノ地殊更暮昏ニモ近ケレハ入城ヲ制シ外城ニテ懇恵ノ兵糧ヲ食シ午後六時ヨリ蓼沼村迄四里余ノ道ヲ引上ケル之ハ敵ノ計策在ラン事ヲ謀ツテ也又手負運送方ノ人夫ニ聊カ差間ナク夜十一時頃蓼沼村ヘ帰着勝チ軍サノ酒肴割与有リ諸口ヘ哨兵ヲ配シテ当村ニ宿陣ス○二十日快晴早朝廻文有リ今日行進ノ隊ハ伝習隊回天隊士官隊工兵隊徹震隊別伝習隊右ハ差図次第進軍致ス可シ大砲附属竜興隊ハ伝法隊ト申シ合セ当所ニ滞在疵兵ヲ看護方ニ心附ケ彈藥器械等ニ猶又注意致シ総轄ヨリ報知次第差間ヘナク搬運致サレ候様致ス可キ由依託ニ相成ル之ニ依テ医師ヘ托シテ篤ク療護ヲ施コシ又機械等ヘモ心ヲ配リ両様共不時ノ

報告ニテモ差支ナキ様ニ注意シテ報知ヲ待ツ○二十一日快晴早朝宇都宮ヨリ報告有リ疵兵器ノ手当ヲ致シ今廿一日宮城へ入着致ス可キ由依テ人夫へ差図シ午前八時蓼沼村ヲ出発午後二時滞ナク入城ス偕又去ル十七日小山宿ニテ鬪戦致セシ第二伝習隊第七連隊御料撒兵凡五百人程宇都宮ノ争戦ヲ聞テ壬生街道ヨリ当城へ廻リ昨廿日参着ノ由何レモ同意ノ者故異義ナク合併又昨朝人員取調ラヘシ所下館ノ家来ハ残ラス逃走又徳川家脱士モ二百人余遁走都合三百人減兵今日合併ノ兵共千百人ヲ過キス右兵城ノ内外ニ群ス此日午後六時壬生口搜索ノ者ヨリ官軍壬生口ヨリ襲来ノ由ヲ報ス之ニ依テ人数ヲ配ル第二伝習隊撒兵隊七連隊工兵隊微震隊凡五百人城下ヨリ壺里隔テ安塚村迄進軍左右へ人数ヲ配リ搜索方ノ報知ヲ待ツ然ルニ夜ノ九時過大雨降出ス偕モ壬生ヨリ大軍襲来ト報スルヤ否敵放発ニ及フ味方ハ不案内ノ地殊更暗夜ニシテ奨励ニ自在ヲ得ス街道ノ正面ニ微震隊向ヒ敵ノ砲声ヲ目当ニ発丸ス敵ハ本道へ人数ヲ少シ置キ左右ノ閑道ヲ巡テ味方ノ中央ニ潜伏シテ吾兵ノ進ムヲ待敵ハ暗夜ナカラモ地理案内ノ事故進退共弁理ナリ斯テ微震隊ハ正面ノ敵ヲ追散シ左右ノ味方ヘモ告ケテ四五町モ追打ス時分ハヨシト左右ノ敵兵不意ニ打出ス味方働ク事不叶正面ノ微震隊奮発シテ無二無三ニ打掛ケ右翼ノ敵ヲ四五町程追返シ漸ク味方一定シテ防戦ノ道ヲ得ル微震隊奮発故隊長和田久太郎深手三ヶ処此月卅日日光山ニテ死ス外深手小山鈺藏牧野森ノ助薄手九人此隊人数ニ比交スレハ疵人尤モ多シ曉迄雨中ニ戦フト雖モ勝敗分ラス追々本営へ報告有リ○二十二日雨降早朝ニ壬生口応援トシテ回天隊草風隊出發シ数度攻戦ニ及ヒ遂ニ敵ヲ壬生迄追返ス然ルヲ午前十時頃西ノ山間ヨリ襲来ノ由急報有リ依テ直ニ取テ返シ暫時打合ヒシカ此敵ヲモ追討シ壬生ノ城下迄追込ミ引揚ル昨夜ヨリ苦戦シテ敵ヲ追返ス事三度今日ノ争戦ニハ味方手負ナシ之勝チ軍サナル故ナル可シ午後四時引上ケル又午後六時江戸口哨兵所ヨリ報告有リケルハ敵江戸口壬生口両道ヨリ夜討ニ襲来ノ由密カニ聞ヘシト知ラス之ニ依テ両道へ分隊シ伏兵迄置テ待設フケシ所夜

中ハ変事ナシ○二十三日雨降午後晴ル午前六時昨日壬生口勝チ軍サノ祝酒有リ同八時江戸口斥候兵ヨリ急報有リケルハ敵兵今朝江戸口壬生口へ充滿シテ攻撃ノ由迅速向々へ援兵致シ度ト告ス故ニ持場々々へ其趣急告ス大砲ハ二門雀ノ宮口へ構ヘ竜興隊護衛旁タ大砲ノ左右へ準備ス何レノ隊モ哨兵所へ軍勢ヲ増加シテ襲ヒ来ラハ一ト争戦ニ打破ル可キ勢ヒナリ又味方此日ノ合旗ハ白赤ノ小旗ナリ隊中白赤ノ縮緬ニテ在リ腕ヲ結ヒ之レ合印シナリ斯テ江戸口台新田ヲ持シ撒兵隊吾カ兵ノ巡邏ト敵兵ノ進軍ト悞テ見損シ専ラ由断ノ所へ僅カ五六歩ニシテ左右ノ麦畑へ開クヤ否ナ火急ニ攻弾ニ及フ味方不意ヲ打レ銃ヲ発スル者モナク狼狽限リナク敗走ス最モ死傷多シ之ハ全ク敵ノ計策ニ罹リシナリ吾カ此日ノ小旗ヲ合印ヲ打振ツテ奨ミシ事故真ノ味方ト思ヒシモ尤ノ儀也之ハ工兵隊ノ内ニ内応セシ者有リシト后チニ知レケリ偕撒兵打漏レノ者ハ途ヲ失ヒ奥州街道へ馳走ス斯テ台新田破レケレハ敵城ノ西掘際迄逼ル城中ニハ撒兵ノ敗走セシモシラス当方へ敵襲来セシヲ不審ニ思フテ防戦ス其内チ城外ヨリ撒兵大敗走ノ報告有リ城中奮然トシテ堀際へ逼リシ薩州勢ト砲戦シ一端追ヒ退ケ打取首級モ有リ吾カ隊中田中忠司柵ヲ越ヘ堀ヲ渡リテ堀外ニ到リ首一級刀壺本附属ノ品共分捕シテ返ル斯テ敵ハ人数ヲ増加シ再此所へ逼ル味方奮励シテ銃丸ヲ飛スト雖モ敵モ必至ト見ヘテ更ニ引色見ヘス互ニ砲声絶ヘス然ル所へ壬生口ヨリ急使来リ告ケテ曰ク今日ノ争戦始メヨリ味方勝利ナク数度突戦ニ及ヒシカ何レモ苦戦遂ニ敗軍殊更死傷ノ者多シ依テ余義ナク引上ケ只今城外八幡山神明山ニ陣取り城中ノ様姿ヲ見合セ候ト云又江戸口式番ニ備ヘシ工兵隊ヨリ急使来リ告テ云フ当方面一番ニ備ヘシ撒兵不意ヲ討レ敗走ヲ見聞シテ当隊モ俄替ノ形勢顯ハレケルユヘ役々鎮定ハ致セシカ共敵ニ烈敷アテラレ一ト支ヘモナク敗走ノミナラス変心ノ色相見ヘ下士官兵士ハ行方知レス指揮役以上四十人計リ本意ナク八幡山へ引上ケタリ又敵ハ只今宿ノ入口迄攻メ来リ大砲隊竜興隊ト烈戦ナリト報ス偕モ此日ハ味方敗スヘキノ日ナルヤ分隊長秋月登之助ハ

破裂弾ノ散丸ニテ脇腹ヲ創シ副長内藤隼人ハ小銃丸ニテ足ヲ打レ兩人共薄手トハ云ヒナカラ歩行成リ難ク然ル所ヘ竜興隊ヨリ報知有リケルハ当隊モ速モ防禦立難ク大砲ハ今朝ヨリノ打方ニ彈藥ヲ尽シ頭取藤野太良次郎ハ刀ヲ拔テ敵中ヘ切込乱軍ノ中ニ血戦討死ス大砲ハ奥州道ヘ引上ケサセ其内唯タ防キ砲ヲ打セ候迄最早間モナク引上ケ可シト云フ間モナク再報有リケルハ味方勝利ハ之アルマシ殊ニ竜興隊ヘ只今横打ヲ致タセシハ正カニ工兵隊ト見留メタリ此所ニ長ク闘カハ、猛兵ヲ失フヘシ依テ神明山ヘ引取り遠ク防キ銃ヲ飛スベシ城中ニ長居セハ必ス落命スヘシ且日光ヘノ通路塞サカレナハ頗ル難儀ナルヘシト細カニ申告ス敵ハ勝ニ乗テ大手ヘ逼ル此所ハ回天隊守衛ス偕モ諸口敗走ニ付敵ハ大手西門両所ニ攻迫充満シ潮ノ涌力如シ此時総轄大島圭助ヨリ触示スルハ今日モ午後五時ニ及フ敗兵ヲ集メテ防戦モ易アルマシ素々当城ヲ根城トスルノ意ニ非ラス一時ノ氣ニ乗テ今日ニ到ル之ヨリ開城シテ日光山ヘ志ス可シ併シ疵兵ヲ先ヘ運轉シ其安否ヲ見テ追々ニ引上ケ可シ夫迄ハ奮発シテ防禦スベシト大手回天隊八幡山神明山ノ諸將士ヘ申告ス疵兵掛リヘハ先々申談シ置キ何時ニテモ指揮次第差岡ヘナキ様ト托セシ事ナレハ其由伝ヘルヤ否直ニ出立致サセ午後六時迄ニ出立私ノ趣キ病院掛リヨリ報知アリ之ニ依テ回天隊并ニ西門ヲ固メシ草風隊ヘ指揮シ東門ヨリ追々出城ス急迫ノ事故荷物ハ勿論機械彈藥等ニ至ル迄悉皆当城ニ捨置テ去リケリ又城外八幡山神明山ヘモ其由ヲ告ケケリ斯テ城ヲ出日光ヘ趣ク所本道ハ最早敵断切シ由依テ閑道ヲ經テ走ル然ル処城下放レテ壺里程進ミシニ路傍ノ在村ニテ家毎ニ握リ飯ヲ拵ラヘ兩戸ヲ敷テ之ニ並ヘ梅漬ヲ附テ人数ヘ差出ス午後七時過キ故ヘ何レモ空腹ナレハ懇切ノ礼ヲ厚ク述テ其恵ミニ逢フ之ヨリ日光ヘノ閑道ヲ問フニ大沢宿ヘモ徳ニ良宿ヘモ自由ニ出ラレケレドモ到テ道惡敷大砲ハ速モ引事ナルマシト云依テ此ノ所ヘ預ケル又疵兵運轉人夫途中ニテツカレ 者有レハ此辺ノ婦人カ荷ヒ路中ノ差支ヘ聊カナシ其心深ナル事感服致タサヌ人ハナシ―此婦人ノ荷ナイシ訳ハ男ノ分ハ兼テ

宇都ノ宮ヘ人夫ニ出ラレ何レモ男タル可キ者ハ近在皆留守ナリ―当所ヲ立テ僅カ半里モ行程ニ日暮殊ニ暗夜山間溪谷ノ細道ニシ方位モ分ラズ敵ノ襲ヒ来ラン事ヲ怖レテ灯火ハ用ヒラレス殆ント感激ス近マ人家有レハ溪谷ヲ隔テ、物ヲ問フ事サヘ弁セス彼方ヘ迷ヒ此方ヘ迷ヒ凡道ノ五里モ歩行シト思フ頃左ノ方遙カニ高キ岳ニテ鶏ノ啼聲ヘ聞ケレハ是コソ幸ヒト道ナキ芒野ヲ押分ケテ漸ク岳ヘ上リテ見レハ並木有リ是日光ノ街道ナラン地名ヲ聞キタシト人家ヲ尋ネシニ灯火ノ洩ル家有リ不審ニ思ヒ様子ヲ覗クニ人聲ヒ多ク聞ユ暫クイミシニ聞馴レシ声ユヘ是レ吾カ隊ナラント外ニテ声ヲ信セシニ答ヘテ出テ来リシハ沢田啓十郎ナリ互ニ無事ヲ祝シテ語り合フ内追々ニ馳着シ六七十人ニ及ヒタリ地名ヲ問ヘハ徳次良宿ト云フ宇都宮ヘノ本道里程ヲ問ヘハ三里半ト云フ然ルヲ閑道ヲ經廻テ凡六七里モ歩ミテ辛フシテ当宿ヘ出タリ此所ニ凡三時間休息スル内追々遲着三百人ニ及ベリ里人ニ此辺ノ形勢ヲ問フニ官軍折々巡廻殊ニ先達テ会津家藩士ニ出合戦争ニ相成当宿モ拾軒程兵火ニ罹リ官軍遂ニ敗走セシト云フ其内夜モ曉キ方ニナリニケリ○廿四日快晴早天ニ徳次郎宿發途行程四里大沢宿当所ヘモ二百人程到着之モ道ニ迷ヒ曉キ迄山野ヲ歩キ夜明テ漸ク方角ヲ覺ヘ当宿ヘ出テタリト云フ又疵兵ノ案否ヲ問フニ今朝戸板ニ乗ツテ通りシ人有リ凡三四十人程ナリト答フ之ハ地理案内ノ人夫ユヘ道ノ順序ヲ知りシナルベシ当宿ヨリ行程二里今市宿ヘ十二時ニ着ス当所ヘ兵糧焚出シ方ヲ依托ス偕又昨夜勞レテ原野ニ臥シタルモ道ニ迷フテ苦ルシミシモ午後一時迄ニ当所ヘ集着ス疵兵ノ分ハ日光山諸院中ヘ送附シ又当所ハ要害ノ地故宿陣シテ敵ヲ引受ベシト決シ宿口ノ関門ヘ胸壁ヲ築キ足シ暫ク休息ス然ルニ昨夕途中ヘ預ケシ大砲二門送り届ケシユヘ其運送賃ヲ出ダセド更ニ請取ラス辞シテ云フ御入用ノ品ト心得早速運送致タセシ也賃金ヲ望ミニ運ヒシニアラスト心ヨカラヌ歟ニテ返ヘル其真心実以テ感肺ノ到リナリ賞スルニ堪ヘス斯テ大隊ノ人員ヲ調ラヘル所疵兵四十一人戦死ノ者三十八人宇都宮戦争中逃走ノ者五百人余内工兵



隊ハ上等士分計リ残リ下士官兵士共凡三百人遁脱シテ今現在ノ総計七百  
名ニ過キス偕又当宿入口ニ梟首三ツ有リ其ノ謂レヲ問フニ之ハ彦根藩ナ  
リ過日ヨリ日光山内并ニ鉢石町今市宿ニ徘徊シ會藩德藩脱士ノ様姿ヲ認  
メ搜索ヲ遂ケ内応セシ趣キヲ当所ニ固メシ會津藩ニ調ヘラレシカ夜ニ入  
テ逃亡シ壹里程山中ナル炭焼小家ニ到リ食物ヲ乞フ故樵夫恠敷思ヒ頓智  
ヲ巡タラシ否ム事ナク承託シ壹人ハ飯ヲ爨シクスル内壹人ノ樵夫当詰所  
ヘ報シケル會藩四五名迅速欠ケ付擒コニシテ連レ復リ詳細取糾ス所全ク  
彦根藩ニシテ当方ヘ内搜ニ来タリシ由ヲ祥ラカニ白状ス會藩説キ論シテ  
云フ外藩ハ兎モアレ其主人ハ徳川家ノ重臣ナラスヤ君恩ノ厚キヲ忘却シ  
諸侯ニ先頭シテ御山内ヲ搜索トハ獸畜類ニ均シカルベシ又盜賊ニモ類ス  
ヘシ又理非ハ兎モ角モ仁義ノ道ニ少シモ弁ヘナハ斟酌モ少シハ有ル可キ  
モノ不義不仁ハ武士ノ尤モ耻入ル所口ナル可シト猶モ弁ンシテ説キケレ  
ハ三士共其ノ有罪ニ真伏シ俱タ頸ヲ差延シテ斬首ヲ乞フ會藩又云フ悔悟  
真伏致シナハ助命致ス可キ姓名ヲ名乗ル可シト云フニ了承ナシ主名顯然  
トシタル上ハ生テ詮ナシ又姓名ヲ名乗ル事ハ免シ玉ヘト咨嗟ス其姿殊勇  
々然トシテ通レナリ因テ其首ヲ罰シ梟木ニ掛ケシト云ステ今市宿在陣不  
可ナリト議論屢々發起リ一端ハ日光山神靈ヲ拝謁シ其上何地ヘナリ共出  
発然ル可クト決シ午後五時当所發途行程二里鉢石町ヘ着茲ハ日光山御橋  
ノ前ナリ吾隊宿泊御幸町柳屋竹二郎○廿五日快晴此日午後一時ヨリ総勢  
登山東照宮ヲ拝礼ス夫ヨリ諸社參詣畢テ午後六時帰宿○廿六日雨降ル三  
月頃彰義隊ヲ脱セシ貫義隊一小隊当表ニ在留シテ會藩ト合併シ当国藤原  
村今市宿辺ヲ守衛セシカ吾カ大隊当表ヘ附着ニ付協議ノ上東照宮神像神  
器靈宝等若シモ敵ノ粗暴ニ懼ラン事ヲ愁ヘテ會津ノ若松城ヘ通送ス此護  
衛旁貫義隊出發ス偕モ午後一時頃宇都宮口探索方ヨリ報シテ曰ク敵ノ大  
軍日光ヘ指向ケテ獎兵ノ由今市宿ハ空巢ノ趣□□□急速分兵有リ度キト  
告ス然ラハ今市ヘ出兵防禦ノ備壁ヲ建可シ併シ以後ハ御山内ヲ根城ト心  
得交番ニ今市ヘ兵ヲ操出シ固ク防戦スヘシト商議決ス依テ分隊セシ所此

日ハ大砲隊竜興隊第一伝習隊發兵ト定マル然ル所吾隊長飯岡欽二良上条  
梅之助ノ二人今朝ヨリ見ヘス出發前ノ事ナレ所々探カシ得ルト雖モ更ニ  
見当ラス依テ本營ノ會計方ニテ承ハル処今朝砲興兩隊ヘ手當金三百兩余  
リ渡セシト云去レハ逃走ニ疑ヒナシト手分ヲシテ探セシ処行衛知レス銃  
士ハ不平ヲ鳴ラシ之レ盜賊ノ所業ナリ隊中ノ用意金ヲ奪走セラレシハ奇  
快至極捨置ニ成リ難ク此上ハ何所迄モ追欠ケ擒ニシテ捻首セント憤怒ニ  
堪ヘサル所ヘ壹番ノ氣ヲ付喇叭最早出兵二間モ有ル間數ト老功ノ松葉權  
平銃士ニ向ヒ各方ノ憤リ至極セリ僕ニ於テモ同様彼等ニ欺カレシト慮ヘ  
ハ激怒ニ堪ヘカタシ併シ深く再考致シテ見ルニ彼ヲ長ニ頼ミシハ御同様  
ニ目的違ヒノ過失ナリ又追懸ケシ所カ彼等原野ニ潜居スルカ又ハ走レハ  
五六里モ行ク可シ追付ク事ハ難タカル可シ夫歟為ニ出軍ヲ拒ムニ似タリ  
私ノ事ニ怒テ大體ノ差閤ヘヲ釀スハ小事ノ論也若モ命チ恙カナクシテ彼  
等ニ回り逢ヒシ時ハ今ノ罪ヲ責メヘシト説ケレハ如何ニモ追ヒ付事ハ  
難カル可シ無益ノ足ヲ勞スルマシト互ヒニ憤リヲ鎮メケル内正午ノ十二  
時進軍喇叭ヲ吹廻ル依テ松葉權平ヲ頭取ニ頼ミ今市宿ヘ出發ス然ルニ当  
宿ノ混動大方ナラス空説ヲ証トシ敵ハ大沢宿迄来リシトモ云又ハ徳二良  
宿迄来リシト云区々ノ浮言ニテ夫々荷物ヲ山中ヘ運フモ有リ土中ヲ堀テ  
鍋釜ヲ埋メルヤラ狼狽限リナキ鉢ユヘ取り敢ヘス粉動ヲ取慎メ吾カ隊ハ  
桶屋善兵衛方宿陣又徹震隊ハ頭取和田久太郎深手ニテ指揮スル者ナキユ  
ヘ吾カ竜興隊ヘ合併改テ以後大砲隊ト唱ヘル○廿七日雨降午後六時探索  
方ヨリ報知有リ敵大沢宿迄進軍宇都宮壬生館林彦根ノ勢ナリト告ル固テ  
胸壁ヘ人数ヲ分配シ防戦ノ準備ヲ施コスト雖モ其後報告ナシ偕モ夜二時  
頃鉢石町本營大鳥圭介殿ヨリ急使来リ直ニ今市ヲ引上ケ可シ方面差操リ  
モ之有ルトノ事之レ如何ナルユヘ哉察スルニ今朝松平太郎江戶表ヨリ脱  
走鎮撫トシテ来リ大鳥圭介加藤平内ニ逢ヒ密談有リシトノ事何歟變事ナ  
ル可シト各々ツ、キ合ヒ今市宿ヲ引払ラヒ曉方鉢石町ヘ着吾儕ハ枅野屋  
五良治方宿泊○廿八日雨降松平太郎今朝又々乗馬ニテ鉢石町迄来ル密談



有テ宇都宮へ帰ル官軍充滿ノ途中往復數回差支ナク通行セシハ如何ナル事ニヤト疑フ者最モ多シ又今市宿ヲ空屈ニ致シ置キ諸隊へ何等ノ談示モナキ又一ツノ疑ヒナリト密□ノ説区々也又江戸上野詰メ彰義隊ノ内ヨリ脱シテ八名来着吾カ大砲隊へ合併其人々ニハ石川次郎 久下録之助 渡辺錠二郎 酒井陽二郎 沢本扇太郎 平井伊三郎 宇塚左一郎 土井平二郎 也江戸表ヨリ当地迄ノ途中余程困難致セシ由又江戸表ノ形勢市中ハ別段変リナシ併シ不景氣御軍勢ハ追々府着徳川家ノ御所置モ今以テ仰セ出サレス官軍奥州征伐ニハ德果テタル由近々 主上御東向ノ由彰義隊へハ諸士追々蟻附ス撒兵大隊騎兵隊ハ上総之國迄脱走シ直ニ鎮撫使ニ説得ヲ受ケ一ト戦争モナク帰府セシト報ス○廿九日晴ル今朝敵襲来由報知有リ差向キ草風隊七十里村迄兵ヲ奨メシ所敵ノ斥候隊モ近寄り午前十時頃砲戦ニ及フト雖モサシタル事モナシ茲ニ元三番町兵歩組重吉ナル者当所へ両三日以前ヨリ忍ヒ込ミ種々内応セシ而已ナラス此日ハ某ノ裏家へ忍ヒ入り薪ニ火ヲ仕掛ケシヲ見認メ八方ヨリ追ヒ詰メ捕リ押ヘ火ハ漸ク消シ留メ夫ヨリ重吉ヲ取糾スニ姦者ノ由白状ニ及ブ又今日火ヲ掛ケシハ兼テ内通致シ置鉢石ニ火ノ手上カレハ官軍急ニ攻戦ノ積リニ約セシニ謀計顯ハレテ残念ナリト云フ兵士其罪ヲ憎ンテ其肉ヲ喰フ情ヲ思フニ七十里村ノ戦争サシタル奮発ノナキハ彼カ当町ヘ火ヲ放チ狼狽ノ折柄ヘ打入手配ナル可シ重吉ヲ生捕リシハ味方ノ幸ヒ真ニ浮雲事ナリ此儀洩レ聞ヘシニヤ午後一時頃ニ至ツテハ戦争烈敷相成銃勢天地ニ轟ク依テ艸風隊援兵ヲ請フ疵人モ追々来ル応援トシテ回天隊へ伝習ニ小隊ヲ交附シテ草風隊ニ換ラシム砲戦スル事凡一時間然ル処東照宮別当大楽院前僧正本宮へ来駕密譚有リ夫ヨリ七十里村へ出向官軍へ応援暫ク止戦ヲ請ヒ隊長二見ミヘテ曰ク当所ニ於テ兵端ヲ開カハ自然御山へ銃丸モ飛可シ固ヨリ無罪ノ神仏若モ兵火ニ罹ラハ祖宗へ不幸ノ至リナル可シ依テ脱士ヘモ説諭ニ及ヒ当所ハ引取ラスヘシ各方モ神祖ヘ対シテハ恩鴻モ有ル可シ能々了解ナサレテ脱士引払フ内今朝兩日攻戦延引下サレ度ト懇切ニ弁

シケレハ隊長某委細了承ノ由依テ大楽院僧正直ニ鉢石へ帰ラレ大鳥圭介ニ御逢ヒナサレ官軍了承ノ趣キヲ申シ通シ又官軍へ説キシ意ニ基ヒテ御談示有リケル長ノ曰如何ニモ御尤ノ次第主家回復ノ為ニ若シ御山内ヲ破却致シナハ悔ユ共詮ナシ御説得ニ伏シ迅カニ兵ヲ引払フ可シ併シ江戸表出立ノ期ハ同意ノ者御山内へ參籠シ襲来ノ敵ト撃戦ニ及ヒ敗スル節ハ当地ノ土トナル可キ覺期ナリシカ僧正ノ御遠志ニ基ク可シトナリ夫ヨリ急ニ諸隊長集合シ愈会津へ落去致ス可シト決論シ七十里村出兵ノ隊ヘモ其向ヲ報シ直ニ人数ヲ引上ケ一七十里村へハ日光ヨリ壺里一會津へ引払ヒノ用意ヲナス斯テ午後四時人夫モ整ヒ病兵ノ分ハ先へ若松表ヲ指シテ送附ス尤モ会藩案内ス夫ヨリ諸隊追々出發スト雖モ吾カ大砲隊独リ砲運送ノ人夫ニ差間ヘ因循ス之ハ疵兵ノ人夫ニ多ク繼立シ故ナリ殊ニ近村ト云ハ稀ナリ只鉢石入町七十里丈ケノ人足ナリ午後七時ニ至リテ漸ク人夫ヲ四十人雇ヒ嶮岨ノ細路ナル故大砲ヲ担送ス偕鉢石町出立入町ヨリ会津新道へ掛レハ日モ已ニ暮レ岩屈ノ新道路殊ニ暗夜提灯ニハ乏シク其困難ン譬ヘルニ物ナシ春以来弁理ノ為ニ開キシ近道ナレハ人夫モ不案内里數モ量リナシ夜十二時頃凡里程四五里モ歩キシト思フ頃一村茂リタル林有リ近寄レハ何レモ火ヲ焚テ寒サヲ凌ク艸吾カ隊モ此頃中ノ困苦何レモ勞足ノ艸ユヘ樹下ノ最寄ヲ見立集屯シ枯木ヲ聚メテ火ヲ焚寒サヲ凌キ夜ヲ明シケリ○閏四月朔日快晴此辺ノ氣候ハ江戸辺ノ三月頃ノ氣候ニ同シ昨夜ヨリ朝迄ハ凌キ難キ程ナリ木ノ芽出シヲ見レハ漸ク孕ミシ計リ又傍ラノ小高キハ日光ニ名称ノ男體山並ンテ女體山是両山ニハ今以テ頂雪白妙ヲナセリ斯テ樹下ノ宿リヲ立凡里程壺里下リ幽カノ壺斬家有リ地名ヲ問ヘハ御堂ト云何ノ食物ハ無キ哉ト聞ニ更ニナシト云村里ヲ問ヘハ爰ヨリ一里程行ケハ日陰村ト云フ小里有リト教ユ吾儕ハ兵糧方ヲ掌務ノ事ユヘ兵士ヲ五名連テ此所ヨリ驅ケ拔ケ午前十時日陰村へ到着シ様子ヲ見ル留主ノ家多シ村長ヲシキ家ニ到リ兵糧ノ用意ヲ依頼スルニ亭主立出テ答フ当所ニハ米ト云モノハ更ニナシ土地ノ食物稗ナリ其他上食ハ蕎麦又小麦ナ

リト云之ニ依テ稗ニテ仕度ヲ頼ムニ搗稗ノ貯ヒハ多分ニナキ由拠所ナク  
玄稗ヲ買集メサセ人夫ハナシ吾儕之ヲ踏曰ニテ搗ク其内追々兵士人夫共  
来リ此駄ヲ見テ何レモ憫レ果ケリ偕右ノ稗ヲ搗揚ケ粥ニ炊シキ食スト雖  
モ能ク搗ケサルユヘニ哉空腹ナラモ如何ニモ食シ難ク夫ヨリ大豆小豆  
ヲ買求メ之ニテ漸ク飢ヲ凌キケリ此地風土ヲ見ルニ田額ハ曾テナク畑面  
稀ニ有リ溪谷ニ住居シテ緒川ノ原ト也日光ヨリ越シ来リル山ハ六方越ヘ  
一名不二見峠トモ云是ヨリ凡六里又此川筋ニ小邑十村有リ総名九里山ノ  
郷ト唱ヘル由又里人ノ姿駄ヲ見ルニ男女共黒ノ太麻ニテ作りシ細袖ノ丈  
ケ短カキヲ上着ニシ同シ色品ノ野袴ト名付シ物ヲハキ男ハ茅ヤニテ作り  
シ脚半ヲハク女ハ髪ヲ結ヒ鉄漿ヲツケシ者稀レナリ又何レモ女ハ手拭ニ  
テ鉢巻ヲメメ寢食トモ取ル事ナシ言語訛リテ通信セサル事モ有リ又産業  
ニハ男ハ膳碗箸ノ荒木取ヲシテ日光或ヒハ今市森友ノ辺ヘ運輸シテ渡世  
トシ女ハ野山ヲ稼キ生活トス又婦女子ニ到ツテハ稲ヲ知ル者少ナキ由此  
日ハ日陰村百姓五良左衛門ヘ宿泊ス○二日快晴当村出發緒川端ノ惡道ヲ  
伝フテ行程三里日向村当所モ日陰村ニ劣ラス地位ニシテ食物等更ニ同断  
医師玄順方小休ミ午後二時当所出立行程二里西川村当所モ同断宿泊百姓  
四良左衛門方当村ヘハ会津ヨリ兵糧米廻リ始メテ人心精力ヲ得タリ僅カ  
二夜二日米絶ヘケレハ精心次第ニ衰ヘ何ントナク勞レテ氣力ヲ失ナヘリ  
○三日午前雨降午後晴ル当所出發直ニ川有リ深サ二尺位ナレ共橋ナクシ  
テ自渡シ也又三里ノ嶮山有リ六方越ヘニモ劣ラス禁ヨリ凡菴里野州五十  
里村入口ニ大川有リ仮橋ヲ渡ル茲ニ関門ヲ築建テ会藩守衛ス此街道ハ日  
光ヨリ会津ヘノ往還ナリ当所ニ小休中食宿赤羽喜右エ門当所出立行程二  
里中三依村甘町余上三依村菴里横川宿当所ニ昔時ヨリノ関門有從來会津  
持チ宿泊川口屋五右エ門此辺モ日光街道トハ云ナカラ到テ辺鄙人心又頑  
固ナリ○四日雨降午後晴ル当所出立甘町登リ峠ニ山王ノ社有リ茲カ奥州  
野州ノ国境ナリ山王峠ト名付テ随分嶮岨ナリ峠ヨリ禁迄菴里禁ヨリ行程  
菴里糸沢宿小休中食当所ハ近頃焼失シテ普請中ナリ之ヨリ川島宿中原宿

田島宿糸沢ヨリ五里半当所ニ泊ス吾兵ハ宿米沢屋嘉平吉田屋嘉藏福島屋  
六左エ門釜谷政兵衛ノ四軒ナリ○五日快晴当所滞在此地ハ都テ御蔵入ト  
唱ヘ五万三千石御料所ナリシカ近年会津ヘ預ケ地ニナリ同藩郡奉行江上  
又七郎在勤諸事取扱フ由此人秋月登之助ノ親父ナル由又近在其土地柄宜  
ク田額畠面共ニ多ク商家ニ富メル者モ多キ由溪谷ニ景色ヨキ地数多有リ  
西ニ愛宕山ト云フ高キ岳有リ央ニ牧野某ノ古城跡有リ之モ景地或ハ要害  
ノ地也且冬向ニ到レハ雪積ル事七八尺位ヒ又山王峠ハ人馬通行留ルト云  
偕モ秋月登之助ハ過日城下ヘ療養ノ為行カレシカ今日当所ヘ出向○六日  
快晴休兵会津ノ老臣山川大内藏變名結城左馬之助南日光口副総督ヲ命セ  
ラレ出陣当宿着総轄大鳥圭介ヘ從附ノ由○七日快晴若松ヨリ急使来リ報  
ス大砲隊第一伝習隊回天隊伝法隊別伝習隊ハ方面手配モ之有ルニ付秋月  
登之助松井九郎工藤衛守ノ指揮ヲ受ケ早々若松表江参ス可シ又御料撤兵  
第二伝習隊ハ大鳥圭介ヘ附属シ日光口藤原村ヘ出兵致スヘキ由申渡サル  
吾カ連隊ハ当所ヲ正午ニ出發行程五里半大内村ヘ宿泊ス吾カ砲隊玉屋戸  
右エ門石原屋善右エ門大和屋虎二郎方也○八日晴天当所出發之ヨリ三里  
ノ山地蔵峠ト云テ難所有リ一名火ノ玉峠トモ云フ一十町程登リテ古池  
有リ其傍ラニ桜姫ノ墳碑有リ此山ヲ越ヘテ関山村当所中食宿和泉屋善助  
方午後一時出發ス行程二里本郷村小休爰ヨリ一里若松午後五時着吾カ大  
砲隊宿泊七日町上総屋市兵衛三浦屋富右衛門玉川屋牧右衛門ノ三軒也○  
九日雨降午後晴ル当所滞在偕当地ノ景況ヲ見俛スル二人質到テ素僕近在  
ノ田額曠々トシテ目モ覺ルカ如シ今哉青田ノ時節ナレハ昔時蕉翁ノ詠吟  
セラレモ思ヒ出シヌ吾儕モ田圃ノ美ナルヲ見テ長々ノ鬱勞ヲ保養シケリ  
城下ノ家数三千有余斬不自由モナキ繁昌ノ地也又東ニ當ツテ甘町余隔テ  
温泉場有リ東山トモ天然寺トモ云フ売女芸者ノ類有テ愉快自在ナリ又良  
ニ當テ拒離三里万代山ト云フ高山有リ炎暑ノ節モ雪絶ヘス東ノ禁ニ猪苗  
代領トテ三万石余ノ耕地有リ此所ニ四里四方ノ大沼池有リ此沼辺傍ノ村  
民ハ舟ヲ浮ヘテ漁業營ミヲナス者最モ多キ由又北ニ當テ飯豊山米沢境ヒ

是モ万代山ニ劣ラヌ高山雪絶ヘス茲ヨリ諸口ヘノ方位東ハ白川南ハ日光太田原西ハ越後乾ハ米沢庄内良ハ二本松仙台等也又先達テヨリ越後ヘ兵ヲ発シテ長岡藩モ味方ニ合併シ専ラ奮発ノ由当今新発田ヘ罹リ争戦中近々越後ハ平均スヘシトノ説ナリ此手ヘ発向ハ会藩ハ勿論旧幕ノ脱士古谷作左エ門土万年三郎兵士ヲ二大隊卒ヒテ出陣風評到テ宜シ又昨今ハ奥羽ノ諸侯ニ国境ヘ逼ラレ上杉ト戦ヒ仙台二本松相馬南部等ト合戦数回及ヒ勝負未タ決セス老臣内藤介左衛門藩々ヘ連聯ノ儀ニ付出張中併仙台米沢ハ定約整ヒシ由内報有リシトノ説又憎ム可キノ一説有リ戦争發出以來江戸者数多滞在モ有リシユヘ諸品ノ直段ヲ自恣ニ引上ケ取分ケ飲食ノ甚タシキ高直ナルハ捺カニ憫レ果ニケリマタ外ニ芸娼妓ハ論スニ暇マアラズ

○十日雨降午後晴ル当所滞在休兵小泉高之進大砲差図役申渡サレ合併○十一日快晴当所休兵岩城庄平病兵附添田島宿ヨリ着小頭角田梶太郎疵処全快出勤○十二日快晴滞在○十三日快晴休兵午後ヨリ小島岩城自分三名東山ヘ趣キ温泉ニ浴ミスル○十四日快晴今朝達シラル、ハ野州太田原口防戦ノ準備ナシ依テ三斗小屋村ヘ出兵致サレタキ由依テ午後一時城下発陣行程三里面川村宿泊吾カ砲隊常法院ニ百姓弥次右衛門ナリ○十五日晴ル当所出發行程三里半桑原村小休中飯爰ヨリ行程三里弥五島村宿泊吾カ砲隊百姓新之助清太郎方也当村ニテ保科彈正忠家来廿八人ニ逢フ是モ脱走シテ会津ヘ心ヲ寄セル由依テ互ニ礼敬ヲ成ス偕此辺都テ溪谷ニ要害ノ地多シ又川ノ向フハ白川ヨリ田島ヘノ街道也○十六日曇天当所出發行程一里塩生村小休又一里松川村遍照寺小休昼食当所ニ於テ方面差操モ之有リ一泊ス夜十時頃元徹震隊兵士林休二郎来ル此者ハ和田久太郎看病人トシテ日光山院中ヘ止メ置キシカ同人死去ニ付飯ニ葬送致シ取敢ヘツ馳着セシ由又日光山ノ形勢ハ当今彦根藩因州藩力守固スト云右休二郎院中ノ僕ニ姿ヲ換ヘ密カニ来リシト云フ○十七日快晴当所發途シ行程一里杉之沢村是ヨリ廿五町野際村当所ニ関門有リ是ヨリ野際峠ケ登リ二里下リ一里峠ニ陣小屋ヲ建テ人数ヲ配リ又要害嶮岨ヘ胸壁ヲ構ヘ大砲小銃共打方

自在ヲ働ク此峠ヨリ南ハ野州ノ地下リ一里ハ階子坂ト云フ禁ニ鉾山有リ夫ヨリ三斗小屋村人家四十軒ノ小里四方ニ高山ヲ引受ケ乍左播鉢ノ底ニ拘シ田島共稀ニモナク野菜ニサヘ不自由到テ不弁理是ヨリ良ノ山上ニ白湯山ト云神社有リ夏ニ到レハ參詣ノ者多キ由白湯山ノ中復ニ温泉有旅客二軒柏屋太平大黒屋吉右エ門也偕又三斗小屋村ハ平年白湯山ヘ登山ノ同者ヲ引当ニ夏向キバカリ稼キ営業トシ九月下旬ヨリ雪降り初メ終ニ積雪壺丈余冬向ハ只籠リ居ル由又東ニ当ツテ二里野州那須ノ温泉本是ヘハ細道ニシテ最モ嶮岨ナリ又当村ハ霧深クシテ雲サヘ出ツレハ雨降出ス依テ人夫ハ晴天ニモ笠蓑ヲ放サス当村宿泊吾カ砲隊ハ別当法善院江戸屋権右エ門也○十八日雨降早朝太田原ヲ指シテ發兵行程壺里ニシテ引返シ暫時軍議有テ午後一時急ニ發隊ス茲ヨリ又三里ノ山有リ上リ一里下リ二里峠ニ平地有テ那須野原ヲ見卸ス麓ヲ板室村ト云フ爰ニ宿泊ス吾カ隊ハ大黒屋元助百姓島吉武平ノ三軒当所ハ家数八十餘軒モ有リ田島モ有リ僅カ三里ノ山ヲ隔テ、三斗小屋トハ異ナリ此山上ニモ湯高山ト唱ヘテ高山有リ是モ夏向ハ參詣群登ス禁ニ温泉有リ少シ離レテ名高キ那須野之殺生石石垣ヲ廻ハシテ見物人ノ入ルヲ禁ス草芒生茂リテ石垣ノ中チハ儉然ナラス

○十九日曇天野州太田原城攻撃ノ内応有リ当所出發行程三里笠木村

宿陣吾カ隊ハ名主甚五右衛門

紙数五十五枚



(第二冊 表紙に題簽なし)

塩谷敏郎誌聞

此辺ハ総シテ百村<sup>モ</sup>ノ郷ト云由井穴沢笠木ヲ始メ九ヶ村有リ何レモ旧御料所又那須野ノ原ノ内ユヘ畠ノミ多シ○二十日快晴夕方ヨリ急ニ雨降午後一時当所出發行程二里塩ヶ崎村へ出兵当所ヨリ□田原城迄僅カ二里余大雨ト云ヒ攻撃不都合モ之有リ哨兵ヲ兼ネ伝習二小隊ヲ木島塩ヶ崎へ宿陣致サセ外隊ハ穴沢笠木ヘ引返ス○廿一日雨降十時ヨリ晴ル此日太田原攻撃ノ報達有リ此太田原攻戦ノ意ハ奥羽街道ナレハ江戸表ヨリ白川城ヘノ運送ヲ塞キ白川詰ノ敵ヲ退ケ此道ヲ開カンカ為メナリ偕テ午前十時当所出發一番小隊斥候大砲隊又一方ノ道ハ二番中隊回天隊中央ハ伝法隊別伝習三道ニ分配シテ進軍ス然ル所斥候ノ一番小隊塩ヶ崎ヘ着スルヤ否銃声連発ス急ニ大砲隊ヨリ捜兵ヲ出ス捜兵立返テ報スルハ吾カ隊急戦也敵ハ街道ヨリ東ナル林ノ茂リニ潜伏シテ烈敷銃丸ヲ飛ス又軍勢ノ多寡モ分カラス大砲彈ヲ林中ヘ烈破シテ敵ノ勇撃ヲ挫クベシ其内ニ銃士ヲ進メテ応援スヘシト告スル内昨夜塩ヶ崎ヘ宿陣ノ軍目駈来リ急告スルニハ敵兼テ吾兵ノ撃撃ヲ知り昨夜ノ中チニ所々ノ林中ヘ兵ヲ伏セ置キ吾兵ヲ□□シニスル謀策ナルヘシ其故謂ハ二小隊木島塩ヶ崎ヘ宿陣セシ吾兵ヘ夜打モセス今日大隊ノ進軍ヲ待ツテ攻戦ニ及ハントスルハ之小事ニ係ラス大事ヲ計ルノ意ナルヘシ又敵地ナレハ如何様ノ巧ミ有ル可キモ知レス奮戦シテモ其功有ルマシ又広々タル原野ナレハ不案内ニテハ逞ミラスル事難カル可クト思ヒ味方ニ手負多クナキ内引上ケヘシト先頭ノ隊ヘ託シテ来タリ依テ援□□進ムニ及ハス此所口ニテ遠方ナカラモ大砲ヲ打掛ケナハ味方其間ニ閑道ヲ引上ルニ必定スヘシト報ス之ニ依テ拒離凡十六七町モ

有ル林中ヲ目途ニ大砲散彈ヲ発ス然ル所ヘ本營ノ軍目鈴木伴作早馬ニテ来リ左翼ヲ進ミシ回天隊モ不慮ニ打立テラレ些カ攻戦ニ及ヒシカ敵ノ計策有ン事ヲ恐レテ引上ケサセタリ又当方ノ先頭モ閑道ヲ経テ追々引上ケケリ当隊モ迅速引上ケヘシ今日ハ敵ノ形勢如何ニモ不審ニ思ハレケレハ追打ノ儀ヲ心附ケ板室村迄引弘ヒ度大砲ハ運送方ニ差闊ヘナキ内先ヘ引上ケ可シト報托故迅ニ其向ニ取ヒ大砲ハ五六町モ先ヘ引返サセ銃兵引上ケ可シト思フ処ヘ不斗左翼ノ林中ヨリ凡一小隊モ連発ス吾カ兵折ヨク少シ窪キ所ヘ通り掛リシ事故疵ヲ負ヒシ者モナカリシカ操引ニ引上ケル内深手三人負ヒタリ敵其ノ所ニテ散彈ヲ飛スノミ更ニ追打セス又モヤ伏兵ノ興ル可キ歟ト八方ヘ心ヲ配リ□沢村迄引上ケ漸ク安堵ス一番小隊外二小隊ハ木島塩ヶ崎ヲ遁レテ辛フシテ閑道ヲ求メ穴沢村ヘ引上ケタリ爰ニテ敵ノ形勢ヲ探ルニ敢テ襲来ノ様マモ見ヘス爰ヨリ隊伍ヲ立テ引上ケ由井村ヘ哨兵一小隊ヲ残シ守衛セサシメ総隊板室村ヘ引上ケリ此由井村ハ板室村ヨリ川ヲ隔テ、凡一里ノ拒離也偕此日ノ疵兵ヲ調ヘルニ深手三人薄手六人会津ノ病院ヘ送附ス又戦争中ニ一ト奇談有リ吾カ隊差図役小泉高之進奮勵ヲ極メシニヤ引上ケル事ヲ頻リニ拒ミ此所ニテ生死ノ一戦ヲ成ス可シ外兵ニハ抱ハラス五十人ハ此原野ニ胸壁ヲ築建テ其中チニ籠リ大砲二門ヲ構ヘ四方陣ニ変制セハ譬ヘ敵何千来ル共何ソ怖ル、ニ足ラント急ニ人夫ヲ集メ凡ソ三十間四面ノ胸壁ヲ築キ始メル此那須野ノ原ハ豎十三里横七里ト歟云テ広大ナル原野也近カ林樹有テ人里田畠共少ナシ此中央ニ僅カ三十間ヤ廿間位ノ砦ヲ築キ之ニ五十員計リノ兵ヲ屯シ何ノ勝利カ有ン之レ謂ユル大石ヲ持テ卵ヲ潰フサレ大洋ノ小島ヲ各国ニテ压倒サレルニ均シト何レモ承伏セス只傍觀スル者計リ也小泉ハ猶モ奮発ノ躰ニテ指図ス此小泉ノ心得如何ナラン全ク討死ノ所存ニモ有ルマシ其ノ大量ヲ人ニ令メサンカ為ナル可シ併シ無益ニ人夫ヲ費シケリ然ル処ヘ本營ヨリ早々引上可キ様申報有リ小泉モ不承ノ躰ニテ引上ル斯テ午後七時板室村ヘ帰陣ス同十時頃白川表出兵ノ会藩ヨリ急使来リ報スルハ昨廿日午



前二時頃白川城責メ落シタリ依テ其方面へ急迫スモ計リ難シ御油断有ル可カラスト云茲ヨリ白川迄里数八里也斯テ其向諸隊へ触示ス○廿二日快晴午後四時頃ヨリ急ニ雨降俗モ昨日塩ヶ崎村ヲ引上ケシヨリ東シ太田原口由井村へ壱小隊良ノ方白川口六斗治村へ一分隊哨兵ヲ固ク守ラセケル又当所ヨリ由井村へ越ス巾百間位ノ川有リ平日ハ水少シ板ノ仮橋ニテ通行ス併シ荒川ニシテ出水ノ節ハ通路ハ絶ヘ田畑ヲ押流ス事連年ノ由又川端ニ和久戸村ト云テ家数十軒程ノ小村有リ茲ニ吾カ砲隊哨兵ス然ル所午前八時探索方穴沢村名主源右エ門方ヨリ報知有リ敵今朝木島村迄来リシ由襲来致スモ知レス御用意有ル可シト云フ依テ毎隊へ其向ヲ報ス又隊ノ持場割モ告ス諸隊本営ノ報知次第出兵ヲ致スベキト報ヲ待然ルニ因ランヤ午前九時頃吾カ大砲隊ノ哨兵セシ橋ヲ担フテ渡リ来ル者有リ味方トハ思セハレス不審ニ思ヘ共是レヨリ由井村迄十町所々ニ哨兵ヲ出セシ事ナレハ恠敷者ハ報知有ル可シ又木島村ヨリ茲迄ハ四里余モ隔テシ事ナレハマタ着スル謂レモナシト猶予スル内又後トヨリ十人計リ川原ヘ現ハル近寄ルヲ見ルニ吾カ隊ノ合印ニテハ非ス依テ其向キ本営ニ報シ試ミニ探砲三四發飛ス其者駈足ニテ橋ヲ渡リ川添ノ岩根ヘ馳セ寄リ銃丸ヲ投飛ス味方胸壁ヨリ烈発ス敵一人ヲ打留メタリ敵溜リ兼ネ川縁リヲ伝フテ川下モヘ廻ル外ニ川ヲ渡ラントスル者モナシ僅カ十五六人ノ敵故怪敷思ヒケリ其砲声ヲ聞テ大砲ハ和久戸村ノ上ヘ備ヘ六斗治村ヘモ援兵ヲ出シ又和久戸村迄ハ銃士透間モナク構ヘタリ偕又吾カ會計宿陣百姓武平方ヘ大砲ボード弾飛ヒ来リテ壁ヲ貫キ梁ヲ破テ落丸ス来リシ方位ヲ見ルニ川向フノ岳拒離凡十町モ有ル可シト思フ散弾ニアザル故怪我致セシ者モナシ所ヘ続ヒテ二三發来ル家内ノ者狼狽スル事大方ナラス依テ荷物ハ皆土藏ヘ積入レサセ婦女子ハ山ヘ遁シ男老々人残シ置ク然ル所追々砲丸ノ来ル事甚シ此大事件ニ由井村ノ哨兵ヨリ報知ナキハ如何ニモ不審ニ思ヒケリ其内南川上ヘ敵回りシト逃ケ去リシ者共山道ヲ転ヒテ漸ク告ケル此方面ハ嶮岨ニシテ最モ要害ノ地輒スク越ユル能ハサルヲ如何シテ来リシヤ

其実報ハ得スト雖モ四分隊ヲ出兵サセケリ又白川口六斗治村ヨリ急告有当村川添或近傍ノ林茂ニ昨夜ヨリ敵潜伏ト見ヘテ処々八面ヨリ打出シ防戦到テ不都合殊ニ大軍追々進撃ノ由然ル所ヘ敵ノ鎗隊凡一小隊モ人家ノ裏ヨリ突然ト出現シ味方ノ横合ヲ至酷ニ突立ラレ防クニ途ヲ失ヒ心ナラズモ敗軍シ村口迄引上ケ敗兵ヲマトメ守固スト雖モ創兵最モ多シ此躰載ニテハ全利覚束ナシト報又由井村口和久戸村モ防戦届キ兼創兵モ多キ事故余儀ナク引上ケ当村入口ニテ防戦ノ準備ヲ構ヘタリト報ス又南方ハ岩屈嶮岨ニシテ敵自由ヲ働カス依テ進ムコトナリ難ク遠砲ヲ互ニ發スルノミ手負等モナキ由偕東北ノ敵ハ勝ニ乗シテ進撃ナル事急迫ナリ味方モ銃士ハ鎗士ヲ附与シ嚴令ヲ下シ烈戰奮励ス戰死手負ノ者尤モ多シ然ルニ敵ハ進々人数増加シ味方ハ壱人手ヲ負ヘハ三人ノ兵減ス依テ次第第二寡兵ニ成ル而已―此三人減スルト云ハ二人ハ附添看護スル也―斯テ午後二時頃愈總敗軍ノ色見ヘケレハ頭取小笠原新太郎馬上ニ拔刀シ血眼ニ成テ馳セ廻リ高声ニ下知スル様フ此所ヲ敗シ何ノ面目有テ会津ヘ返ヘラレ可シヤ徳川麾下ノ士ノ汚名ヲ生ナカラ曝ラスヨリ銘々必死ト極メテ奮発シ当敵ヲ追ツ散ラセヨト指令ス此勢ヒニ引立ラレ暫時烈戰防禦スト雖モ却テ夫カ為メニ又死傷ノ者多シ然ル所因ラン哉新太郎ノ左脇腹ヘ小銃丸飛来テ打貫深手ナレ共更ニ屈セス下知スル処ヘ又一彈飛ヒ来ツテ右ノ腕ヲ打貫カレ刀ヲ土上ニ落ス夫ニモ緩ユム色ナキヲ其家来諫メテ保護シ引上ントスルニ主人小笠原カツテ耳ニモフズ疵口ヲ押ヘ大音ニ訃リケルハ戰場ニ死スルハ武士ノ常ト云フ主家ノ回復ヲ祈ツテ今爰ニ討死セハ神君ヘ申訳ケ有ル可シ忠義ノ士ハ我ト共ニ戰死セヨト猶モ臆セス下知スル所小笠原ノ命数究リニヤ又一丸来テ眉間ヘ貫ラヌク流石ノ勇士モ遂ニ落馬シテ息ハ絶ヘニケリ誠ニ稀レ成ル討死也行年二十四歳家来馳寄テ主人ノ首ヲ上ケテ退ク処ロハ銃丸飛ヒ来テ太股ヲ打貫クナレ共其頸ヲ本營迄提送ス之モ又忠臣ト賞ス可シ―此新太郎ハ旧政府之御代官ヲ勤メラレシ小笠原甫三郎ノ嫡男ニシテ勇氣ノ人也―斯テ敵ハ追々ニ援兵モ来リ味方ハ援

ヒノ兵モナク次第第二減スルノミ殊ニ西三斗小屋道ヲ断チ切ラレナハ由々敷大事ナリ手負ノ護送行届ク迄防戦シ此日ハ三斗小屋へ引上ケ可シト隊々へ触レラレケレハ敗軍ノ習ヒニテ混動スル事大方ナラス漸ク手負機械ヲ運送シ午後四時総軍引上ケト相成ル大砲運転ノ人夫ニハ殆ント差岡へ一挺ハ谷合へ隠シ置キ一門ヲ彈車共銘々荷フテ三里ノ山道ヲ越ヘル事ナレハ其困苦一方ナラス又此日ノ戦争小笠原奮發故多クノ人数ヲ失ヒタリ当今ノ銃戦ニテハ立派ラシキ闘戦ハ人数ヲ失フノミ敗走ノ色ヲ顯ラハシテハ迎モ立直ス事難シ其故ハ敵ニ後ロヲ見セルヤ否十分ニ追討ヲ懼ラレ引返シテノ発砲ハ真ニ難キ事也偕モ味方ハ追々山へ引上ケ遙カニ板室村ヲ顧リミレハ敵ハ人家へ火ヲ放チ火焰天ヲ掩フテ翻々タリ峙ニ到レハ雨降出ス午後八時三斗小屋村へ帰陣吾カ大砲隊ノ死傷ヲ調ヘルニ戦死米村彦二郎西村藤吉森文二郎手負牧野森之助山崎巳之助林久二郎成毛留蔵薄手四名都合十名味方総隊ニテ討死十六人手負二十七人也当夜十二時頃板室村旅宿ノ武平逃ケ来リ語りケルハ敵放火ヲ致シ鎮火ヲ待テ民家ノ土蔵ヲ破毀シテ物品ヲ取り出シ持運ヒタリ是レ強盜ノ仕業ニ均シト云フ有ル説ニ板室へ急迫セラレシハ二十日ノ夜白川落城ニ付敗兵太田原へ集合シ当方ノ応援セシトノ由偕又穴沢村名主源右エ門味方ノ内へ交リ来リシカ当隊ノ探索方ヲ依托セシ者ユヘ恠敷思フ者モナカリシカ以前ト違ヒ自身ト氣ヲ付又何事モ斟酌スル故へ怪敷思ヒ捕押ヘテ穿鑿スルニ最モ偽言多シ依テ嚴重糾問ニ及ヒケレハ最早遁レ難キヲ知ツテ詳細白状ニ及ブハ自分儀太田原ノ家中ニ親戚有リ夫レヨリ此辺ノ探索ヲ屢々遂ケ内応致ス処へ今度会津方当本面へ出兵ト聞キ之究竟ノ儀ト存シケル折節旧御料所ノ好ミヲ以テ私へ搜索御依託ニ相成之コソ天幸ト存シ駈ケ走り夫々太田原へ内応致セシニ相違ナキ由ヲ申立ル又塩ヶ崎村ノ戦争モ前夜太田原へ会津方攻撃ノ次第ヲ報知シ僅カノ人数ヲ林茂モ伏セ置不異ニ打出サセシハ私ノ差図也人数少ナキ故へ其日ハ追討モ掛ケス昨夕方白川ヨリ多勢来リシユヘ会津方ノ寡兵ヲ報告シ穴沢村迄引入レ俾卯之助ニ案内致サセ

夜中ニ川ヲ渡リ嶮岨ヲ越へ伏兵ヲ致タサセ夜ノ明ルヲ待テ打出サセシニ相違ナシ之皆私ノ過罪ニシテ遁ル、ニ途チナシ最早天網恨ラムル処更ニナシ然ル可ク御所分下サル可シ併シ倅儀ハ私ノ差図ヲ以テ致セシ事ナレハ之ハ無罪ノ者故へ御宥免下サレタシト包マス其罪ヲ謝ス依テ軍目申聞ケケルハ此頃ノ争戦汝チカ誣言ノ舌頭ニ罹リ多クノ人命ヲ失ヒタリ是皆汝カ罪ナリ斬首シテ戦死ノ追善ニ備ヘテ可ナリ併シ汝カ首ヲ刎テモ今更ラ復ラヌ事ユヘ不日太田原城攻撃スヘシ其時反謀ノ実功ヲ立ツヘシ尤モ其期ハ沙汰致スヘク味方ハ寡兵也汝チ助力致ス可キ哉ト論シケレハ源右エ門辛ラキ命ヲ助カル事ナレハ有リ難ク委細了承ス依テ助命致サセ帰村ヲ免ス之深キ謀リ事有リテノ儀ナルヘシ兵士ハ了解セス此事ノ処置苦情ヲ鳴ラス者多シ 廿三日終日小雨降敵峠迄進軍ノ由哨兵隊ヨリ報告有リシカ巡邏兵ト見ヘテ早速引取りシ由再報有リ○廿四日曇天当所滞陣偕モ板室ノ様姿ヲ探ルニ廿三日ノ夕方敵引弘ヒシ由依テ谷間へ捨置テ来リシ大砲見届ケトシテ石川次郎塩谷敏良人夫ヲ引連テ板室ニ到リ大砲ヲ三斗小屋へ持返ス○廿五日折々雨降板室争戦ニ破毀セシ諸機械ヲ引換ヘル又会津ヨリ彈藥運送有リ偕又会津軍事方ヨリ来状△今般奥羽ノ諸侯同盟協力ノ定約相整ヒ不日ニ白川表へ發軍致スヘシトノ事且ツ席上へ使者トシ電着誓紙神文ノ面銘ヲ挙ル尤モ誓文ハ省略ス、伊達奥陸守家来坂帶刀但木土佐、上杉弾正太弼家来千坂三良右エ門斎役美作、丹羽金太夫家来丹羽一学、松平大学頭家来三浦金次郎、南部美濃守家来野村真鑑、阿部豊後守家来平田彈右エ門、相馬大膳太夫家来相馬朝負、佐竹右京太夫家来大浦帶刀、水野新次郎家来水野三良右エ門池田權右エ門 安藤理三郎家来大平伊織 生駒文藏家来梶川嘉藤太右定約ヲ詰ヒ閏四月廿二日退散ノ由又若松在留ノ諸侯ニハ―肥前唐津―小笠原壱岐守―備中松山―板倉伊賀守―越後長岡―牧野備前守―勢州桑名―松平越中守等ノ由伝説有リ斯テ又会津藩ヨリ上書ノ一報ヲ得テ意ハ祥ラカニ解セスト雖モ其倅拳ケル今般御復攻之御拳御曠世之御猛断大公至誠之御英図ヨリ被為出候御義

実ニ不堪感從ニ御次第二候併御連枝御普代臣子之面々ヨリ奉伺候而者九重 御幼冲輩下御動揺之折柄御祖宗變世之御大業卒然一朝御辭解ニ相成候段爭テカ座視傍觀仕ルヘキヤ悲憤痛惋此事ニ候此上ハ利害得失ヲ不顧徳川氏ノ為益々君臣ノ大義ヲ砥礪シ數百年之御厚恩ニ報シ候之外無之儀ト奉存抑モ 東照宮御武徳ヲ以テ御定メ在ラセラレ大ニ内外之諸侯ヲ封セラレ候テヨリ何レモ忠臣之分ヲ守リ候事殆ト今二三百年其功德之隆宝ニ前以來御比例モ無之処近年草莽不逞之徒姦説ヲ蠱張シ禍ヲ蕭牆ノ内ニ醸シ次第二御羽翼ヲ奉毅キ御孤立之勢ヒニ相成候テヨリ既ニ近來討幕之全ヲ相唱候ニ至リ又一變シテ今日ノ場合ニ奉陷リ剩ヘ万石以上ノ進退ハ今日ヨリ而役ニテ取扱候旨被 仰出且又召ノ諸侯上京之上ハ 王臣ト相心得候様御沙汰モ出候哉之趣キ実以奉恐入候次第ニテ一旦 朝命相下リ候上者即日幕府ト臣下之恩義相絶候辺ヨリ又候如何様ニ異事出来候哉モ計リ難ク実ニ寒心ノ到リニ候夫子弟功臣ヲ建立シ夫々大録ヲ宛行ハレ候儀モ申迄モ之ナキ事ニ候得共私愛御□恨ヨリ出候儀ニハ万々之ナク斯御時節ニコソ飽迄扶持匡救ノ為ニ建置レ候ノ処昇平數百年上下ノ情隔絶イタシ君臣ノ恩義澆薄ニ趣ク御連枝御普代ノ向過モ各其民土ヲ私シ自分開拓封殖イタシ候心得ニ相成甚敷ハ從來姦説ニ籠絡セラレ幕府ト君臣ノ大義ヲ忘レ斯ル御大難ニ臨ミ不斗モ不忠不義ニ陥リ候モ計リ難シ近年御多難ノ折柄御親藩其外各々天幕ノ為ニ周旋シ聊カ機機ノ御次第之レ有リ候モ全ク御祖宗ノ御大業御恢復之一途ニ候処臣僕ノ諸藩ト比肩シ徳川家ト成サセラレ候御事実ニ冠履顛倒綱常地ヲ弘ヒ嗚呼年寒シテ君直ノ大義ヲ明良ニスル者ハ寧ロ忘恩ノ 王臣タランヨリ全義ノ陪臣トナリテ益ス砥節奮武之目的ヲ相建候得ハ即チ依然タル徳川氏ヲ失ナハセラレス世運御挽回之斯モ有之哉ト奉存候猶御深算ノ御見込之レ有ル可ク国家ノ為御示シ有之度事

右肥州東都郎ヨリ被差出辭氣慨切

コトハツカイナケキ

右当四月差出サレシ由伝説有リシ故日記ニ綴リ置シ也

○廿六日曇天午後雨降滞在異儀ナシ○廿八日雨降滞在小島祐左エ門池田栄助沢田圭十郎自分共四人温泉場ヲ一見旁タ登山湯治一泊ス異儀ナシ○廿九日雨降滞在午前十時温泉ヨリ帰ル又昨日午後六時會津原対馬朱雀隊ヲ百人引卒応援トシ出兵又今夕方原田主馬之助短兵百人余引卒シ到着之ハ塩ヶ崎板室ノ両敗ヲ報知セシユヘ援兵タリ○五月朔日雨降今朝至急太田原攻撃ノ協議有リ過日兩度ノ敗辱ヲ雪ク可シト諸隊士奨励ス偕又密封ノ書ヲ認メ急使ヲ以テ穴沢村名主源右エ門方申越ス様ハ兼テ談示置シ通り來ル四日愈太田原攻戰ノ軍議相定リ依テハ塩ヶ崎ヨリハ要害モ宜シキ由今度ハ鍋掛ノ方ヨリ襲撃スヘシ併シ彼方ハ不案内ノ地理故御苦労ナカラ早朝六斗治村迄來リ鍋掛宿迄ノ周旋方頼ミ入又太田原ヘハ油斷致ス様ニ弁シ下サレ度味方ノ勝敗ハ貴所ノ意中ニ有ル可シ必ス違約有ヘカラスト懇々ニ頼ミ入ル様ニ送りケリステ午前九時三斗小屋村ヲ雷発其勢五百ニ過ス夫ヨリ三里ノ山ヲ越ヘテ板室村ニテ兵糧ヲ遣ヒ午後一時板室ヲ出立川ヲ渡ルト直ニ右ノ方山添ヘ入ル此所ヨリ穴沢ハ左リ東ニ当テ壺里半隔テタリ偕モ吾カ兵ハ西ヨリ南ヘ山ノ裾通りヲ廻リ行程三里<sup>モ</sup>百村ヘ着雨降事終日強シ誰壺人モ乾キシ者ナシ村長ニ此近辺ノ形姿ヲ聞ニ昨廿九日迄三日ノ間タ爰ヨリ壺里半南ノ関谷村ニ合戦有リ是ハ塩原詰ノ會津勢ト太田原黒羽根島山ノ勢ト戦ヒ夫カ為メニ此辺ハ混動大方ナラス諸道具ハ勿論戸障子ノ類迄山ヘ運ヒ隠シテ何壺ツナシト云依テ糧米味噌大釜ノ周旋方ヲ頼トシアハラ家ニ宿陣ス吾カ砲隊ハ百姓留二郎方又夜ニ成ツテモ強雨也明レハ○二日大雨腰兵糧ヲ渡シ未明ニ出發進軍壺里折戸村小休ミ近傍ノ姿勢ヲ搜ルニ木島村辺ニ敵潜伏ノ由里數ヲ問ヘハ壺里ニ足ラスト云方位ヲ問ヘハ大田原ヘ凡四里ニシテ木島通りカ近道ナリト云又問フ大砲カ通ル可シヤ夫ハ迎モ通ルマシ平地ナレ共道狭ク殊ニ原野故高低有リ小流レ有尤モ関谷通りカ街道ユヘ此方ハ差間ヘナシト云フ又所々ニ堀有テ兵ヲ伏ルニハ都合宜シキユヘ御用心有ル可シト細カニ報ス之ニ依テ大砲ハ関谷村ヲ廻ルト決シ小銃ハ伝法隊先鋒ニテ木島村ヲ目途ニ發



出ス吾カ隊ハ是ヨリ関谷村へ着シ景況ヲ見ルニ人家ハ明放シニシテ人ナキ鉢ユヘ安心ナラス西風東風ト探リシ処裏山ノ陰ニ潜居シケリ様姿ヲ聞ケハ昨日迄ノ戦ヒニ難渋ヲ成シ漸ヤク今朝程帰宅シテ家ノ内ヲ見レハ血カ溢レルヤラ死人カ有ルヤラ目モ向ケラレヌ姿ナリシヲ苦ルシミナカラ先刻迄ニ取り片付ケシ処へ又々御人数ノ見ヘケルユヘ恐愕シテ遁来リ只今愁ヒテ語り合ヒシ也誠トノ修羅ノ苦シミモ是レニハ増サジト蒼醒テ語りケル其愍然ナル事思ヒヤラレケリ又云フ我等ハ当所ニテ争戦致スニ非ラス今日大勢太田原へ責寄せタリ吾カ隊モ之レヨリ太田原へ趣クナリ此近辺ノ敵ハ引上ケシニ相違ナキヤ隠スト又禍ヒ来ルヘシト問フニ更ニ此辺ニハ居ラス其訳ハ昨日ノ合戦ニ大敗軍トノ事氣遣ヒシ給フ事ナカレト云フ又太田原ヘノ里程ヲ問ヘハ是ヨリ凡四里途中ニ人家モナク原ノ一ト筋道ナリト報ス爰ニテ腰兵糧ヲ喰ヒ案内者ヲ頼ミ大雨ノナカヲ駈足ニテ進ム事凡ソ三里強雨中故道路ヲ水押流シテ砲車自由ニ走ツテ進ムノ便リ宜シ然ルニ砲声夥タ、敷聞ヘテ戦争最中ノ鉢吾カ隊モ至急ニ押寄せ梨畑毛ヲ廻テ大手ヘ逼リ大砲ヲ連発ス間モナク大手ノ多門ヘ彈火焰ヘ付雨中ナカラモ火勢翻々ト焰登ル又小銃ハ三方ヨリ透間モナク打掛ル又短兵ハ木島村ヘ出張ノ敵ヲ追ヒ立追ヒ詰メ血戦ス併シ鎗刀戦ニ到テハ会津ノ武術ニ敵シ難ク哉右往左往ニ敗走ス城中ハ見テ居ル中チニ火ト成リ愍然ナルハ火先市中ヘ飛ンテ七八分通り焰焼ス偕又敵ハ鍋掛ケ黒羽根ノ方ヘ落去ス味方討取首級尤モ多ク味方ニ恠我ハ薄手壱人和田左内此日ノ戦争ニ全利ヲ得シハ穴沢村名主源右エ門罰首致ス可キヲ助命致シ置五月四日鍋掛ケ宿ヨリ進撃致ス可キノ密書ヲ遣シ敵ヘ内応致スハ必定ト計リ不意ニ西方ヨリ攻戦ニ及ヒシ事故苦モナク全利ヲ得タリ敵ノ形姿ヲ探ルニ源右エ門ノ内報ヲ信用シテ鍋掛ノ方面ハ要害不弁ノ地ナレハ俄カニ人夫ヲ費シ防禦ニ構ヘ又黒羽根ヘ援兵ヲ頼ミ挟ミ打チノ詰構ヲ設ケ此日ハ強雨ナレハ何ノ用心モナク大油断ニテ酒肴ヲ催シケル所ヘ不慮ニ獎軍シ木島ノ敵ハ短兵ニ托シ銃兵ハ太田原ヘ発向セシナレハ木島村ヨリ報告スル間モ

ナカリシ由之ハ味方反姦ノ謀リコトヲ用ヒシナリ偕午後五時落城ト也ケレハ人数ヲ指揮シ朱雀隊短兵隊ハ三斗小谷村ヘ引上ケル吾カ大隊ハ関谷村ヘ引上ル夜十二時着終日終夜雨降ル事夥シ雨中ナカラモ敵地故哨兵ヲ口々ヘ出シテ堅固ニ守衛ス此大雨ニ何レモ陣笠計リ漸ヤク古表ノ類ヲ求メテ凌ク明レハ○三日雨降午後ヨリ曇天昨夜関谷村ノ明キ家ニ宿リヲ借り早朝出發行程三里余塩原村へ着陣此辺ノ風土ヲ見ルニ東ハ岩屈ノ高山南西ハ大川有リ其央ノ細道是街道ナリ又中途ニ関門ヲ建テ胸壁ヲ築キ砲ヲ構ヘ銃鎗兵ヲ準備シ堅固ニ守衛ス之ハ元吾カ同隊ナリシ草風隊ナリ去ル関谷ニテ三日ノ合戦ハ此口ヨリ進撃致セシ由又此路傍山谷ノ景色至極宜シ都テ野州塩原ノ郷ニテ其小村七ヶ村有リ又川ノ向フニ高名ノ傾城高尾太夫ノ旧跡墳墓有リ又温泉湯場ニシテ旅客宿多シ川ニ添フテ一里力間ニ涌出ル家作り尤モ美也夏向ハ湯浴ノ客人多クシテ繁昌ノ由吾カ隊ハ畑折村ノ和泉屋武右エ門塗屋久助ヘ宿泊ス此日笠木村名主甚五右エ門人夫宰領トシテ来リ語りケルハ去月廿二日板室戦争ノ復リ太田原勢笠木村ヘ立寄り謂レナク妨害乱妨ニ及ヒ剩ヘ放火致シ去リヌ是ハ其節会津方ノ旅宿ヲ致セシ故ヘ成ル可キ哉又ハ財宝ヲ得ンカ為ノ仕業ナル可キ歟何レニシテモ無罪ノ民ヲ難渋致サセ不仁ノ儀ト歎息臆感ニ堪ヘス御加勢致シテモ此恨ヲ散ンセント村中憤怒ノ折柄昨日太田原落城戦死手負夥シト聞餓鬼ヲ散ンシ人夫ヲ連レテ参着セリト悦ブ鉢ナリ倩ヲ思ヘハ愍然千万氣ノ毒至極ト懇ニ諭シケリ○四日曇天当所ニ滞陣端午ノ節会ニ付餅ヲ飾テ隊中祝ス今午後五時會津探索方渡辺正作江戸表ヨリ密カニ到着江戸表ノ景勢ヲ大略告ケ云フ東叡山寛永寺ノ山内ニ屯營スル彰義隊ハ日ニ増人数加リ威害ヲ恣ニシテ私論ヲ発シ妨害ヲ働キシ者モ之アリ此姿ニテ増意セハ必定動乱ヲ醸ス可シトノ密評有リ又林正之助伊庭八郎ハ遊撃隊其他ノ人数凡三百人引卒シ豆州ヘ脱セシ由之ハ沼津小田原ノ両藩ヲ説テ箱根ノ関門ヲ閉塞シテ東西ノ通路ヲ断切り自恣ヲ妨ケル内海軍ハ西藩ノ空巢ヲ襲フ謀策ナリト有ル真友ノ嘶シナリト云フ又官軍モ奥羽鎮定ノ儀ハ死傷多

クシテ軍旁少ナカラズ此様姿ニテハ急速ノ鎮撫ニハ相成ル間敷ト御心痛  
屢々御軍議有ルトノ風評有リト云又爰ニ勝安房守儀主家ノ御所置何等ノ  
御沙汰モ仰セ出サレスルヲ患ヒテ国忠ノ建言書田安殿迄出サレタル其文  
面得タリト云フ依テ一見ノ上書写シ茲ニ挙ル

亡国負罪ノ臣義邦謹而当今ノ形勢情実ヲ陳述申上ケ奉リ候既ニ去ル十  
一日都城御渡有之 大総督御入城被遊候而ヨリ以来今日ニ及ヒ候得共  
御所置ニ付何等ノ被 仰出モ無之江府鎮撫等被 仰出厚ク御配意ハ御  
座候得共人心日日ニ恟々疑念相結ヒ其方嚮ヲ弁セス重ク君臣ノ礼節ヲ  
守リ候者ハ恭順罷在候得共往日之大城今日ニ至リ候而ハ野草繁茂郭堞  
落剥郭門ハ乞丐非人ノ巢穴ト相變シ実々人臣タル者見ルニ忍ヒサルノ  
形勢ト相成申候御家人ノ面々其養ヒ候処ノ子弟從僕ノ如キモ其主家采  
邑ヲ失ナヒ飢渴ニ及ヒ候者大氏式拾七万人ニ下ラス之カ為ニ都下三百  
万ノ商民同ク生産ヲ取失ヒ夜間ハ盜賊横行シ無辜ヲ切害シ老幼路上ニ  
倒レ死シ壯者ハ近郊ニ屯集シ強盜ヲ事ト致シ候軀誠ニ見聞ニ堪ス候斯  
ノ如クシテ猶数日ヲ経候得ハ民ヲ水火ノ中ニ投スルニ同シ皇天覆戴ノ  
蒼生亦何等ノ罪ニ御座候耶一円弁解仕リ難クト存シ奉リ候固ヨリ小臣  
輩ニ至リ候而ハ負罪ノ者速ニ斧鉞ヲ加ヘラレ或ハ放逐遊ハサレ候共其  
罪ニ応シ候嚴罰ノ御処置御座候ハ、然ル可キ歟況ヤ今マ外ニシテハ強  
国ノ交際盛シニシテ外邦ノ士民踵ヲ接シ民住ノモノ数千人ニ下ラス北  
方ハ強魯ニ境ヲ接シ候御邦内協力同心勇ヲ海外ニ争ヒ候事方今第一之  
御急務ト存シ奉リ候処国内ノ人心方向ヲ失ヒ忌懼ヲ抱キ窃カニ離散ノ  
基心固ク相成候様御仕向遊ハサレ候得ハ何共以テ拙考ニ能ハサル所仮  
令鉄艦数艘猛卒数百万ヲ御備ヘ御座候共何ノ御用ニモ相立ス空敷同胞  
慣争ノ端ト相成申ス可ク候定而御推算ハ在ラセラレ候御事負罪ノ小臣  
輩頗ル過当ノ愚慮ニ御座候我主君之念願爰ニ外ナラス誠意至恭ノ心中  
モ当今ノ御模様ニ候ハ、終ニ水泡ト相成誠ニ悲歎痛哭ニ堪ス候御三家  
御三卿ヲ立置レ候モ此際ハ御補翼遊ハサレ且ハ 朝廷<sup>コウ</sup>ヘ忠諫御尽力御

座候儀ハ乍恐其職掌哉与存シ奉リ候間忌諱ヲ憚ラス申上奉リ候近日小  
臣 大総督府下ヘ一書ヲ拝呈仕候得共元ヨリ負罪ノ身分 御采用相成  
ラス候ハ御尤ノ御事ト存シ奉リ候得共形勢切迫大瓦解ニ立別レ申スヘ  
キヲ傍觀仕候ハ実ニ忍ヒサル処何卒閣下猶 御尽力ヲ添サセラレ督府  
ヘ御歎願成シ下サレ候ハ、難有奉存候元ヨリ小臣ノ儀ニ之ナク都下百  
万ノ生靈ヲ救ハサセラレ候ハ乍恐 大総督府ノ御大任ト奉存候小臣元  
来頑愚ノ性質忌諱ヲ相冒シ候罪ヲ以テ死ヲ賜ラハ死後ノ幸ヒ何事カ是  
ニ過キ申ス可キ哉今心裡毫モ包マス申上奉リ候死罪々々謹言

戊辰閏四月

勝安房守

偕又江戸市中モ到テ不景氣ノ様姿又徳川家ノ御所置モ如何相成可ク哉ト  
風評区々也ト云フ又有ル説ニ奥羽ノ鎮撫相立タサル内ハ御沙汰有ル間敷  
トノ風聞專ラ有リ依テ勝安房カ頼リニ御所置ヲ仰ク由外ニ異ナル事ナシ  
ト告ス俱ニ無事ヲ語ツテ塩原ニ泊ス明レハ○五月五日折々雨降午前七時  
塩原出発真ニ尾頭峠ト云フ三里ノ山嶮山ニシテ塩原村ヨリ登リ二里是ヲ  
九十九曲り坂ト云峠ニ尾頭権現ノ小社有リ下リ一里禁ハ中三依村是レハ  
会津ヨリ日光ヘノ街道ナリ夫ヨリ上三依村ヲ經テ横川宿ヘ旅泊自分岩城  
正平ノ兩人ハ軍事用有テ爰ヨリ三里糸沢宿ヘ越ス名主文五郎方ヘ旅泊ス  
明レハ○六日曇天午後三時ヨリ大雨当所ニテ本隊ヲ待合セ出発川島村中  
原村ヲ過テ田島宿ヘ着吾カ大砲隊旅宿玉屋嘉右衛門松屋八良兵衛最上屋  
宇兵衛ノ三軒ヘ泊ス○七日雨降休兵当所滞在今日出兵方面ノ儀ニ付軍事  
掛リヘ使者出立ス偕五月二日野州太田原城攻撃ノ節全利ヲ得候趣キ若松  
表ヘ申報致シケレハ原田對馬ヲ相渡サル宰相殿感状

○今般太田原城攻撃ノ節進速成ニ寄り得全利候条一段之事ニ候依之乍  
些少為賞三軍江金進候事

辰五月日

○八日雨降当所休兵異變ナシ○九日雨降此頃ノ霖雨ニテ所々ノ橋梁落流  
ス偕当宿ニ蕉翁ノ碑在リ

山里は万歳遅し梅のはな はせを

○十日晴ル休兵小泉高之進土井平次郎保科家ノ脱臣渡辺乙吉会藩土屋静衛ノ四名若松ヨリ急ノ召シニテ出立之ハ白川辺ヨリ平潟辺へ探索ノ由又朱雀隊ノ内原田主馬之助至急白川口へ出兵応援ノ報告有り依テ午後一時出発○十一日快晴当宿休兵日光口藤原詰メ撤兵隊銃士森田駒吉関口八五郎若松表へ通路ノ途中立寄り告ケテ云フ本月六日日光下タ今市へ攻撃ノ節午後二時迄ハ勝ち軍サ遂ニ同所ノ関門へ迫り敵今市ヲ落去ト見ヘシニ付短兵急ニ乗リ破ラント諸隊へ下知ヲ伝ヘテ撃戦中へ宇都宮勢ノ押ヘトシテ大沢宿へ潜伏サセシニ小隊引上来リシ故其様子ヲ問フニ誰レ云トナク今市ハ会津方ニテ乗取リタリ早々今市へ引上ケ可クトノ事故ナリト云是コソ敵ノ計策ナル可シ今大沢駅ヨリ挟マレナハ味方頗ル難儀ナルヘシ早ク大沢へ復テ固ク防ク可シト総裁衆ヨリ嚴重ニ託サ引復ヘサントスル所へ敵ノ大軍潮ノ湧カ如ク大沢街道ヲ進軍味方モ後面戦隊ニ変測シテ暫時戦争ノ内今市勢打テ出テ戦フ事烈シ味方左右ニ敵ヲ引受手負ノミ多シ分ケテモ今市勢ハ先敗ヲ雪カント十倍奮発ス味方防戦相成兼七八町程引テ原野ニ屯ス然ルニ西ノ方僅カ拒レテ森友村ト云有リ此村ノ陰ニ敵潜伏シテ味方ノ横合ヘ不意ニ打掛ル正面ノ敵ハ獎撃ノ有様進退爰ニ極リケル時ニ隊長下知シテ云フ森友ノ敵ハ少勢ナリト見ヘタリ此敵ヲ打散シテ大渡村迄引上ケ可シ此所ハ地理悪シ誓テ戦フ可カラツトノ指揮ニ従ヒ森友ヘ一手ニ成テ罹リシカバ敵ハ寡兵ニテ味方ヲ脅ヤカセシ而已ト見ヘテ敗走ス依テ一方ノ路チヲ得敗サントスルニ左右沼田ニシテ畔細シ大砲ハ運送ナラサルニ付沼田ヘ埋メ隠シ吾先ニト走ル処敵ハ勝ニ乗テ追撃急ナリ味方爰ニテ討ル、者多シ疵兵ヲ看守シナカラ午後六時頃漸ク大渡村へ着爰ニテ敵モ間遠ニ成リ少シ休足夫ヨリ川ヲ渡リテ藤原村大原村へ引上ケ死傷取調ル処即死十二人深手十八名浅手八十一人計百拾壹人其朝出兵ノ人員ハ五百余人ナルヲ僅カ三時間ノ闘戦ニ死傷ノ多キ事驚愕致シタリ今日疵兵ヲ若松へ看送致スナリト荒増ヲ語ツテ此夜ハ遠路ノ勞ヲ養ヒケリ

偕又夜十二時頃兵士暴醉ノ防害ヲ働キ既ニ珍事ニモ及バントスル形勢迅速駈ケ付事情調ノ上説得鎮定ス○十二日雨降休兵日光口総轄大鳥圭介外三名藤原村ヨリ早打チニテ通行当駅小休ミ面会致ス是ハ日光口へ兵ヲ増加シテ此口ヨリ江戸へ討テ出テ然ル可キ歟否哉ノ商議ナル由同夜十一時頃藤原村ヨリ早打ニテ二人通行之ハ大鳥氏へ急報ナル由○十三日晴ル今朝方面出兵ノ急告有り当駅休兵滞在ノ内半分隊ハ上州沼田口檜枝岐村へ出兵半分隊ハ野州太田原口三斗小屋村出兵致ス可キ旨之ニ依テ分隊シ上州口へハ伝習一番五番六番八番回天隊吾カ大砲隊半分隊大砲野戦台二門数計二百人余松井九郎所轄ス太田原口へハ伝習二番三番四番七番大砲隊左リ半分隊大砲二門数員二百余人工藤衛守所轄ス偕分隊定リケレハ明十四日ノ出発ト相成吾儕ハ檜枝岐村エ出陣ノ都合ニ成ル○十四日雨降午後晴ル田島駅出發檜枝岐街道エ入テ今生村下塩津村福目沢村金井沢村豆和田村黒沢村当村迄田島ヨリ二里細井善四郎方小休当家ハ富家ニシテ酒造ヲ致シ会津ノ用達ナル由爰ヨリ行程壹里半針生村宿陣吾隊ハ百姓五兵衛方エ泊ス細井善四郎ヨリ上品ノ製酒到来ス○十五日晴天午後ヨリ雷鳴夕立強雨針生村出發爰ヨリ駒戸峠ト云フ三里ノ山アリ尾頭峠ニモ劣ラス越テ桺ヲ入小谷村ト云ヒ夫ヨリ中小谷村山口村当所小休禁ヨリ壹里偕テ当村ノ片傍ニ稲川ト云フ大川有リ水原ハ檜枝岐村ヨリ四里山ノ頂キニ尾瀬沼ト云大池有リ一是レハ上州戸倉村へ越スニハ八里ノ峠ナリ一之ヨリ流れ出シ会津ノ津川村ヲ經テ流末ハ越後新潟ト云フ一此里数凡ソ三十里余ト云一又此川ニテ鮭鯿有リ又イワナト云フ魚ヲ取ル此谷間ヒ川添ノ総名稲組領ト云又爰ヨリ六里下リテ越後ヘノ細道八十里越エト云テ八里ノ峠有ツテ奥越ノ国境也シ由一極難道故一里モ十里ニ当ルヲ以テ八十里越ヘト云習ヒシ由一偕テ午後當所出發大新田村三ツ根沢村木櫛村古町村泊陣山口村ヨリ爰迄二里半吾儕宿泊百姓直右エ門此地田畑共多ク家作り等モ町風ニシテ美宜ナリ又産物ニハ白麻布ノ織物夥シ下直ニシテ壹疋ノ定価上品壹両貳分下品金壹兩壹分位ヒ江戸ノ直段ニ比スレハ半直ニモ到ラス又菰



類多シ風土陋邑ニ稀ナ地也○十六日雨降午後晴ル当所発白沢村浜野村  
落合村大原村小立岩村当村迄ハ田面少々有リ是ヨリ上ハ田額更ニ無シ大  
桃村小休古町村ヨリ二里半又大桃村ヨリ檜枝岐村エ三里八町ノ間タ人家  
無シ又嶮岨ニシテ道路狭ク稲川ヲ越ヘ換ル事数回又橋梁ハ何レモ大丸太  
ノ材木沓本ヲ棧ケ長サ三丈ヨリ四丈ニ到ル不馴レノ者ハ通行不弁理併シ  
土地ノ牛馬ハ之ヲ渡ルニ術ヲ得タルト見ヘタリ又大桃村ヨリ凡壹里上ニ  
駒ヶ嶽ト云高山有リ頂上ニ駒形大明神ヲ祭ル由一高山故炎暑ニモ雪消ル  
ル事ナシ一夫ヨリ半里上ノ川端ニ温泉涌出ル尤モ人家杯ハナシ唯タ往復  
ノ人歟自恣ニ浴スル迄又此傍ラニ鮭ヲトル落シ梁有リ機械ハ略ス偕爰ヨ  
リ凡壹里半檜枝岐村着吾隊宿陣百姓間野恒次郎○十七日折々雨降滯在此  
辺モ都テ霧深クシテヤ、モスレハ雨降ル故ニ里人戸外ノ節ハ蓑笠ヲ放ナ  
サス辺鄙ナルハ九里山ニモ劣ラス食物ハ常食カ 稗 粟 小麦 饗応ノ  
上品ハ蕎麦切ニ過ル物ナキ由又菌類 山菜―野葵ノ類ナリ―鮎鮭イワナ  
―是ハヤマメノ類也―味噌ハ溜リト唱ケ醬油ニ換ヘテ両用ス又米ハ更ニ  
食スル事ナキ由○十八日曇天滯在偕テ上州沼田ヘノ地理順程ヲ聞ニ茲ヨ  
リ上州戸倉村ヘ八里ノ山有リ究メテ難所細道四里登テ峠之奥野上三ヶ国  
ノ境ヒ此処ニ大沼有リ尾瀬沼ト字ナス凡豎壹里横廿町計リ昔古ヨリ伝説  
ニ尾瀬太納言公奥州エ没落ノ時牛ニ乗テ茲迄来リ休息スル内其牛水ヲ求  
メ行イテ沼ニ落入リ其俛死ス依テ当今モ近カ牛此所ヲ通レハ暴風雨有リ  
又尾瀬大納言公ハ峠ヨリ凡壹里下リテ草庵ヲ結ヒ少シノ耕畑ヲ開拓シテ  
居住ス今ニ其旧地残レリト云フ又此山ノ中途ヨリ上ハ一面ニ篠竹熊笹ノ  
類繁茂シテ其上ヘ雪降積リ春陽ニ到レハ芽ヲ生シ累年積リシ事ナレハ弓  
箭モ通ル間敷ク又迂テ壹歩モ登ル事難シ又沼ノ傍ラ東北ニ当テ高キ岳有  
リ燧ヶ嶽ト云ヒ燧大権現ノ古祠有リ又峠ヨリ上州ヘ下リテ四里禁ヲ戸倉  
村此途中ニ焼山坂三平坂坏ト云フ嶮難道有リ戸倉村ヨリ沼田町迄凡九  
里此間ニ戸倉ヨリ土出村小下戸村須加川村千鳥村追具村高戸谷村大原村  
名前村高平村横須賀村等ナリ沼田町ヨリ上州高崎宿迄凡十二里又追具村

ヨリ分レテ上州伊勢崎町エ凡七里此途中ニ五里ノ峠有リ禁ヲ利根村夫ヨ  
リ大壩宿夫ヨリ伊勢崎町ナリ又当村ヨリ南方溪谷ノ細道ヲ繼テ行程七里  
日光山ノ裏ニ当テ川又村爰ニ温泉有リ又壹里半下リテ野角村之レヨリ九  
里山ノ郷ニシテ六方越ヘ不二見峠ヘモ出ルト云フ○十九日雨降午前八時  
総隊峠ヘ出発大砲ハ運送方不弁故当処ニ滯在○二十日雨降峠ニ哨兵所ヲ  
建設ス石川二郎病氣ニ付帰宿ス○廿一日快晴上州戸倉村ノ探索方ヨリ報  
告有リケルハ敵戸倉村ヘ蟻附シ近々攻撃致ス由尤敵ハ高崎沼田ノ軍勢凡  
四五百人モ在陣ノ由ト告ス依テ分隊長軍議ノ処兵士ハ此頃長々ノ休陣ニ  
テ退屈致セシ折柄ナレハ進ンテ之ヲ討シ事ヲ希望ス兵士ノ気合ニ乗テ敵  
ヲ討ハ宜ナラント商議決シテ直ニ獎軍ノ喇叭ヲ通信致サセ午前八時出陣  
ス其形勢手配ハ本道中央ニハ大砲隊先鋒壹番小隊五番小隊右翼ハ回天隊  
半分隊六番小隊案内者ヲ兼土地ノ獵兵十五人篠笹ノ茂リヲ潜テ進軍ス又  
左翼ハ回天隊半分隊八番小隊案内ヲ兼獵兵五人是モ篠笹ノ茂リヲ押破リ  
テ進軍ス此ノ左翼ハ中軍ノ指図ヲ受ケ争戦ノ模様ヲ計リ戸倉村ノ本營ヘ  
散弾ヲ飛ス可キトノ事尤モ進退掛引ハ中軍ノ喇叭ニテ応ス可シト令告ス  
隊々一々了承シテ發兵ス偕モ中軍ノ先隊凡二里程下山スレハ山ノ神ノ森  
有リ此所ヘ敵胸壁ヲ築建テ大砲二門ヲ構ヘ沼田高崎ノ兵守衛スル由兼テ  
報知有リケル故遙ルカノ岩陰ニテ見卸ロセハ敢テ多勢モ居ラサル殊殊ニ  
沼田高崎ノ兵ナラハ怖ル、ニタラスト吾兵侮リテ端兵急ニ胸壁エ逼ル敵  
モ胸壁ノ中チヨリ大小砲ヲ烈敷打出ス味方ハ数度ノ戦争□究理セシナレ  
ハ西風東風ノ巖陰或ハ木陰ニ身ヲ寄セ来丸ヲ除ケ、レハ敵ノ打出セシハ  
空彈ニ飛散ル暫時砲戦ノ内中軍ヨリ喇叭隊ヲ高キ岳ニ登ラセ右翼進軍ノ  
令ヲ通信ス其内敵ノ胸壁中ニ手負有リシト見ヘ周章ノ軋ヒ顯レケレハ味  
方激丸ヲ發スル事急ナリ敵胸壁中ニ屯防致シカネ手負ヲ担フテ敗走ス味  
方勝ニ乗テ追ヒ打ス斯テ右翼ノ隊モ合併シテ村口迄兵ヲ奨メシ所敵爰ノ  
関門ヲ閉鎖シテ防砲ヲ打出ス味方モ関門ニ逼テ闘戦スル内中軍ヨリ喇叭  
エ下知シテ左翼進軍攻撃ノ令ヲ通信ス時ニ左翼進軍ノ隊ハ道ナキ嶮岨ヲ

伝ヒ溪谷ヲ経村里ノ裏手少シ高キ所ノ茂リニ潜伏シ中軍ノ指揮ヲ待設ケシ事ナレハ喇叭ノ報令ヲ聞ヤ否ナ村里ノ中程エ打テ出テ破竹ノ如クニ攻戦ス敵ハ防クノ途ヲ失ヒ総敗軍ノ色見ヘケレハ味方猶予ナク追打ス当村ハ沼田ヘノ一筋道ニテ外ヘ走ル事ナラサル故敵ノ狼狽大方ナラス我先ニト遁去セリ味方戸倉村エ引上休息シ宿陣所ノ様姿ヲ見ルニ何レモ陣所トハ異リ酒肴ヲ整ヘ驕奢ノ体有リ又雑物機械彈藥銃砲等悉皆棄テ之有リ戰爭中味方ニ手負ナク敵ノ首ハ式ツ得タリ手負ノ分ハ連担シテ通レケリケリ依テ小銃大砲共破毀シ彈藥ハ川ヘ投シ雜品ハ燒捨テ午後三時引上ケ同八時峠ヘ帰着○廿二日雨降峠ヘ哨兵ヲ残シ置諸隊ハ檜枝岐エ引取ル○廿三日折々雨降峠ヘ哨兵交番トシテ老番小隊登山○廿四日晴ル当所ヨリ凡耆里上ミ字山ノ神所ト云フ処エ胸壁所見分トシテ出張大砲隊ヨリ小山精一郎山田道之助沢田啓十郎外二軍目二人人夫ヲ連レテ実地改メケル所地理適當ニ付樹木ヲ伐テ迅速築壁ニ取掛ル偕モ爰ニ胸壁ヲ築設スルハ峠ヘ人数ヲ置テハ糧米ノ運送ト云ヒ又ハ人家ナキ山上ノ霧深キ所ニ兵ヲ置テハ地疾ヲ受ルハ必定実ニ堪ヘサル儀ユヘ当処ヘ胸壁ヲ設ケ敵襲ヒ来ラハ防禦ス可キノ備ナリ又左右ノ山ニモ兵ヲ伏ルノ策ヲ設ケリ偕又此峠ノ高サハ日光男體山ニモ劣ラサル程ナレハ動モスレハ雨降ナリ○廿五日晴ル五番小隊哨兵交番トシテ登山ス又胸壁築立トシテ大砲隊ヨリ石川二郎川崎準三郎平井伊三郎塩谷敏郎人夫ヲ指揮シテ出張○廿六日晴ル前日同断池田榮助渡辺錠次郎酒井陽次郎沢木扇之助人夫ヲ引テ出張二番小隊峠ヘ交番出兵午後二時頃ヨリ急ニ大雷大雨胸壁落成大砲礎ヘ付迄ニシテ帰ル又今日切ニテ峠ノ哨兵ヲ引弘ヒ明日ヨリ毎朝四人宛斥候トシ交番ノ事○廿七日雨降胸壁処ヘ番兵小屋ヲ建ル○廿八日雨降異儀ナシ○廿九日晴ル午後四時會津朱雀隊二百人吾カ隊ト交番トシテ着陣ス同五時ヨリ大雨○晦日晴ル当所ノ守衛ハ朱雀隊ニ渡シ吾隊ハ出發ス大桃村小休宿百姓藤兵衛方夫ヨリ古町村泊リ宿百姓直右エ門方(欄外・朱書)「六月」○六月朔日快晴当所發途入小谷村小休百姓宇三郎方夫ヨリ駒戸峠ヲ越エテ針生

村泊リ宿百姓七右エ門方○二日晴ル当所ヲ發シテ三里田島駛着大坂屋吉兵衛方旅泊○三日晴ル当所休兵太田原口三斗小屋村エ出兵ノ分隊去月廿七日当宿ヘ着ノ由ニテ見舞ニ来リ互ノ無事ヲ祝ス○四日快晴白川口軍事方ヨリ報知有リ去ル閏四月白川城落去ノ後チ敵大軍ヲ以テ当城エ迫ラレ遂ニ開城夫ヨリ矢吹宿ヘ砲台ヲ構ヘ胸壁関門ヲ建テ對陣ス当今ノ形勢ヲ探ルニ敵此街道ハ進軍致スニ堅ク因テ平渴ヨリ岩城平ヲ責拔福島二本松ヘ攻メ逼ルノ由各地エ逼ラレナハ味方ノ難事早ク白川城ヲ落シ常野二討テ出テヘクト奥羽各藩ト商議シ白川城ヲ番手攻メト議定シ○第壹番八仙台ノ臣伊達伴右エ門軍勢三百員○第二番同臣白川彈正軍勢四百員○第三番同臣片倉登之助軍勢六百員○第四番奥州二本松丹羽ノ臣阿部勘右衛門軍勢三百員○第五番同州棚倉ノ臣片岡善右エ門軍勢二百五十員○第六番同州福島板倉ノ臣板倉帶刀軍勢三百員○第七番同州中村相馬ノ臣木股吉良兵衛軍勢二百五十員○第八番同州三春秋田ノ臣榊原伊織軍勢三百員○第九番同州盛岡南部ノ臣南部隼之助軍勢七百員○第十番同州弘前津輕ノ臣三浦六良右衛門軍勢六百員○第十一番羽州米沢上杉ノ臣色部一良左エ門軍勢五百員○第十二番會津ノ臣西郷源藏□川英馬軍勢四百員總計四千六百員内米沢會津ノ両臣遊軍ヲ兼軍中進退不時ノ攻撃応戰ヲ掌職ス方面定マリケレハ去五月廿日ヨリ順序ヲ操歩シテ攻戰數回ニ及ブト雖モ今日迄勝敗分ラス可否ハ後便ニ報スヘシト申越ス偕又檜枝岐出兵ノ隊ヘ感賞有リ○五日晴ル午後雨降今朝副總督ヨリ口達有リ方面御指揮ニ付伝習大隊ハ若松表エ引上ケ大砲隊回天隊ハ日光口藤原表エ出兵彼ノ地在陣ノ隊ト合併致シ互ニ協勵之レ有リ度トノ事依テ伝習隊ハ本日午後一時若松エ出立スト雖ドモ左右ノ兵士喋々ト鳴ラシケルハ去ル四月江戸表脱セシヨリ以來相互ニ協議和順シ生死ヲ俱ニ決ス可シト約セシヨリ戰務ニ懶惰ナク既ニ今日ニ到ル然ルヲ左右エ分隊トハ何等ノ過失ヲ以テナル歟情ケナキ愁愴ナラスヤ此上ハ會津ノ助力ヲ仰カス死ヲ一途ニ究メ太田原口ヘ打テ出テ白川城ヲ攻拔キ彼ノ城エ籠リ防禦ヲ固クシ諸侯ノ情氣ヲ生シテ内

証ノ時ヲ待テ事ヲ成行スヘシ又白川城ニ吾カ兵籠ラハ敵奥羽ノ鎮定輒ク行ワレマシ若シ敗軍セハ那須野ノ原ニ屍ヲ汚ス可シ何ノ恐怖アラン既ニ先年水戸ノ脱士ハ僅カニ百余人民徒ヲ集メテ四百人ニ満タス殊ニ不弁ノ和銃大砲ハ木筒ヲ用ヒケレ共常州筑波山野州大平山ニ屯集シ天下ノ兵ヲ惹マシケリ今哉吾カ兵三百ニ過キスト雖モ何レモ精兵又大砲小銃彈藥ニ到ル迄全□セリ是レヨリ直ニ發兵致ス可キ杯自擅ノ僻論ヲ專制シ既ニ其姿動顯ハレケレハ余儀ナク其旨總轄ヘ報達ス結城氏之ヲ聞キ人ノ人タル成情至極セリ併シナカラハ是ハ膚浅ニシテ大義ヲ興ス大丈夫ノ成行スル処ニ非ラス其故ハ江戸表出發以來主家ノ回復ヲ祈リ遁レ難キ數回ノ義戰ニ困苦シ今自恣ノ論ニ内証ヲ釀シ麾下會藩何レ歟敗滅シテモ同意同盟味方ノ咨嗟ナリ又死ヲ一途ニシ何ノ忠功ニ換ハラン哉假令実功ハ計リ難クト雖モ同心協力ヲ尽シ和順強戰ヲ逞抽致シタキモノナリ又即今方面何レモ寡兵余儀ナキ事態有レハ幾分隊ニモ配當シ援兵防禦防戰ヲ事トセズンバ由々數禍ヒヲ招ク可シ其旨意能々了弁シ必ラス小義ノ苦情ヲ主張シ志威ヲ強ラザル様ニ各兵ヘ懇切ニ説諭ヲ加エ大義ノ至論ニ奮勵シ出陣ニ差間ナキ様致シ度趣キ分隊長エ懇篤ニ談示有リ之ニ依テ其意ヲ違漏ナク兵士エ説キ諭シケレハ云々ナク何レモ感伏ス偕又秋月氏長々ノ疾病ニテ城下ニ閉居ニ付同人ヘ談議之有リ見舞致シ趣キ届ケシ処惣代ヲ以テ勝手タル可キトノ事之ニ因テ川崎準三郎小山精一郎石川二郎川村国太郎ノ四名明六日城下ヘ出立ト究マル又夜十時頃松下篤郎城下ヲ指シテ脱走ス又兵士モ密カニ脱走ノ聞ヘ之レ有ル故吾カ隊ハ嚴重ニ説得シテ真伏致サセケリ

○六日雨降川崎外三名若松ヘ出立当所滞在異議ナシ○七日曇天当所留○八日曇天午後雨降結城左馬之助日光口ヘ出發午後六時川崎外三名松下篤郎ヲ伴ヒ城下ヨリ帰着秋月ヨリ総督ヘ書状偕又川崎帰告テ曰ク榎本和泉守松平太郎軍艦二艦ニ乗組脱艦シ当今岩城平ヘ上陸ノ由確報ハ不日ニ有ル可クトノ風評有ル由○九日晴ル日光口詰メ撤兵関口八五郎中川吉之助疵所快方出兵当宿泊リ面會ニ来リ区々ノ浮評ヲ話スト雖モ真用致シ難

キ故劣略ス又吾カ宿泊大坂屋吉兵衛儀野州烏山ヨリ宇都宮辺ヘ探索トシ出立ス○十日晴ル午後五時ヨリ大風雨同七時頃回天隊兵士三十余人城下ヲ指シテ脱出ス○十一日雨隊回天隊ノ長脱士ヲ聞キ憤リ分隊伍長ニ銃士ヲ附与シテ早朝ニ出立致サセ佳懸ケサス大内村ニテ追付午後三時頃連返リケレハ隊長其不條理ヲ責メケレ平士悔悟伏罪ス之ニ依テ故ナク相濟○十二日曇天日光口總轄ヨリ来状明十三日田島宿出立藤原村ヘ發隊致ス可キ由依テ其意ヲ漏ナク示ス○十三日快晴当駅出發シ中三依村上野屋文右エ門方宿泊午後二時ヨリ大雨○十四日晴ル小島祐左エ門急症發シ川崎塩谷内田ノ三士当村ヘ滞在大黒屋文次郎方エ宿替ス○十五日曇天午後雨降小島全快ニ付当所出立五十里村小休ミ高原村到着吾カ隊ハ当所ニ在留有リ若松ヨリ当村迄凡式十里田島迄拾貳里藤原村エ式里半途中心里半ノ山ヨリ宿泊吉野屋七郎右エ門和泉屋治兵衛方偕又松葉權平藤原村中軍ヘ至着届ケニ出タル由○十六日晴ル当所留松葉權平用済帰宿五月廿一日上州口戸倉村攻撃全利ノ賞トシ酒料金壹兩宛給賞有リ○十七日曇天午後二時ヨリ大雨洪水昨夜ヨリ川治村葉師堂前ヘ哨兵ヲ出ス偕當村川向フニ川治村トテ家數式拾軒程ノ小邑有リ此川端ニ温泉涌出ル出水ノ節ハ水ヲ冠リテ入ル事ナラス又湯守壹軒有リ綺麗ニシテ貸座敷杯アリ辺鄙ニ不似合ナリ又当高原村モ二十軒ニ過キスト雖モ街道故家作りハ旅籠屋風ナリ○十八日曇リ午後雨降異事ナシ○十九日晴ル中軍ヨリ來書ニ付午後一時松葉川崎山田金子ノ四名出頭午後八時帰宿中軍ヨリ口達ノ趣キヲ陳述有リケル様大砲隊ハ撤兵隊エ合併回天隊ハ草風隊エ合併自今撤兵草風ト唱ヘ可キ旨又大砲二門ハ山田道之助ヲ頭取ト補シ自今大砲方ト唱ヘ可シ出兵ノ際ハ護衛隊ヲ附与ス可キトノ旨何レモ異儀ナク了承ス扱又大砲方ニ残リシハ元彰義隊ヲ脱シテ来リシ山田石川ヲ首メ十二名外二下妻ノ脱藩金子健作ヲ首トシ五名合シテ拾七名ナリ中軍ヨリ指揮有ル迄大砲方ハ当所ニ在留○二十日曇天午後三時ヨリ雨降早朝当所出發野州塩谷郡藤原駅ヘ着ノ処撤兵隊ハ玆ヨリ拾町程下モ小原村詰ニ付同村エ至着シ友部田中美



濃部ノ諸君ニ面会シ互ノ無事ヲ祝述ス宿泊ハ上田屋嘉兵衛方当村ハ僅カ  
十二軒ノ小邑ナリ又藤原村ノ景況ヲ見ル町風ニ家作シテ百二十軒モ有  
リ旅籠屋風ノ家二十軒モ有テ此辺ニハヨキ里ナリ○廿一日曇天午後五時  
ヨリ雨降頭取美濃藏人松葉権平塩谷敏郎小島祐左エ門藤原村中軍へ出頭  
総督大島圭介殿撒兵頭加藤平内殿ニ偈シ塩谷小島指揮役勤方撒兵隊會計  
兼兵糧方心得申渡サル又池田栄助内田鎧三郎岩城庄平沢田圭十郎指揮役  
隊附申渡サル午後五時小原村エ帰ル偕又越後出陣ノ隊長土方歳三郎―徳  
川氏ノ脱士―ヨリ越後ノ形勢報知有リ吾隊当地出兵ノ際長岡ノ城主牧野  
氏ハ無論会津ニ同盟合併奮励又米沢庄内両藩ヨリ応援ノ軍勢ヲ出シ惣勢  
三千余人何レモ憤激勉強新発田城モ没落三条ヲ攻拔降伏致サセ方今ノ勢  
ヒ破竹ノ如シ併シ高田城ハ外境堅地ニシテ輒ク攻メ没シ難シ去リナカラ  
此度ヲ失ハズ獎撃セハ不日ニ全功ヲ立越後平定ヲ後報ニ申進シ度トノ事  
○廿二日雨降小原村在留異事ナシ○廿三日雨降爰ヨリ沓里西大原村へ小  
原藤原ヨリ交番ニ哨兵ヲ出シ同村ヨリ六町程川下モ字岩穴ト云フ所へ胸  
壁ヲ建築シ番兵ヲ備ヘテ健固ニ防禦ス此岩穴ト云フ所ハ南ハ嶮岨ニシテ  
輒ク越エ難ク北ハ漫々タル緒川ニ塞カリ其街道僅カ三間巾位ヒヨリ五間  
或ハ拾間位ヒノ巾モ有リ何レモ山川ニ跨カリ進退不弁ノ地理ナリ又茲ヨ  
リ沓里半程溪谷ヲ下リテ大渡リ村夫ヨリ右リ北へ川ヲ渡リテ日光エノ支  
道又此所ニテ日光大谷川モ落合フ左リ南エ行ケハ氏家宿喜連川宿エ出ル  
是ハ奥州街道ナリ偕又今日ハ大原村詰当番ニ付同村エ出兵第二伝習隊ト  
交ル吾カ宿陣角屋弥五右エ門方○廿四日快晴午前八時ヨリ三番小隊大渡  
村辺エ巡邏トシテ獎兵午後五時無事ニ帰ル○廿五日快晴今市森友込探索  
方ヨリ急報未明ニ有リケルハ敵昨夜ノ内ニ大谷川エ船橋ヲ掛ケ大軍ヲ発  
シテ藤原ヲ攻撃ノ由髣髴カ二聞ニ敵ノ軍配ハ大渡ヨリ本道ハ土州宇都宮  
壬生館林笠間ノ勢北緒川ヲ跨ヒテ滝村エハ鍋島ノ軍勢南玉生村ヨリ山手  
ノ間道ハ高崎彦根ノ軍勢土地ノ獵銃ヲ集メテ案内者トシ諸藩何レモ勉強  
ノ由ト詳細報シケル故其趣キヲ神速藤原ノ中軍エ具申シ又哨兵非番ノ隊

ヲ分配シテ胸壁所ノ兵備ヲ立テ防戦ノ意ヲ告ケテ午前五時ヨリ待設ケシ  
処同七時頃吾カ斥候ノ者馳セ来リ急告スニハ敵大軍五時頃大渡村エ着陣  
直ニ進軍ノ由先鋒ハ間モナク襲フ可クト云フ然ルニ程モナク川岸シ巖石  
ノ陰又ハ藪中ヨリ小銃ヲ一端ニ発炮ス吾兵ハ敵ヲ胸壁エ十分ニ迫ラセ打  
払フ可クト静マリカヘツテ合図ヲ待ツ是ハ胸壁ノ正面式三十間カ間タ平  
地ユエ敵現ワレ出レハ的打ニ致ス策ナリ然ルニ図ラン哉南ノ嶮山林中ヨ  
リ味方ノ胸壁中ヲ見卸シ銃丸ヲ飛ス事烈シ之ハ味方ノ遺失ニシテ嶮巖ヲ  
タノミニ兵ヲ置カサルユヘ敵ハ獵銃ヲ案内者トシテ此山ニ攀登リシト見  
ユ依テ此敵ヲ追ヒ下ス可シト下知シ鎗士四分隊ヲ登ラセ又煙リヲ目的ニ  
銃丸ヲ発スト雖トモ木石ニ当リテ空丸ニ散彈ス又胸壁ノ真向ヘ来リシ敵  
ハ蟻ノ群ルカ如ク地ヲ這フテ平面ニ逼ル味方此敵ヲ打事多シト雖モ尠シ  
モ痿ム色ナク焰面銃向ニ迫ル暫ク争戦ノ内味方手負多シ之レ山上ヨリ打  
タレシ丸ナリ彼是レ突戦スル内午後一時頃緒川向フ滝村ノ上ミヨリ小原  
村藤原村ヲ目的ニ大砲彈ヲ打掛ル事恰モ雷動ノ如ク敵ハ此砲撃ニ氣ヲ増  
シ手負ニ構フス雷光ノ如ク小銃丸ヲ飛シテ急迫ス味方中軍へ援兵ヲ乞フ  
ト雖モ滝村ノ敵川上ニ廻ラハ由々敷大事ナリ大原ハ引上ケ小原ノ胸壁ニ  
テ防ク可キ旨軍目来テ急告ス吾儕ハ此時南方玉生村口ノ閑道心元ナク其  
峠ヘ登リ哨兵ニ注意シテ固ク守ラシムルニ間モナク此方面エモ敵襲来ナ  
レ共嶮岨ニシテ輒ク進ミ難キ躰ユエ味方連發スレハ敵一端退ク又本道ノ  
胸壁ヲ遙カニ覗キ視レハ味方敗走ノ様姿当方エ引上ケノ報告ナキハ如何  
ト語ル内総敗軍ト見エ黒煙リ立テ大原村ノ裏手ヲ走ル敵追打ノ砲聲ト見  
エ烈敷聞ユ当方哨兵ノ一分隊引上ケルニ途ヲ失ヒ俄カニ計策ヲ回ラシ道  
ナキ峯通リヲ小原大原ノ間タヘ出テ山ノ中央樹木ノ茂リニ潜伏シ様子ヲ  
視レハ味方ハ小原ノ胸壁ニ敗兵ヲ集メル躰ヒ敵又其処ヲ攻撃ノ形勢之ニ  
依テ吾カ一分隊ハ敵ノ進軍中央ヲ目的シテ横合ヨリ打掛ケ進歩ヲ支ヘケ  
レハ胸壁中ヨリモ防炮ヲ発ス此戦争中午後四時頃一天俄ニ曇リ雷電夥多  
シク震動スル事膽ヲ冷シ既ニ頭上エ落ルカト恠シム又雨降事強クシテ草

本地ヲ這ヒ人心立ツ事ナラス何レモ地ニ臥シ土上ニ坐シテ雫ヲ絞ル軍夫ノ云フニハ此辺ハ日光エ近キ故動モスレハ大雷有リ心痛スル莫レト云フ此天変ニ恐怖シケルニヤ敵ハ大原ヘ放火シテ引退ク又滝村ノ大砲モ同様雷電ノ命令ニテ敵モ味方モ止戦ニ到ル尤モ強雨中ハ恰モ暗夜ノ如シ僅カ二時間ニシテ晴天ニ成ル吾カ分隊モ小原ノ胸壁エ集合シテ軍議ノ上大原村ニ行進シテ敵ノ様子ヲ探ルニ静鑑ユヘ小原ヘ帰ツテ始メテ寒氣ヲ知ル尤モ誰モ人モ乾キタル衣ハナシ偕當所ヘハ三番隊ヲ哨兵ニ置キ吾カ撤兵隊ハ午後七時藤原村ヘ引上ケ隊中ヲ改メケルニ戦死五人手負十九人内撤兵隊ニテ薄手十一人深手小林隆蔵―七月二日若松病院ニテ死ス―斯テ疵兵ハ若松エ送附ノ手当ヲ成シ薄手ノ者ハ高原村エ仮病院ヲ設ケ之エ送ル戦死ハ当所青龍寺エ埋葬ス偕又午後十二時頃大渡村探索方ヨリ報シケル様ハ敵今日ノ争戦ニ勝チ明朝ハ大原滝村両道ヨリ攻メ入是非藤原ヲ破ル可キトノ勢モ尤モ今日ノ戦撃ニ手負多キ故人数ハ余程減少セリト告ス之ニ依テ其防禦ヲ議スルニ大原口ハ防クニ便宜有リ滝村ノ敵ハ大砲ニテ味方ノ中軍ヲ焼キ其狼狽ヲ打破ル策ナル可シ依テ此敵ヘ逆打ヲ掛ル一計ヲ設ケント云者アリ至極奇謀ト是ニ決シ名主松本左一郎ヲ呼テ渡リヲ掛ル事ヲ談スルニ其者曰ク爰ヨリ拾四五町川上ニ字兎劔ト云処アリハ川中ニ方拾間程ノ巖石立テ左右ヲ水流レ又兩岸巖ニシテ屏風ヲ立タル如ク水面ヨリ土面ノ方カ却テ挟キ位ヒナリ昔時兎カ刎越エシ故名付シト云伝フ川中ノ岩石迄五間ニ過ス向フノ渡リモ其位ヒ成ル可又向ノ岸ヨリ山ニ続ヒテ道ナキ嶮岨ノ巖屈是ヲ登リテ山伝ヒ凡菴里モ下ラハ滝村ノ裏ヘ出可シ併シ道ナキ程ノ地位ユヘ実地ハ存セスト雖モ直川向フノ事故凡ノ目途相知レ候ト云フ之ニ依テ夜中ナカラ其地ヲ検査致セシ処松本ノ云ニ相違ナケレハ人夫ヲ雇ヒ材木ヲ二本宛並ヘテ仮橋ヲ掛ケル夫ヨリ軍勢分配ス大原口エハ草風隊ニ第二伝習一中隊南方船生村エノ間道地蔵カ峠ヘハ伝習一小隊滝村ヘハ強兵ヲ撰テ一連隊之ハ夜ノ内ニ進軍シ敵ノ裏山ヘ潜伏シ当方ノ戦争発スルヲ見テ急ニ打立テ可シ―是ハ当方ヘ戦争発スレハ敵

必ス当方ヘ心移ル故ナリ―又喇叭ハ味方ノ打テ出ルニ構ワス進軍喇叭ヲ烈敷吹山ヲ数回往復ス可シ過ツテ敗軍セハ走ルニ道ナシ由々敷大事也又撤兵隊ハ中軍ニ在テ左右ノ援兵ヲ心得可トノ事諸隊長之ヲ了承シテ帰隊シ其意ヲ申述ス第二砲連隊ハ直ニ滝村エ発兵明レハ○廿六日曇天午前五時進軍ノ喇叭通信有リケレハ其方面エ出陣ス撤兵隊ハ中軍ヘ詰テ援兵報告ヲ得ハ直出兵ノ順備ヲ成ス斯テ午前七時頃敵大原迄進軍ノ報知有レハ味方昨日ノ敗耻ヲ雪カント憤発シテ待ケル処同八時頃胸壁ニ近寄ルヤ否敵連発ス味方モ防発ヲ飛ス味方兼テ左リ山樹ノ陰ヘ兵ヲ置ケレハ此兵敵ノ斜メヘ打掛ケル依テ敵胸壁エ迫ルコトナラス間遠ニテ銃戦ス又滝村ノ敵ハ当方ノ砲聲ヲ聞ヨリ案ノ如ク藤原ヲ目的ニ大砲ヲ連発ス時分ハヨシト味方連隊ヲ分隊シ一分隊ハ敵ノ中軍トヲボシキ寺エ向ヒ一分隊ハ大砲打方ノ処ヘ向ヒ何レモ同時ニ烈発ス喇叭ハ兼テ約セシ如ク左翼先頭右翼先頭駈ケ足進軍ノ令ヲ通信ス鍋島勢不意ヲ打レ発砲スル者稀ニシテ只々狼狽周章ノ躰又大砲打方ノ場ハ嶮岨ヲ頼ミニ護衛隊モナクト見ヘ一ト支ヘモナク大砲四門彈藥共棄テ敗走ス又中軍ノ敵ハ漸ヤク手負ヲ担フテ走ルナレハ味方ニ手負ハ老モノナシ依テ氣ニ乗シテ追打ヲ掛ル敵二十町程モ走リテ僅カ二三十人取テ返シ砲戦ニ及フ味方無二無三ニ打立ケレハ終ニ敗走ス此時薄手二人有リ夫ヨリ凡菴里追打シテ滝村ヘ引返シ中軍体ノ寺ニ到リ改メ視ルニ肥州鍋島鷹之助ト云フ何レモ荷札ナリ又會計兵糧局ニハ山海ノ珍味ヲ貯ヒ客殿ニハ兵機一切取捨テ又宿所々々ヲ檢視スルニ刀小銃或ハ陣笠袴ノ類取捨タリ里人ヲ呼ヒ様子ヲ問フニ昨夜九ツ時肥州ノ御人数三百人程着陣火急大混雜致シタリト云フ又討死ノ首ヲ斬ルニ士分体拾壱人雜兵ハ其俛棄置又分捕リノ類大砲ハ運轉ナラサルユエ火門ヲ毀チ其場ヘ捨テ置彈藥六棹小銃三十八挺此彈藥七荷右ハ藤原ノ中軍ヘ運輸ス偕又川端ノ巖間ニ潜居シタル敵ヲ式人捕押ヘ来リシ者有リ形姿ヲ尋問スルニ夫卒ノ躰ヒ昨日五百人ノ軍勢ヲ式百人ハ小原エ向ヒ三百人当村ヘ發軍又今日ノ大敗軍ハ総隊長鍋島鷹之助初発ノ流丸ニ深手ヲ負ヒ其看

護方ニ手配ノ内火急ニ中軍ヲ打破ラレ諸兵之ヲ援フニ隙ナク狼狽中喇叭ハ烈敷吹立ラレ敵ノ員数モ分ラス只周章スルバカリ其内討死手負モ多ク敗軍ノ習ヒニテ防支スル者敢テナク斯ク大敗致セシト云其姓名ヲ問ヘハ耆人ハ木部正太郎耆人ハ軍夫喜兵衛ト云フ右ノ者ヲ引連レテ午後一時頃藤原ヘ凱陣又大原口ノ戦争味方悉ク奮撃シ烈戦ニ及フ処草風隊長村上求馬午前七時頃滝村ヨリ打レシ破烈ノ散弾ニ当リ戦死ス依テ中軍ヘ援兵ヲ乞フ撒兵隊草風ニ換テ進軍第二伝習ト力ヲ合セ摺槍シ大原村迄追立ル然ルニ午前十時頃味方滝村攻戦勝利ト聞一層勢力ヲ得急撃ニ及フ暫時大原村ニテ烈発ノ内敵滝村ノ大敗軍ヲ聞シト見エ俄カニ動揺ノ色口頭ハレ遂ニ惣敗軍トナル味方火急ニ打懼ケ既ニ追フ事耆里時ニ討取ル首四ツ生捕耆人はハ獵兵舟生村百姓重左衛門ト云フ依テ逐放ス又耆人ノ死屍士分躰ニ見受改メルニ腰ニ鑑札有リ宇都宮臣分隊長彦坂新太郎ト書ケリ説ニ曰ク隊長タル者ノ死骸ヲ如何ニ狼狽セシトテ其俣棄テ走リシハ從卒ノ道ニ非ラスト誹謗スル者有リ偕此手モ午後三時凱陣手負四人討死村上求馬○廿七日快晴大原口斥候ヨリ報告敵大渡村ヨリ進軍ノ由依テ撒兵隊先陣第二第三大原村迄進兵ノ所敵攻軍ニハナク巡邏ト見ヘ味方出兵ト聞テ早速引取ル味方モ午後六時帰陣又高原村エ置シ大砲二門当所ヘ運ブ○廿八日快晴吾カ會計方今日ヨリ当藤原村青隆寺ヘ替宿ス駒寄信八郎痼病ニ付川治村温泉ニ浴ス○廿九日曇天午後六時今市宿探索ノ者ヨリ急報有リ敵夜中ニ諸口ヘ兵ヲ発シテ明早朝ヨリ惣攻責ノ由相聞ヘシト云フ依テ其向諸隊ヘ伝触シ夜中ニ銘々持場ヘ兵ヲ増加ス明レハ○七月朔日晴天午前八分ケテモ胸壁場ヲ堅固ニ守衛スト雖トモ敵攻戦ノ様姿モ見ヘス午後二時頃大原口ヘ二小隊計リ見ヘシカ巡回兵ト相見ヘ直ニ引返ス○二日快晴撒兵隊小原村哨兵所詰メ当番午後二時頃大原村迄敵壹小隊計リ来リシカ今日モ巡回兵ト見ヘ直引返ス偕此日会津宰相殿使節来着口上書

其表面両度ノ戦争一統奮戦終ニ官兵ヲ追ヒ退ケ勝利ヲ得候段畢竟各方始メ兵士等懈怠ナク精々尽力故ノ儀ト不斜満悦ニ存候因之年少金子進

候条三軍ヘ配分可賜候面々此後聊カ油断ハ有之間敷候得共万一敵襲来不覺ヲ取候而者は迄ノ勝利モ空敷相成候間此先巡邏番兵等一入嚴重被差配候様存候尤モ甚暑之砌リ兵士等別而大義成ル儀ニ候得共前文ノ次第御申論シ有之度存候

辰六月廿九日

中軍ヨリ添書 此度戦争之節一同及烈戦得勝利候段早速若松表ヘ申立候処宰相殿不斜満足被致使者ヲ以別紙之通り被申含賞金被賜候右之趣キ一統ヘ御申聞ラレ益奮発勉勵候様被致度候事

辰七月二日

藤原中軍事務局

○三日快晴今市宿探索方ヨリノ報シケルハ昨日今市詰ノ肥州ト芸州ト交代ニ相成リ肥州ハ大沢宿ヘ引取シト云又宇都宮勢近在ノ獵銃ヲ百五六十名銃士ニ取立玉生村舟生村宿陣ノ由一此玉生舟生ハ藤原ヨリ西南ニ当リ山ヲ隔テ凡二里何レモ間道也一○四日曇天午後二時頃大原口ヘ敵一小隊見ヘシト哨兵ヨリ報知ニ付直ニ発兵スルニ大原口ノ古キ胸壁ヲ破毀シ巡邏シテ退ソク○五日曇天今日モ又敵午後二時頃大原口滝村口玉生口ヘ一小隊位ヅ、来ル例ノ通り旋回シテ退ク是ハ敵計策有テノ事ナルベシ毎日巡回シテハ歸リ味方ニ懈怠ヲ生得サセ其油断ヲ謀リ不慮ヲ打巧ミナルベシ明日ハ此方ニテ見上ケ山ヘ兵ヲ伏セ敵巡邏ニ来ラハ打テ出テ至酷脅逼致サセベシ憎クキ敵ノ姦計ナリト憤フル者モ有リ○六日曇天見上ケ山ヘ兵ヲ伏セ撒兵隊ヲ小原村番兵所ヘ詰メ敵ニ泡ヲ吹セント終日相待ト雖モ此日ハ巡邏モ来ラス空敷返ル○七日雨降加藤平内総隊長申渡サル又朝比奈虎之助隊長補佐申渡サル茲ニ加藤平内殿家隸五十川小源太儀去六月上旬主用ニテ窃カニ江戸表ヘ罷出昨六日滞ナク帰着江戸ノ景況同人ノ話スヲ聞ニ去月十五日上野山内ニ籠集ノ彰義隊戦争ヲ興シ其軍サ遂ニ敗シテ右往左往ニ遁亡ス日光輪王寺宮モ御落薄相成未タ御遷座モ相分ラス官ニテ深ク御探索ノ由又路中ノ説ヲ聞ニ上野戦争敗シテ後宮ニモ憤然ト御愀愴在ラセラレ有ル田舎ノ隈隅ニ御潜居在シマシ竹中丹後守供奉シ余リ御



イタマシサニ色々慰メ奉リシニ宮ヨリ有リ難キ御意ヲ下サレシケルハ漢ノ高祖ハ七十余敗遂ニ天下ヲ一統スト云フ古語有リ今不慮ノ争ヒ一端ノ敗ヒ患ルニ足ラン耶自今奥羽へ下向シ諸藩ニ依託スル事モ有リ汝等其計策ヲ施ス可シトノ上慮之ニ因テ夜ニ紛レ窃カニ道ヲ求メ竹中丹後守ヲ首トシ有士五六名ニテ守護シ奉リ漸ク上総ノ海辺ニ出テ船ヲ求メル折柄兼テ竹中ノ内応ヲ得テ脱走ノ舟艦都合ヲ計リ其所ニ来岸宮ヲ御補翼奉リシト密カニ風評有リ又上野争戦ノ原因ヲ聞ニ彰義隊暴威ヲ強檀シ官兵ヲ妄殺スル事夥多官憤怒ニ絶ヘス遂ニ大兵ヲ向ケラレ夫レカ為ニ敵味方落命スル者数多也又上野ニテ干戈ヲ動カスハ味方ノ過失却テ禍ヒヲ招クナラント慨然ト話ス者モ有リ又有ル説ニ若輩壯士等不逮ノ誤マリ軍ヲ醸シ主家ノ御所置ニ響クナルヘシト歎息スル者モ有リ兎角ト府下モ平穩ナラス又上野集屯ノ壯兵散乱ノ後チハ奥羽鎮定一途ニナリ当今彼ノ地征伐ノ兵引モ切ラス出発スル由又駿州豆州ハ脱セシ林正之助伊庭八郎モ一旦ハ沼津藩小田原藩ヲ説テ合併シ箱根ノ要害ヲ閉鎖シ街道ノ通運ヲ断チ切り関内ノ敵ヲ惹ス計策ナリシカ相州湯本ノ戦争ニ小田原藩背叛シ遂ニ敗シ箱根ヘ引上ケシ処沼津藩モ背叛シ三島ヨリ攻メ登ル由ヲ聞キ利ナキヲ計リ豆州熱海ヘ落チ乗舟シ奥州ヘ走ラセシト路中ノ説ナリト話ス吾カ儕其直偽ハ知ラス唯聞取りノ俣ヲ載スル偕又白川口ヨリ来着ノ会藩小林氏ノ話シニ去月廿九日当月朔日両日ノ戦争味方勝利ヲ得関門ヲ奪ヒ取り城兵ト对阵ス昨今ノ攻戦ニハ城ヲ攻メ落ス手配ニ成ル可シト云フ又草風隊別伝習火急ニ上州口檜枝岐ヘ出兵依託ニ成ル〇八日雨降異変ナシ〇九日雨降午後曇天沢田圭十郎当分二番小隊助申託有リ夜十一時頃敵ノ廻シ者当村内ニ忍ヒ居リシト見ヘ式ケ所ヘ火ヲ放ツ夜廻リ番兵見附直ニ馳セ付ケ慎火スト雖トモ恠者ハ混動ニ紛レテ逃亡ス〇十日晴ル若松表ヨリ鈴木源之進附添全快ノ銃士九名出勤偕又昨九日六方越不二見峠ニテ戦争有リ味方勝利大砲壱門分捕リシ由ハ敵問道ヲ経テ夜中ニ進軍ノ手配有ルヲ内応ノ者有テ此方ヨリ先ヘ攻撃致シ計慮ヲ以テ遂ニ利ヲ得シト云フ〇十一

日晴ル今市探索方ヨリ報シケルハ敵高德村ヘ兵ヲ集メ午後ヨリ出兵夜打ヲ掛ル由ノ説有リト告ス―高德村迄当所ヨリ四里半途ニ緒川有―直ニ諸隊ヘ触テ持場ヘ兵ヲ備ヘシ所午後四時頃大原村滝村ノ両道ヘ壱中隊位宛来リ旋回シテ返ル〇十二日晴ル吾カ宿陣所青隆寺住職毎夜出行夜半ニ返ル時モ有リ又夜明ケニ復ル事モ有ル様子ユヘ召捕テ尋問致ス処口口ヲ閉テ白状セサリシユヘ嚴敷迅杖ヲ以テ責メケレハ漸ク白状ニ及ヒケルハ利欲ニ迷ヒ高德村間屋半之助ノ頼ミヲ受ケ金貳拾五両ヲ貰ヒ藤原村ヲ焼払ヒナバ其時ハ賞トシテ金百両下サル約定依テ九日ノ夜放火致セシ所夜廻リニ見付ラレ危ク遁レシ処火ハ消シ留メラレ謀計空敷相成リケリ之ト云モ僧ノ道ニ非ラサル事ナレバ仏慮ニ叶ワス遂ニ発覚セシナラント其罪ニ伏ス依テ名主方ヘ預ケ固ク守ラセ偕又高德村間屋半之助ハ五月以来藤原高原大原辺ニ入込懇意モ多ク殊ニ問屋ナレハ馴染深モ数多ユヘ何ノ心配モナク打過キシニ青隆寺住僧ノ白状ニ依テ搜索ヲ遂ケ高原村ニテ捕縛シ取糺スニ住僧ノ申口ニ符合致シケルユヘ仮牢ニ入番兵檻守ス此事発覚セサレハ彼等欺掌計ニ罹リ一村焼滅ノミ歟大禍ヲ引出ス可シ諺ニ蟻穴ヨリ大ノ堤モ毀漏スト云リ目前ノ危難ヲ避ケシモ天幸ナリ計リ難キ人心怖ル可キ人心憎ム可キ利耻ツ可キハ欲ナリ彼等二人モ利欲ニ心ヲ移転シ終リハ如何ナラン又夜十時頃今市宿探索方ヨリ明十三日ハ諸口ヨリ攻入ノ由急報有リ直ニ其向ヲ心得触有リ明レハ〇十三日快晴午前六時大桑村―当所ヨリ西ニ当テ凡三里―獵師吉左エ門外式人馳来リ報シケルハ昨夜今市大沢辺ヲ探索ノ途中森友村ノ上ヘ―是ハ今市ヨリ大沢ノ間ノ宿大沢エー里今市ヘ一里―来リ並木ニテ一休致セシ所夜半過キ今市ヨリ宇都宮ノ方ヘ早打駕三挺通行ヲ見認月ニ透カシテ駕ヲ目的ニ発炮致シケレハ駕夫ハ逃亡ス又込替テ打掛ル処敵打レナカラ何者ナルゾ妨害致ス奴ハト云吾等ハ会津藩ナリ汝等ヲ此所ニテ待ツ事久シト匍リケレハ彼等三人逃 outcomes 又続ケテ打懼ケルニ式人転ズ直ニ駈ケ付ケルニ壱人ハ起テ逃ル追打スレ共踪跡分ラズ打留メシ壱人ノ頸ヲ斬リ元ノ場所ヘ立戻リ改メ見レハ鎗壱本

刀二本脇差壹本ヒストル壹挺有リ是ヲ分捕一ト息ニ駈ケ来リシト告ス其品ヲ改メ其首ヲ改メルニ山刀ニテ一生懸命ト切りシヤ乍左ラ鋸リニテ挽キシニ異ナリ刀ハ尤モ名作ナリ其者共ハ賞金ヲ賜シ夜ニ入り大桑村エ帰ル偕又夕方ニ到リ風評有ルハ昨夜大沢宿街道ノ騒動ニ遁レ去リシ者今市ノ中軍ニ訴ヘケレハ会津勢此近傍ニ潜伏スルハ必定早々探リ出シテ首切ル可シ夜中ナカラモ猶予ナラズト手配シ嚴重ニ探索ヲ致ス夫カ為メニ藤原ヘ攻入ハ延タリト云フ説有リ○十四日曇天戦死ノ追善青隆寺ニ於テ営ム総督始メ諸士参詣夜ニ入テ大雨○十五日大雨緒川洪水滝村ヘ渡ル飯橋流落ス又昨夜ノ強雨ニ紛レ高德村半之助牢ヲ破毀シテ逃走シ踪跡分ラス○十六日雨降滝村ノ哨兵橋落テ交代ナリ難ク依テ兎刎ヘ急ニ飯橋ス○十七日晴天別異ナシ○十八日雨降撤兵隊小原哨兵当番此日高樋數馬斎藤与一郎疵所平癒ニ付若松ヨリ帰着同人ノ話シニ日光輪王寺宮ニハ上野争戦破レテヨリ落サセラレ途中御困苦遊ハサレ御軍艦ノ補翼ヲ請フテ奥州平潟ヘ御上陸夫ヨリ奥羽ノ諸藩迎ヘ奉リ一旦若松ヘ御輿入直ニ白石城ヘ御遷移遊ハサレ近日各藩ヲ召テ御協議之レ有ルトノ事又有ル説ニ敵モ白川口固キニ德果テ先頃ヨリ三春棚倉街道ヘ攻メ入り遂ニ岩城平ヘ攻迫シ城下ヲ放火ス城主安藤對馬守敗軍開城シ一里程隔テ要害ニ兵ヲ篋メ數回攻戦有リシカ勝敗分ラス此応援トシテ仙台米沢ノ軍勢発向ノ由ト語ル偕又夜ニ入テ洪水○十九日雨降午後晴ル夜八時頃見上ケ峠ノ哨兵所ヨリ報シケルハ大沢宿辺ニ当リ大火有リト依テ峠ヘ登リ遠見スルニ式ケ所程火焰紛々ト翻カヘルト雖モ五六里モ距離有レハ判然ナラス此夜十二時頃今市探索方ヨリ報告有リ敵強兵ヲ五百人程撰拳シ三分ノ兵糧ヲ配抵シ舟生玉生高德ノ諸間道ヨリ密カニ攻入トノ由之ニ依テ夫々探索ヲ出シ用意致スニ敵ノ謀計流言ト見ヘ別異ナシ○廿日晴ル当地ノ名産ヲ見ルニ山海苔 松茸 榛 又雜穀ハ到テ不自由ナリ○廿一日晴天異事ナシ午後二時若松ヨリ使節来着会津宰相殿ヨリ仰渡サレ候書付ノ写

麾下之士総括取締リ今般竹中丹後守入道春山ヘ申付候処猶又 宮様ヨ

リ別紙ノ通り仰付ラレ候ニ付テハ何レモ憤発勉勵致ス可クハ勿論ニ候得共戦争永々ニ相成自然情氣ヲ生シ素心ニ悖リ候様ノ儀出来候テハ相済マサル儀ニ付近々規律法則モ相建申ス可ク候間此段厚ク相心得昼夜戮力同心丹誠ヲ抽ゼラレ可事

辰七月十七日

竹中丹後守入道春山

右之者有志之輩統領軍事總裁被 仰付候

辰七月十五日

会津老臣ヨリノ添書

於白石表

宮様ヨリ別紙ノ通り 御沙汰被為在候旨猶又主人ヨリ別紙之通り申達候様被申聞候此段麾下之士一統ヘ御布告之儀宜御取計被成候様致シ度如此御座候以上

辰七月十八日

梶原平馬

大鳥圭助殿

猶以古谷作左衛門土方歳三ハ別紙申進候間左様御承知可被下候以上 曰ク古谷作左エ門土方歳三八麾下脱兵ヲ引卒シ越後地ニ発兵シ奮勵ノ由

一仙台藩ヨリ出シ書状壹通ヲ得テ挙ル

此度賊徒征伐ニ付仙台家ヘ御味方仕度輩ハ幾人タリ共相募候様可有之候尤モ戦功有之ニ於テ御恩賞被成下候条其心得ニテ協力尽力有之候様可致候以上

辰七月

仙台

㊦ 軍事方

上西国助殿

右ノ来報ヲ得宮様御在国ニ相成ル上ハ各藩ノ奮勵方モ一ト際立可シ早晚カ全利ヲ得武蔵野ヲ再見致シ度モノナリト互ニ語り合フテ思ワス深夜ニ

及フ明レハ○廿二日快晴総轄大鳥圭介殿第二伝習半大隊ヲ引卒シ急ニ若松へ出発午後五時右交代トシテ朱雀隊ノ内五小隊当着ス隊長田中源之進鈴木英馬○廿三日晴天第二伝習残り半大隊出立○廿四日快晴友部清二郎関口京四郎川治温泉ヨリ帰ル○廿五日快晴午後三時ヨリ急ニ大雨塩谷敏郎沢田圭十郎病氣ニ付川治温泉ニ浴ス○廿六日曇天異事ナシ○廿七日曇天若松表ヨリ来リシ人ノ話シ軍事総督竹中丹後守并ニ友成郷右衛門八月九日若松ヲ出立白石へ参向 宮様へ御目見へ数刻御尊慮ヲ議セラレケレハ丹後守上申致シケル様ハ固ク守ルハ兵ノ満備ニ有リ今哉会津ヲ始メ兵機不順備也依テ 宮ノ御衛兵ニハ日光御神領ヨリ兵賦ヲ御取立遊ハサラハ彼等従来ノ鴻恩ニ報ヒテ必ス勉勵強兵ナラン急キ宮様ヨリ御布告ニ相成ラハ誰モ違背ナク其徳ニ靡キ来ラン其計ヒ方ハ旧日光奉行吟味役山口忠兵衛へ託シ候ヘハ整フヘシ其故ハ右忠兵衛儀真忠ノ者ニシテ日光奉行引払ノ節彼壺人ハ御山内ノ様子ヲ見認シ為ニ其地ニ残り京軍へハ鉢戴ヲ能ク云紛ラシニ心ナキ者ナリ彼ヲ内密召サレテ其意ヲ御布達相成ラハ有難ク良承ス可シニツニハ 宮ニ於テ愈日光へ御遷座ノ節ハ地理案内ノ兵賦ナレハ進退都合モ宜シカル可クト申上ケレハ 宮様ニモ然ル可キトノ御事ニテ丹後守へ取扱ヒ方御託シニ相成ル依テ丹後守ヨリ密書口上共含メラレ日光へ来リシニ六方越ニ於テ不図山口氏ニ出逢ヒ様子ヲ尋ル所若松へ内談有テ也ト報ス之ニ依テ竹中君ノ書簡并ニ口上ノ意ヲ話セシ処同人モ悦喜ノ鉢ニテ夫ヨリ同道五十里村迄来リ山口氏ハ若松へ急ク拙者ハ当地ノ鈴木英馬ニ私用有テ回リシ也又其時奥羽ノ各藩ニ 宮様ヨリ御召ノ儀仰出サレ七月十三日迄ニ白石城へ出頭可致様御内諭ヲ蒙リ仙台藩ヨリ各藩へ急達ス然ル上遠近共遲滞ナク参公ノ処佐竹津輕ノ両藩ハ不着ノ由又九条殿ニハ南部ニ御在留由聞ヘケレハ之モ宮様ヨリ御熟議之有ル旨御書付依テ十三日仙台迄御着ノ由右迄承知シ十六日ニ白石ヲ立チ当方へ来リシト云テ話ス其真偽ハ吾等存セス○廿八日晴天異事ナシ○廿九日晴天別事ナシ（欄外・朱書）「是ヨリ八月分」○八月朔日雨降異変ナ

シ○二日雨降異変ナシ○三日雨降大砲方山田道之助始メ外九名若松表へ出立○四日雨降別事ナシ○五日雨降別事ナシ○六日大雨洪水午後晴ル敵舟生村玉生村ニ屯集シ不日ニ打入ルトノ報告故此方ヨリ先ヘ打ヘシト午後六時ヨリ至急出兵撤兵隊朱雀隊凡二百人右両村へ分隊十二時頃ヨリ攻戦ニ及ヒ火急ニ打立ケレハ敵ハ夜中ト云油断ノ折リカラナレハ麻ノ如クニ散乱シ右方左方ニ敗走ス其中チニ当番ノ兵少シク防炮ヲ發セシカモ直ニ遁走味方勝利ヲ得明方凱陣薄手三人○七日快晴異事ナシ○八日快晴敵大原村へ見エシカ巡回シテ返ヘル○九日曇天石野主計川寄準三郎川治村高原村ニ在留ノ病兵宿料払方トシテ来ル○十日晴天昨九日ヨリ不二見峠ニ於テ炮戦有リシカ溪谷ヲ隔テシ事ユヘ恠我ナシトノ報知有リ又山崎幸八疾病ニ付川治村温泉ニ来浴ス○十一日雨降今朝至急ニ若松表エ出立ノ達有リ撤兵隊ハ午前八時立三番隊ハ午後二時出立ノ触達沢田圭十郎塩谷敏郎ハ川治村ニテ本隊待受ケ爰ヨリ出立此日ハ五十里村泊リ宿ハ名主赤羽喜右エ門○十二日曇天当所出立横川村中飯午後二時当村出立糸沢村迄強雨降募ル当所泊リ宿ハ名主阿久津甚右エ門○十三日快晴当所出立田島町中飯宿ハ出口ノ奈良屋長右エ門当家ハ聞ヘシ豪家ナリ当所出立永野村爰ニテ雨降出ス小池村奈良原村倉谷村泊リ宿ハ問屋久右エ門糸沢村ヨリ爰迄五里十町ト云○十四日曇天当所出立桜山村中倉村沼山村爰ニ地藏峠有リ大内村中食宿問屋新八郎当所出立夫ヨリ火ノ玉峠此山ノ峠ニテ急ニ冷氣ヲ増シ午後二時頃ヨリ雪降出シ二時間計リニシテ止ム如何ニ寒国ニモセヨ八月ノ中旬ニ雪ニ逢フトハ夢ニモ思ハザリシト惘然ト語りナカラ麓ノ栃沢村ヘ下レハ積ル程ハフラズ傍ラノ茶亭二間ヘハ八月積ルハ稀ナル由九月ニナレハ例年降シト言フ夫ヨリ関山村福沢村大八合村本郷村泊リ宿ハ名主川田庄三郎倉谷村ヨリ当所迄六里○十五日晴ル当村出立若松表へ着河原町伊勢屋藤兵衛方へ宿泊本郷ヨリ二里又此日モ午後三時頃急ニ雪降一時間ニテ止ム○十六日雨降城下在留此日登城宰相殿ニ見伺ル<sup>マミユル</sup>ノ処強雨ニ付延引儲此地ノ風土ヲ察ルニ北ニ当テ飯豊山ト云高山有リ昨



日ノ雪積リテ白妙ヲ成セリ依テ寒サモ初冬ニ均シ又西北ニ越後街道有リ行程二里高久村夫ヨリ四里津川村爰ヨリ川ヲ越シテ五里山之内宿奥越ノ境ナリ又米沢へ拾里白川へ拾八里日光へ式拾七里仙台へ式拾里余福島へ拾三里也偕又此年ノ田方ハ十分ニ熟シ上作ノ由○十七日雨降午前八時登城大広間ニ於テ宰相殿ヨリ御酒ヲ賜ワリ長陣ノ辛勞ヲ叙謝有リ畢ツテ諸口ノ形勢御軍議有リ又岩城平三春福島二本松杯何レモ敵ニ逼ラレ即今究迫ノ由追々ノ急報又越後地モ昨今ノ形勢ニテハ全勝覺束ナシ味方寡兵ニシテ左右前後ノ応援スル能ワス乍去上杉酒井ノ援兵ハ不日雷発有ル可シ夫迄二本松福島ヲ援ヒ諸口ヲ固ク防禦ノ英備ヲ設ケタシ麾下ノ士モ是迄勉強怠慢ナク数回ノ辛戦感スルニ余リアリ乍併此上ハ猶一層憤勵尽力有之度此場合ニ到テ情氣ヲ生セハ之迄ノ戦功モ空ニ消エン其意ヲ兵卒ニ到ル迄洩レナク貫キ大義ヲ過失セサル様注意之レ有度又方面出發或ハ軍配進退ハ軍事方ト協議ヲ尽ス可シト御懇篤ノ御談示終テ午後三時退出ス○十八日曇天午前三時軍事方ヨリ大急告有リ越後口湯山攻逼セラレシ由直援兵致シ度趣キ掛合有リ依テ夜中ナカラモ諸隊へ達シ至急発兵ノ際午前五時方面操換ノ趣キ急告有リ此日ハ滞在休兵偕當所ニ在留ノ諸侯ヲ見ルニ越後長岡城主牧野豊前守家族来不殘城下市中ニ六月上旬ヨリ転住伊勢桑名ノ城主久松松平越中守 豊前唐津ノ城主小笠原壹岐守 伊予松山城主板倉伊賀守何レモ良臣僅カ引卒シ当城下ニ在住ス又此日午後十時軍事總裁竹中丹州ヨリ触達有之ハ明十九日白川口須賀川宿へ援兵致ス可キ旨―城下ヨリ十五里余―但シ加藤平内儀ハ伝習仕込方トシテ当地ニ在留致ス可シ尤モ伝習熟練ノ者十五人ヲ残シ自今天野電四郎朝比奈虎之助指揮致スヘシトノ達シ有リ―天野電四郎ハ五月六日日光口今市宿ノ争戦ニ踵ヲ打貫カレ漸ク昨今快方ニ到ルト雖モ遠足ハナラス―依テ諸隊へ其趣ヲ報達ス明レハ○十九日曇天今朝須賀川口へ出發ノ処三番隊銃士突然ト苦情ヲ唱へ兎角出陣因循スルユヘ撤兵隊ニ於テモ斟酌シ遂ニ此日モ暮レニ及ブ三番隊附ノ役人色々説得ヲ尽スト雖モ早晚果ツ可キモ分ラサレ

ハ其向軍事方へ届ケシ処火急ノ場故撤兵隊ハ直ニ発兵致ス様三番大隊ハ明朝迄ニ必ス出兵致サス可キトノ儀依テ此夜十時頃発兵ス然ル所力行軍ノ途中大町ニ於テ隊伍ニ妄ニ突当ル者有リ押退ケテ通ラントスレハ又突当リ再三回ニ及ビ彼是惡口ヲ訃リ剩へ抜刀シテ暴破ルユヘ銃士ハ憤リ奇恠ノ者哉見レ醉態ノ士諸臣ノ辛勞モ不顧スル妨害ハ何ンゾヤ狗同前ノ奴ナリ打殺ス可シト動揺スルヲ暗夜ト云ヒ市中ニ於テ発炮シ他人ニ疵付ケテハ相成ラスト漸ク鎮メ暴人ヲ指シ押へ姓名ヲ糺スニ全ク狂醉ノ様姿藩士和田忠三郎ト云フ其趣キヲ以テ軍事方へ差送ル―評ニ曰此和田忠三郎徒士席ニテ忠勤ノ士也シカ白川口へ出陣シ味方ノ敗セシヲ憤リ議論ヲ立遂ニ某ヲ害シ発狂ス依禁錮中ナルヲ忍ヒ出テ斯ル妨害ヲナセシ由―斯ル妨ケ有テ時間ヲ費シ夜二時頃若松ヲ出立東北ニ当テ行程壹里滝沢峠ト云フテ要害ノ地越テ麓ヲ赤井宿夫ヨリ原宿へ漸ク曉方着陣城下四里当宿小休ミ長谷川恒右衛門○二十日曇天第三大隊云々ノ儀ニ付否哉承リトシテ上村帶刀早打ニテ城下へ出立偕又吾撤兵隊ニモ不着之レ有ル趣キ隊附役人ヨリ申出ニ付取調ヘケルニ銃士西村勝次郎鈴木民之助吉岡竜太郎石川木曾治ヲ首トシ三十屯人不着之ハ三番隊ニ連遷セシト見ユ依テ不着ノ者ノ探索トシテ中川吉之助浅野丑松ノ兩人早馬ニテ出立斯ル急迫ニ望テ不都合ナカラ余義ナク当宿ニ滞陣銃士へ金五両宛手当トシテ渡ス又出陣ノ祝賀トシテ金五十疋宛賜リ午後十時上村帶刀帰ル三番隊モ追々着ス同十一時中川浅野ノ両士帰着撤兵不着ノ者其何レハ潜居致セシヤ更ニ相分ラス三番隊ニモ五十人程モ踪跡分ラサル由隊中ノ説ニハ昨夜彼等ノ密談ヲ聞ニ仙台へ趣ク歟又ハ酒井へ依附スル歟何レ歟宜ナラント話セシト云併シ不仁ノ者共也ト兩人歎息シテ語ル此上ハ尋テ詮ナシ今撤兵ノ強士百人ノ余有リ三番隊モ減少シテモ百人余リ有ル可シ此兵ヲ動カシテ压倒セハ何ノ怖レ歟有ラント互ニ勇氣ヲ励マシ此夜ハ原宿ニ泊ス○廿一日曇天總裁竹中丹後守殿ヨリ兵士ハ撤兵勤方申渡サル午前七時出發赤津宿福良宿ヲ過テ三代宿へ宿陣ス山形屋悦藏方原宿ヨリ三里半午後二時ヨリ雨降

偕当駅ニ滞スル謂故ハ白川口二本松口両道ヨリ援兵ヲ乞フ事火急ユヘ其  
 使者ナル者ト議スルニ両道ノ内何レカ破レテモ肝要ノ地也併シ二本松街  
 道ニハ猪苗代十六橋ニケ所ノ要害殊ニ勝軍山ハ敵ヲ防ク便宜在リ白川口  
 ハ勢至堂破レナハ防クニ便リナシ至急勢至堂峠ヘ応援有度ト云依テ其向  
 事定シ此夜ハ当宿ヘ仮寝ス偕モ当地況景ヲ見ルニ東西ニ山ヲ負ヒ南北通  
 路也市中家作り美ニシテ繁昌ノ様姿若松西北ニ当リ勝軍山ハ東ニ当リ白  
 川ハ南ニ当リ此間タ東倚リニ中山峠ト云福島ヘ出ル街道有リ偕又午後六  
 時松山善蔵城下ヨリ早打ニテ来リ密カニ告テ曰ク越後地モ本月十二日ヨ  
 リ敵ノ軍艦諸港ヘ輻湊シ数回ノ争戦ニ敗シ応援ノ兵モナク次第ニ寡兵ニ  
 成リ行キ遂ニ大敗内藤古屋ヲ首メ諸長討死多ク又上杉酒井ノ人数モ同様  
 討死多ク依テ本国ヘ援兵ヲ乞フト雖モ未タ出兵之ナク昨今ハ国境ヘ引上  
 ケ漸ク防戦スルノミ迎モ防禦届クマシトノ評有リ又東方ニテハ中村藩福  
 島藩三春藩ヲ始メ諸城攻落サレ何レモ降伏ノ由モ聞ヘケリ此時ニ当テ苴  
 憑トスルハ仙台上杉酒井ノ三藩ナリ之ヘ援兵ヲ倚頼ノ使者ヲ走ラセシ故  
 不日ニ出兵モ有ル可ク夫迄ノ防キ方心元ナシト城下ノ諸侯モ愀愴有テ密  
 カニ軍議之アル由又今何レノ口歟破ル、トモ会津ニ兵ナシ兼テ存シノ通  
 リ越後口ヲ始メ七十里越上州口檜枝岐日光口六方越同藤原村関谷口塩原  
 村太田原口三斗小家村白川口勢至堂峠或ハ須賀川宿行方宿福島口中山峠  
 中山村二本松口勝軍山ボナイ峠熱海村杯拾五ヶ所ヘ配兵致セシナレハ寡  
 兵ハ到極ナリ諸口ノ内ニモ白川二本松越後ノ三道ハ大切ノ要地今此ノ道  
 ヲ凌カズンバ本城モ保チ難シ切迫スル事至レリ尽セリ憤激此ノ期ニ有ル  
 可シ必ス怠慢シテ徳川脱臣ノ汚名ヲ流スマシト商議数刻ニ及ヒケレハ銃  
 士モ憤励ノ色口面ニ顯ハレ兼テ望ム所猶此上ハ摺槍スル外ナシト何レモ  
 快然タル威風ニ指揮役共ニ悦ヒケリ明レハ○廿二日雨降早天ニ当駅出発  
 凡弔里程白川口ヘ進軍ノ所勢至堂ヨリ急使来リ昨日午後ノ戦争ニ味方勝  
 利ヲ得得テ遠ク追ヒ退ケタリ差当リ此方ハ援兵ニ及ハス昨廿一日ヨリ勝  
 軍山母内峠カ急迫致セシ由シ依テ彼方ヘ応援賜レカシト隊長海老名郡治

申越サレシト報ス夫ヨリ又三代駅ヘ引返シ昼兵糧ヲ遣ヒケル内十二時頃  
 早馬来リ火急ニ報シケルハ二本松街道母内峠ケ今朝ヨリ苦戦直援兵有リ  
 タシト云フ里程ヲ問ヘハ凡六里ト云フ報告ノ旨了承致シ隊長ヲ聞ケハ大  
 鳥圭介殿ト答ヘテ其使者ハ城下ヘ急ク吾兵ハ直ニ出発ノ用意ヲ致シ雨中  
 モ厭ワス發途ノ処又中山峠ヨリ火急ノ援兵ヲ乞フ其方位ヲ問ヘハ是ヨリ  
 東北ニ当テ三里余母内峠ヘノ

紙数五十五枚

(表紙・題簽)

戊辰ノ變

夢之棧奥羽日記 三

塩谷敏郎誌

塩谷敏郎誌(四)

順道ト云フ此所ニテ因循スルニ非ラスト三代駅ヲ発シ中治村館村横沢村ヲ過ル時北ニ当テ遙カ遠方ニ出火有リ雨中ニ焰ヲ紛々ト翻リ大火ノ有リ様マ軍夫ニ方位ヲ問ヘハ猪苗代ノ当テナリト答フ思フニ雨中ト云ヒ日中ニ出火トハ恠敷事ナリト囁キ合フテ行ク所ニ又壺ケ所燃上ル然ル処ニ夫卒共多人数<sup>アヘタ</sup>邊シク馳セ来ル故其事情ヲ問ヘハ老人歎息シテ話シケル様私シ共ハ会津方ノ人夫ニ出タルカ今朝勝軍山母内峠カ破レ敵モ味方モ死人多ク夫ヨリ新田ヘ引上爰ニテ戦ヒシカ又敗軍シ両度程取テ返シテハ戦ヒシカ終ニ大敗軍敵モ追フ事急ナル故味方猪苗代ノ城ニモ―是ハ会津ノ砦同様ノ小城ニテ平常ハ番城トノ事―入ル事ナラス直ニ十六橋迄引上ケルトノ説夫故ニ敵猪苗代ノ城ヘ火ヲ掛ケタリ依テ猪苗代ノ混動大變ナリ拙者共ハ夫人ナレ共漸ク通レ来リタリ此浜治辺ヘモ敵来ルモ知レス其訳ハ中山峠ケハ未タ開ケサル故ヘ裏打ヲ掛ルトノ説モ有リシト様カニ話ス―評ニ曰ク此十六橋ト唱ヘシハ猪苗代ノ湖水トテ堅四里横ニ里ノ湖水有リ此水ノ流レ口ニテ伝説ニ上古弘法太師ノ工風ヲ以テ掛シ橋ニテ要害ニモ成リ弁理モ宜ク尤モ石ナレトモ其時掛シ俣掛替ナシ奇代ノ名橋ナリ又中昔伊達家ト上杉家ト合戦ノ時伊達政宗爰迄攻込ケレハ上杉家ニ於テハ十六橋マテ攻メ入ラレテハ防ク共詮ナシト和睦ヲシキリニ乞ヒシト云上杉ハ其時会津ノ城主也ト―又母内峠ノ様姿ヲ問フニ其者曰ク其地ニテ敵ノ打ル、事夥多其死屍ニ構ワス其上ヲ乗越々々進ム事蟻ノ群ルニ似タリ味方ハ胸壁中ヨリ之ヲ打事ナレハ敗ス可キ謂レナキニ敵右手ノ山上ニ攀登リ胸壁中ヘ打卸ス―是ハ輒ヤスク登ラレ可キ所ニ非ラサルユヘ味方寡兵

ナレハ嶮岨ヲ頼ミニ兵ヲ置カサリシ歟過リナリ―僅カ十発計リ来ル丸ニ胸壁中動揺シテ防炮少ナクナリシ所ヘ一勢ニ駆立ラレ無念ノ敗走ナリシト語ル始終ヲ聞テ歎息究ルト雖モ急キ浜治村ヘ着シ会藩ト商議ノ上事ヲ計ル可シト是ヨリ老里馳足ニテ午後五時浜治村ヘ着ノ処雨降ル事夥敷ク彼是スル内中山峠ノ兵モ引上ケ来リ語リケルハ母内峠ノ敗レヲ聞キ無益ニ兵ヲ勞スル莫レト直引上ケタリ依テ此方ヘ敵迫ルモ計リ難シ番兵ヲ配分シテ其上商議スヘシト云フ故吾兵ハ浜辺ノ本道ヲ守リ会藩ハ問道ヲ守ル夫ヨリ会ノ隊長宗川熊五郎ヲ始メ諸長ト協議スルニ宗川曰ク敵十六橋迄ハ進ムト雖モ夫ヨリ攻入事ハ難カルヘシ依テ当方ヘ廻リ浜辺通りヨリ福良或ハ戸ノ口ヘ廻ワラントスルモ計リ難シ然ル時ハ当所モ緩カセニナラス先ツ此所ニ宿陣シ十六橋戸之口或ハ白川口ノ模様ヲ聞合セ事ヲ成ス可シト云又或人曰フ今事ノ火急ニ到リシニ他ノ形勢ヲ探ル迄ナシ之ヨリ直ニ猪苗代ヘ討テ出テ敵ヲ十六橋ニ追ヒ詰メ挾打ニ致サハ皆殺シニスヘシト云フ何レモ其論ニ同意ナリト云宗川曰ク其論不可也其故ハ今猪苗代ヘ打テ出ナハ味方コソ抱マレテ打ルヘシ敵ハ大軍ユヘ其手配ハ必ス十分ニ備テ有ルヘシ謂ユル夏ノ虫ノ論ニ均シ又味方多勢ナラハ母内峠ヨリ攻撃ノ兵ヲ押ヘ左右ヘ分レテ突戦モ出来ベシカ寡兵ナレハ其策モ施シ難クサスレハ奨ンテ詮ナシト論シケレハ何レモ憤然トシテ伏サ、ル処ヘ夜ノ三時頃滝沢ヨリ早馬ニテ使者来リ報シケルハ十六橋ヘ迫ラレ甚タ苦戦又戸之口村ヘ明朝ハ船ニテ襲フ由湖水ノ漁船ヲ数艘集メシト云フ依テ火急ニ戸之口ヘ援兵致ス可シト告ス良承シテ里程ヲ問ヘハ五里余ト云夫ヨリ直ニ番兵ヲ引上ケ戸之口村ヘ獎軍ノ趣キヲ触テ隊伍モ整ヘス早足ニテ発ス曉方ニ追々福良宿ヘ着陣吾儕ハ先ヘ駆抜ケ兵糧ヲ爨ク扱モ昨夜ヨリ雨ハ夥シク降ノミカ昨日ノ夕兵糧モ無ク雨中ノ歩行愀然タル有様ナリ爰ニテ戸之口ノ形勢ヲ問ヘハ三里余隔テシコトナレハ事情判然ナラス明レハ○廿三日雨降天野電四郎ヨリ諸士ニ論シケル様ハ昨今愈急逼ニ及ヒタリ見苦敷働ヲナシ徳川脱臣ノ汚名ヲ栖ス事ナカレ進退爰ニ究リタリ直協心



戮力奮励シテ一端ハ敵ヲ境外ヘ追出シ徳川脱士ノ譽レヲ揚ケン茲ニ精兵二百人有リ此兵ヲ以テ摺槍セハ打破ル事安カルヘシ瞬間モ緩カセスヘカラス誓テ怠慢在ル可カラスト依然トシテ申告ス諸士憤励タル色ヲ顯シ兼テ当土ニ屍ヲ残サン心得氣遣ヒ賜フ事ナカレ勝敗ハ兵ニ有リ迅速戸之口ヘ援兵シ生死ヲ究メント云フ偕モ隊中諸雜品ハ当宿ニ預ケ必要ノ彈丸ヲ雇ヒ人夫ニ背負セ雨中ニ出発戸之口ヲ指テ急キケル斯テ午前九時頃原宿へ着ノ処市中混動シテ雜物ヲ荷ヒ奔走スルモ有リ或ハ家内ヲ取片付又ハ婦女子ノ叫フ聲愀然タル有様故宿役人ニ事情ヲ問ヘハ今朝戸之口モ敗シ十六橋モ破レ滝沢峠ヘ引上ケ暫時戦ヒ又滝沢モ敗シ会津方皆死ナリトノ説今ニ官軍此辺ヲ固メ白川引上ケノ味方ヲ討トノ風評夫カ為ニ民屋煽動致スナリト慨然トシテ語リケル吾兵兼テノ覺語ナレ共戸之口十六橋ノ要害一旦ニ敗北シ又肝要ノ滝沢モ敗レ敵ニ閉塞致セレテハ城下ヘ通路難カル可シ腰兵糧ヲ用意シテ滝沢ヘ攻撃シ有無ヲ決セント其用意ヲ託スト雖モ此姿ニテハ速モ急速ノ間ニ合ヒ申聞敷殊ニ御人数屯集有テハ今ニモ合戦発ルヘシト土民ノ周章大方ナラスト語ル故是モ憫然ノ儀ト強テ依託モナラス然ラハ彈丸運送ノ人夫ヲ雇ヒタシト談スルニ戦地ニ行事ト心得兎角拒ミケルヲ多分ノ賃ヲ払ヒ必ス戦地迄ハ連レ間敷ト約シ宿夫ニ彈丸ヲ脊負ハセ出発シ凡菴里モ進軍ノ所向フヨリ急キ来ル者三人有リ引留メテ何レヨリ来リシソト問ヘハ吾々ハ赤井宿ノ役人ナリ昨日戸之口村ヘ兵糧并ニ人夫賄方ニ参リシ所味方ハ僅カ五六十人敵ハ大軍昨夜ノ内ニ小舟数艘ヘ乗組夜明ヲ待テ打掛ラレ暫時争フ内敵ハ左右岸ヨリ上陸致シ烈敷合戦ニ相成シカ何ヲ言フニモ味方ハ少勢援ヒノ兵モナク敵ノ大軍舟ヲ浮ヘテ追々ノ進軍トテモ防戦ノ功有ルマシトハ存シナカラ此所ヲ捨テ生テ城下ヘ復ラレシ皆討死トノ御覺悟烈戦スル討死モ次第ニ多キ所ヘ午前七時頃十六橋モ防戦成シ難ク今滝沢ヘ引上ケルナリ其手モ迅速引揚ケ可シト急使来リケレハ直ニ引上ケトナル夫ヨリ敵ハ戸之口村ヘ入り休息シ後陣ノ兵ハ滝沢峠ヘ進軍ス吾等ハ戦死ノ死屍ヲ埋メ呉レヨト御頼ミ有ル故

古井ヲ求メ之ヘ死骸ヲ運搬シ彼是時間ヲ過シ終ニ遁ル途ヲ失ヒ潜居致セシカ敵ハ不殘滝沢ヘ進軍故漸ク道ヲ求メ逃ケ来リシト周章シテ語ル又間フ滝沢峠ヨリ城下ノ形勢ハイカニ其者共答ヘケルハ吾々モ事実ハ存シ申ス風評ニハ大守様ニモ——会津公ノ事ナリ——今朝滝沢峠ヘ御出馬有テ御軍配在セラレシカ爰モ遂ニ味方敗走夫ヨリ敵ノ先鋒土州因州大垣ノ軍勢引続ヒテ城下ヘ攻撃ノ由又爰ヨリ凡菴里滝沢峠ノ手前船カ洞ト云所ノ左右ノ山ヘ大軍ヲ埋伏致サセ白川口中山口ヨリ引上ケル会津方ヲ皆殺シニ致サン謀策ヲ設ケシト聞ヘケリ必ス油断有ル可カラスト告ス又問フ会津公ニハ御無事ニ在ラセラレケルヤ其者答テ実否ハ存セスト雖モ滝沢峠ヲ御引上ケ御入城モナク直ニ南口ヘ——田島町街道ナリ——御落去ノ由御安寐ニハ相違ナカル可シト話告スル内城下ニ当テ大砲聲サカンニ聞ユ彼等申シ告ケル様本道ヲ進軍致シナバ諺ニ云フ夏ノ虫ノ灯ニ入ルノ類ト同シ是レヨリ左リニ間道有リ岨立タル細道ニシテ凡三里麓ハ院内村又東山温泉ナリ此道コソ究竟ト懇切ニ報告ス斯ル処ヘ会ノ鎗隊百人計リ白川口ヨリ引上ケ来ルユヘ右ノ件々ヲ話スニサラハ問道ヲ越ス可シ麾下ノ士モ御尽力下サル可クトノ挨拶併シ主君ノ案否粗ホ承リ少シハ安堵致スト雖モ其実否得サル内ハ真ノ安心仕ラスト互ニ事態ヲ話シナカラ嶮岨ノ細道ヲ攀チ登ル然ルニ中途ニ到リ彈丸ノ人夫苦情ヲ唱ヘ何分進マス色々ト論シケル様ハ戦争ノ場ヘハ誓テ連レ間敷峠ニ到リ城下ノ模様ニテ暇ヲ遣ス可シト申聞ケ漸々承知シテ峠迄火急ニ登リケレハ午後三時過キナリ遙カニ城下ヲ見レハ大砲聲ハ震動ノ如ク又町家ハ一面ニ焰ヘ上リ烟リ紛々ト立テ黒雲ノ覆フカ如ク其中二見ユルモノハ天守櫓ヲ計リ也其姿勢真ニ肝膽ヘ貫キケリ暫時見詰テ何士モ拳ヲ握リ憤激ヲ成スト雖モ施ス可キ良策モナク此上ハ只死ヲ一途ニ究メ奮励スルヨリ外ナシト彈丸ハ銘々ニ三百彈宛附与シ人夫ハ約セシ通り返シ院内村迄一ト息ニ斷ケ下リ午後五時到着シ様子ヲ見ルニ家毎戸ヲ閉シテ人ナシ城中ノ様姿モ曖昧トシテ分ラサリシ歟未タ落城トモ見ヘス是レヨリ迅ニ敵ノ後ロヲ攻撃シ構圍ヲ緩メ城中ヲ援

ワン其虚実ヲ計リテ入城スヘシト決シ急ニ隊伍ヲ変換シ吾カ兵ヲ五小隊ニ分ケ会ノ鎗隊百人ヲ五分隊ニ分ケ一小隊ヘ鎗士二十人宛交附シ爰ヨリ僅カ十二三町ヲ側面行進駆足ノ令ヲ下シテ一息ニ城下ニ到リ三ノ城ノ裏通りヲ囲ミ隊伍ヲ乱サス攻戦ニ及フ会ノ鎗士ハ手許ヘ来ラハ擁切セント構ヘケリ此時敵ハ二ノ城ヨリ迫テ本城ヲ攻戦セシカ吾兵三之城ヨリ襲弾セシユヘ一端ハ狼狽ノ様子ナリシカ敵モ軍サ功者ノ長州土州大垣ト見エ直ニ隊伍ヲ後面ニ変換シ兵士ノ煽動ヲ鎮メ対戦ニ及フ殊ニ薩州ノ猛兵ハ一之城ヨリ取テ返シ味方ノ斜メヨリ打掛ル味方敵ヲ三方ニ引受ケ人家ノ影ケ或ハ畳ヲ重子テ楯ニ成シ或ハ獎ミ或ハ退キ千辛万苦シテ激戦ス―此ノ一之城ニ之城三之城ト唱ヘシハ本城ノ郭外ニテ諸家中ノ小路也街道ヲ三道ニ分テ本城ノ北ヨリ西ヲ取巻キ兩側ニ堤ヲ築キ其上ニ籬ヲ構ヘシユヘ斯ル時ニハ敵ノ為ニハ胸壁トナリ味方ノ為ニハ至極不弁理ナリ―偕モ味方一ト奮発ニテ敵ヲ追立危急ヲ援ワント思ヒシニ一時間モ戦ヒシニ手負ノミ多ク敵又屈スル色見ヘス又烈戦スル形勢モ見ヘス只管防戦ノ様子ニ見ユ是ハ滝沢ヨリ援兵ノ来ルヲ待テ激戦スル意ナル可シト察シ一小隊ヲ急ニ滝沢道ヘ潜伏致サセ愈烈発スト雖モ敵堅固ニシテ味方手負ノミ多ク吾カ會計ノ前ヘ連レ来ルト雖モ実ニ其運轉方ニ殆ト差支依テ深手ノ者ハ味方ノ手ニ掛ケ薄手ノ者ハ銃士ヲ引上ケ之ニ脊負セ差当リ院内村エ送附ス又會計ヲ分テ疵兵掛リヲ院内村ヘ没ケル斯テ日モ既ニ暮ナントスルニ勝敗モ分タズ小雨ハ降シ秋ノ中頃ノ黄昏時銃丸ノ音而已耳元ニ響キ今ニモ命ヲ消ユルカト其凄然タル事譬ルニモノナク爰ヲ敗サバ遁ル、ノ途チ無シト各士奮発ハスル条何ノ倚頼モナク死ヲ空敷究メルト思ヘハ各士ノ臆中ヲ慮ヒヤラレケリ偕モ夜ト成リケレ共所々ノ火事ニテサナカラ白昼ノ如シ爰ニ会ノ鎗士ハ地理案内ノ事ナレハ追々途ヲ求メテ入城ノ様子ナレトモ烈敷下知シテ少シモ痿ム色ナク攻激ススル所ヘ滝沢押ヘノ隊ヨリ急告有リケルハ敵滝沢口ヨリ援兵ト見ヘ明松夥タ、シク又山々ニ篝火モ多ク之ハ吾兵ヲ劫カス策ナルベケレ共夜戦ト云ヒ味方寡兵全勝覺東ナ

シ斯ク云ハ迎死ヲ恐ル、ニ非ス本城ノ堅固ヲ見認ル上ハ死ヲ急クニモ及ブマシ今宵ハ一端引上ケ良計ヲ回シ明日入城コソ然ル可シト報ス天野電四郎之ヲ聞テ曰ク如何様尤モナル儀ナリシカ夜中殊更不案ノ地理引退リゾカンカ為メ却テ禍ヲ醸スモ計リ難シ寂フ一戦有無ヲ決シ大手西口ノ敵ヲ追ヒ払ヒ今夜中ニ入城致スコソ詮ナル可シト云テ伍長ヘ其趣ヲ告シテ又端兵急ニ攻メ逼ルト雖モ敵ハ堀陰堤ノ陰ケヨリ銃丸ヲ飛シ更ニ矚テル気色モナクシテ輒ク破レル躰モナシ評ニ曰ク敵モ滝沢ヘノ通路ヲ断チ塞カレ援兵ヲ乞フ事モナラス譬バ乞フニモセヨ滝沢峠ノ関門ヲ空ニシテ応援モナラス猪苗代或ハ戸之口ノ兵ヲ進マセ援兵致サスナル可シ滝沢ノ大切ナルハ会兵白川口ヨリ引上ケノ押ヘナレハ緩カセニナラス殊ニ夕刻ヨリノ急戦ニ討死手負モ多ケレハ援兵ノ来ル迄ハ堅固ニ構ヘテ必ス危忽ノ争戦之ナシ夫ニ反シテ味方ハ死ニ者ノ狂ヒノ振舞ニテ生死ヲ此一戦二期セント短慮ノ豪氣只管義名ヲ上ントセシ膚浅後世怖ル可シスル所ヘ城中ヨリ宗川熊五郎使者トシテ来リ報シケルハ城中未タ無事又主公ニモ一端ハ南口ヘ走ラセシカ午後四時御安體ニテ入城在ラセレケリ麾下ノ士ニ於テモ急援ノ功モ相立ケレハ迅ニ引上ケ入城ノ上軍議及フ可クトノ旨主人ヨリ口上ナリト云フ依テ天野モ宗川ニ同意シ直ニ進軍喇叭ヲ吹セケレハ諸士追々ニ馳セ来ル夫ヨリ隊ハ院内ヘ引上ケサセ滝沢押ヘノ隊ヘ其趣キ報告ス又宗川ハ是レヨリ間道ヲ案内致ス可ク由―偕テ退軍ニ進軍喇叭ヲ吹セシハ兼テ兵士ヘ示シ置キ此日ハ進ムニ退軍ヲ吹セ打方ノ時ハ打方止メノ喇叭ヲ吹ス可シト告シタリ是ハ敵ノ虚動ヲ計ランカ為メナリ―斯テ夜ノ十二時頃院内迄ハ無事ニ引上ケ漸ク一息ヲ継キ疵兵ヲ改ルニ式拾壹人吾カ撤兵六十人ノ内ニテ士官相曾多門高谷権四郎斎藤与一郎下士官大谷幸之助稲葉島吉外ニ兵士六人合シテ拾壹人三番隊ト合シテ廿壹人ノ釣台ヲ兩戸ニテ拵ヒ之ヨリ何レヘ發セント問ヘハ宗川曰ク爰ヨリ二里余南面川村ヘ行クヘシ此間道ハ小台山ノ裾通りニ有リト云依テ斥候ニ半小隊ヲ立疵兵ノ釣台ハ士官兵士ノ別ナク交番ニ之ヲ担ヒ宗川案内ニテ凡ニ

十町モ進ミシ所不図斥候隊ヘ銃丸ヲ打掛ラレ暗夜ト云不意ノ事ナレハ周章沸騰スル事大方ナラス又疵兵ヲ担ヒシコトナレハ進退自由ヲナサス余儀ナク院内ヘ引返ス所兵士何レモ動揺シテ命令モ用ヒス只々驚愕シテ山道ヘ走ルモ有リ道ナキ山ヘ攀登ルモ有リ臆病神ニ取付レシ如クノ有様ナリ小雨ハ降ルニ暗夜ナリ炬ハ敵ノ的トナルユヘ灯事ナラス疵兵ヲ路傍ヲ狂ヒナカラ殺シテ賜ワレト叫フ声其愴愴惘然ナル事恰モ修羅ノ世界ニ異ナリ漸ク壯兵ヲ三十人計リ引留メ威シタリ論シタリ弁シテ屈伏致サセ手負ヲ集メ急速東山迄引取可クト事究マル処ヘ―院内ヨリ東山マテ八町―又銃丸ヲ十発計リ打掛ラル其炮声ニ驚キ奔走スルモ有リ或ハ炮ヲ発スル者モ有其混動一方ナラス敵モ敢テ進撃モ成サス只遠クヨリヤミ打ニ銃丸ヲ飛シテ味方ヲ劫カスト見ユ此煽動ニ怖レ相曾多門高谷権四郎ヲ首トシ手負多ク自殺ス斯テ味方ノ炮発ヲ制シ東山ヲ指シテ引取ル処先ヘ引上ケシモノ遽シク馳セ来リ敵東山ニモ潜伏ノ様子最早遁レル道ナシ之ヨリ城下ノ敵ニ夜打ヲ罹ケ潔戦シテ切死スヘシト云天野曰ク味方僅カ七八十人ヲ過ス城下ヘ引スヨリモ東山ヲ打破ル可シ目前ノ敵ヲ棄テ置キ遠キ城下ヲ打ハ不可ナリ宗川曰ク東山ニ在留ノ兵強チ敵ト計リモ思ハレス麓忽ノ抵触致スモ知レス拙者見届ケ来ル可シト云フテ直ニ奔壮ス間モ無ク馳セ歸リ之ハ会津勢ナリ急キ東山ニ来リテ一息継賜ヘト云ユヘ惣勢東山ニ到リ互ノ健固ヲ悦シ事情ヲ問ヘハ藤沢茂助応接シテ曰ク白川口ハ未タ破レスト雖モ本城ノ急迫ヲ報告有リ至急ニ引上ケ来リ先刻ヨリ様子ヲ伺フニ院内小台山ノ辺ニテ炮声聞ヘケル故不審ニ思ヒ実否ヲ探ル折柄宗川氏カ来リシユヘ安堵致シタリ叡フ少シ過キナハ打テ出ル覚悟ナリシニ危キ事ナリト云フ此方ニテモ昨今争戦ノ様姿城下ヘ攻撃爰迄引上シ困苦城中堅固ノ形勢ヲ話シケル内薄手ノ者ハ自殺モナラス追々ニ当所ヘ来ル又院内ニテ散乱ノ兵士モ集合ス宗川曰ク茲ニ長居ハ詮ナシ之ヨリ二里余沢谷村迄越シ夜ヲ明シ南口ヨリ入城スヘシト云フ其意ニ同シ此夜三時頃東山ヲ発兵沢谷村ヲ指シテ急キケル既ニ五時過キニ当着名主沢右衛門方ニテ少

シ休息スレハ夜モ明ケリ○廿四日曇天当所ノ景況ヲ見ルニ山間溪谷ノ僻地ニシテ家数モ僅カ十二三軒渡世ハ炭焼ニテ耕地稀ナリ朝飯ヲ頼ムニ米ノ貯杯更ニナキヨシ併シ昨日フノ朝福良宿ニテ食セシ俣ナレハ何ナリトモ炊キ呉ル様頼ミケレハ名主方ヘ村中ノ粟ヲ聚メ米ヲ少シ交テ会藩共百人余ノ人員ユヘ粥ニ炊キ呉レ之ヲ少シ宛食シテ漸ク飢ヲ凌ク夫ヨリ当所ヲ出立面川村ヲ指テ急クニ三里余ノ山有リ殊ニ疵兵ヲ担ヒ足ハ勞レケルシ其困難辭ニ尽サレス十二時過ニ面川村ヘ着人員ヲ調ル処百三十人ニ過ス右兵糧囊方ヲ依託シ暫時休息中城内ノ模様ヲ聞ニ城中堅固ニシテ変事ナシ今朝南門ニ於テ戦争有リ味方勝利ノ由ト云又此辺ヘ家中ノ婦女子逃ケ来リ潜居致ス者多シ彼是スル内飯モ喰終リ衆議致ス所朝比奈氏曰城中堅固ナレハ入城スルハ無論俱ニ尽力協議計策ヲ回ラシ良功立サル時ハ覺期ヲ究メ可シト云ヒケレハ何レ違背者壹人モナク入城コソ然ル可シト答フ依テ疵兵五人ハ当所ノ名主方ヘ看護方ヲ頼ミ午後三時当所ヲ雷発南天神橋門ヲ指テ急キケル処凡壹里モ進ミシニ横道ヨリ突然ト鎗士二十人計リ顕レ来ルユヘ恠シム内近寄テ見レハ会藩ナリ互ニ挨拶シテ此辺ノ形勢ヲ問ヘハ昨夜ノ内ニ諸門ヲ圍マレシカ南口ヲ壅塞セラレテハ由々敷大事ユヘ今朝ヨリ進撃致シ漸ク此口ヲ開キタリ其争戦ノ烈敷サ激風ノ如シ味方モ戦死多ク敵ヲ討ツコトモ多シ午前十時ニシテ卑ヌ夫ヨリ近在ヲ巡回シテ暴動ヲ制スルナリ麾下ノ臣入城致サバ天神橋ヨリ入給ヘ又此日ノ合図ハ左ノ手ヲ上ルナリト懇切ニ話シ夫ヨリ前後ヘ分レテ急キケリ夫ヨリ凡壹里行進スレハ城下ニ到ル市中ノ体裁ヲ視ルニ人家ハ放火シテ火焰紛々ト立登リ烟リヲ除ケテ堀際ニ到レハ戦死ノ屍骸累々ト丘ヲナセリ吾兵天神橋門ニ到リ左ノ手ヲ上レハ守門ノ兵モ左ノ手ヲ上テ挨拶シ直ニ開門ス吾兵門内ニ入レハ午後五時過キ時ニ老臣梶原平馬ニ応接ス同人申ケルハ今城兵二百人ニタラス防固ノ備ヘ立難ク危急ノ場ナリ御尽力有テ直ニ二之丸ヲ英固之レ有度トノ依頼依テ詰リ々々ヘ差向番兵ヲ配当シ堅固ニ夜廻リヲ注意ス然ルニ此夜三時頃北口埋門ヘ迫リシ由聞ヘケルユヘ外



ノ兵ヲ引上ケ急ニ援兵致スニ少シノ間タ烈敷銃丸来リシカ此口ハ止メテ大手へ逼ル此炮戦ニ吾兵黒須文吉小川豊治深手病院へ預ケシニ廿七日死ス則チ二之丸梨畑毛へ葬ル明レハ○二十五日雨降吾兵三之丸ノ英固ヲ依頼ニ成ル依テ堤へ炮台ヲ構へ又小銃打方ノ自在ヲ逞働スル為メ堤ノ上ヲ掘割リ前後ヨリ来ル銃丸ヲ除ケテ味方ノ弁理ヲ計ル之ヨリ持場へ兵ヲ配当シテ堅固ニ籠城ヲ旨トス又此三之丸ハ東西壱町南北四町位ニテ二之丸ノ東北ヲ取巻キ平地芝原ニテ外堀堤等迄随分固シ北ニ埋門有リ東ニ不明門在リ南ニ天神橋門在リ此所ニ東照宮ノ社在リ夫ヨリ東方へ続ヒテ花畑毛ト唱ヘテ花園ノ地在リ又東ノ壁堤ノ際ニ横四間堅拾五間ノ倉庫三軒并ベテ在リ何レモ三方へ二間半ノ庇ヲ張出シタリ是究竟ノ陣小屋是ニテ雨露ヲ凌ク少シ離レテ南ニ壱ヶ所是モ四間拾五間ノ塩倉ナリ塩ハ不自由ノ地故貯ヘ在リシト見ヘテ戸口迄満タリ其傍ニ味噌倉在リ是モ同断又二之丸ハ本丸ノ東北ヲ取巻キ三之丸ノ内郭ナリ南門東門次ニ大手ノ中雀門又本丸ヨリ西ニ西出丸在リ爰ヨリ城下或ハ西南ノ在村山川一ト眼ニ見卸ス又本丸ハ乾ニ天守在テ右ニ門在リ正面玄関西南ノ石垣高クシテ尤モ堅固本城建方ハ略ス敵ハ東北ノ両面ヨリ攻迫ス此日モ大小炮丸絶間ナク来ル此夜会ノ近臣阿部正作―武功ノ者ナリ―来リ話シケル様勝軍山仏内峠ハ大鳥圭介秋月登之助ノ隊ニテ防禦在ラレシカ去ル廿一日ノ争戦ハ背叛ノ者在テ戦ヒ央ニ嶮岨ヘ廻ラレ不慮ニ横打ヲ掛ケラレ夫カ為ニ大敗トナル而耳ナラス死亡多シ又二十三日ハ味方寡兵故主人モ近習馬廻リヲ引卒シ滝沢峠迄御親子御出馬御軍配在テ十六橋ノ危急ヲ援ハン為メ手許ノ軍勢ヲ指向ケシ所敵ハ戸之口へ船渡リシテ戸之口ヲ攻拔キ滝沢峠へ問道ヨリ打テ出主人ノ中軍ヲ攻撃ス味方防クニ兵ナク主公ニ引上諫メ漸ク其間防キヲ成ス所へ城下ヨリ火急ノ告報ニハ敵本城ヲ襲フ間タ早く之ヲ援フ可シトノ事故不審ニ思ヒ偕ハ南口カ破レテ襲来ナラント諸士慨然トシテ惘然タリ又城下ヨリ報シケルハ城ヲ襲フハ此頃城下ニ於テ休兵セシ二本松藩也味方ノ敗軍ヲ聞テ反心致セシ様子僅カ百人ニ過キササル兵ナレ共城中

ニハ門番ノ外兵タル者更ニナシ依テ至急援ヒ有リ度ト云フ其趣ヲ主公へ上申シ滝沢モ此姿ニテハ防戦覚束ナシ一旦南口へ御引上然ル可シ今ニ二本松勢ハ追ヒ払ヒ本城へ御迎へ奉ル可クト老臣内藤介右エ門ヨリ御諫メ申上ケレハ主公ニモ思召有ラセラレテ一旦南口へ御落去相成ル夫ヨリ奮發シテ瀧沢ノ敵ヲ押ヘ置キ本城ヲ援ワントセシニ敵強勵シテ烈敷迫ラレ味方五十人ヲ過キササル兵ナレハ如何ントモ本城ノ危急ヲ援フ能ワス困辛スル処ニ十六橋ノ兵モ敗走シテ滝沢峠ニ集ル此兵ハ二百人モ有事ユヘ其半隊ヲ滝沢峠へ残シ火急ニ城下へ引返シ市中又ハ藩士ノ邸宅ヲ見ルニ何レモ戸ヲ閉テ夜中ノ有様夫ヨリ天神橋門へ廻テ本城へ入り様姿ヲ承ワレハ城番ノ老臣倉沢右兵衛申ニハ今朝程戸之口破レシ報告有ル哉否本城ヲ襲フ様子ユヘ不審ト思ヒケル内銃炮声聞ヘケル故直ニ門番等ニ託シテ門扉ヲ固ク壅塞サセ城内ヲ見廻リケレハ大手先へ壱小隊程襲来シテ発炮ニ及ヒ又西出丸へ半小隊程迫テ之モ発炮ス又天神橋門へモ同断是ハ人数ノ多寡分ラス依テ滝沢へ援ヒヲ乞フナリ又其敵ハ何地ヨリ来ルナラント恠シムニ城下ニ休兵セシ二本松勢カ味方ノ敗軍ヲ聞テ背叛セシ由未タ滝沢ハ破レスト聞少シハ安堵致スト雖モ之ヲ防クノ兵城中ニハ壱人モナク門番ハ皆老衰ノ者何ノ用ニモ弁セス心ヲ痛メケル内午前九時頃天神橋門ヲ破ラレ三之丸エ敵押込ム門番ハ二之丸逃込二之丸東門ヲ固メケルニ敵又東門ニ逼テ攻撃スル事急ナリ偕是ヨリ先キ午前七時頃本城ノ危ウシト聞キ家臣ノ婦妻自宅ハ棄置銘々得物ヲ携ヘ凡四五拾人モ奥向ヘ詰メケリ此者共敵ノ二之丸へ逼ルヲ聞キ憤激シテ討テ出テ遂ニ血戦ニ及フ婦女ナカラモ搦槍ノ鋒先ニ二本松勢モ適シ難ク哉三之丸ヲ逃ケ出ス此時敵ヲ討取三人手負モ有ルナラン女兵薄手五人夫ヨリ門々ヲ固メテ時ヲ待ケリト話ス其危急ナル事左モ有ル可シト阿部氏慨然トシテ語ル又吾輩ノ入城致セシハ午後一時頃凡百五十人モ籠リシ事ナレハ堅固ニ諸口ヲ守ラセ主人ヲ迎ヘノ使節ヲ走ラセ天神橋外へ壱小隊ヲ出シ左右油断ナク拖廻致セル内主公ニモ御安体ニテ午後四時頃御帰城間モナク滝沢峠モ敗軍味方散乱シ

テ帰城致セシモノハ僅カ二三十人其他ハ津川ノ方ヘ敗走ノ由敵ノ大軍ハ味方ノ跡ヲ附入り大活一勢ニ大手并ニ埋門ヘ攻迫ス味方モ烈発憤激シ防戦中午後六時頃敵沸騰ノ様姿顕ハレ攻迫緩ミシユヘ如何ノ儀ト思フ処ヘ白川口引上ケノ味方南門ヨリ追々入城シテ告シケルハ麾下ノ士奮勵シテ敵ヲ退ケ可シト三之城ヘ攻撃ノ由ヲ報ス味方ハ其時城中ヨリモ進撃ヲ掛ケ挟討シテ目下ニ退ケント競ヒケレハ主公ニハ御憂慮在テ夜陰ト云ヒ殊ニ内応セサレハ遂ニ同士討モ計リ難シ粗忽ノ働キ成シテ過失シ悔ル共詮ナシ早ク麾下ノ士ニ応報シテ引上ケサセ懇切ニ案内シテ入城サセ可シ壯士共必ス抵触スル事ナカレト嚴命有リ依テ宗川熊五郎ヲ以テ内応致シタリ又此日迄ニ敗散ノ兵追々来リテ愈五百人ニ及ベリ其内ニ勝軍山ヨリ塩川村辺ヲ奔壮シテ来リシ者ノ説ニ曰ク去ル二十二日勝軍山母内峠破レシヨリ大鳥圭助ハ敗兵ヲ引卒シ越後口ノ塩川村エ集籠ス秋月登之助ハ米沢藩ヘ援兵ヲ乞フ為ニ出立ノ由依テ頑固ト当城ヲ守衛セハ不日ニ米沢庄内ヨリ援兵来ル可シト云此夜ハ阿部氏ノ話シ或ハ世態ノ景況ヲ語り合ヒ夜ヲイタク深シケリ偕モ二十三日ノ形勢ヲ思ヒ思フニ婦女ノ奮勵防戦シテ敵ヲ追退ケシ働キ平常ノ嗜方ト云心掛ト云堅備セル故ナルヘシ良臣ノ婦妻実ニ義女ト賞ス可キ歟賢女ト感ス可キ哉此時義賢女ナカリセハ落城ハ無論奥向ハ遁レルニ途ナク死亡損害無量ナラント賞シケリ明レハ○廿六日雨降大小銃炮聲昼夜絶間ナシ午後六時加藤平内始メ外二十人南口ヨリ入城是ハ吾輩須賀川口出兵ノ節伝習仕込方トシテ城下在留セシカ滝沢ノ破レ火急ナルユヘ田島ヲ指シテ引上シカ城ノ堅固ヲ途中ニテ聞又吾兵ノ籠城致セシ由モ伝ヘ聞悦然トシテ来城○二十七日曇天城中ヘ打込大小銃聲昼夜絶ル間ナシ又篝火ノ換リニ毎夜町家ヲ焼テサナカラ白昼ノ如シ○二十八日晴ル吾カ隊小島祐左エ門外二五人入城又諸向ヘ出兵ノ人数追々入城偕又城兵壺小隊午後壹時ヨリ進撃七日町辺ニテ大ヒニ戦ヒ南口通路ヲ開キ同六時帰城薄手五人○二十九日快晴城中ヘ銃丸ノ飛来ル事日増ニ夥多午後六時内田鎧三郎外六名人城告テ曰檜枝岐ヨリ引上ケシ味方ト三

斗小屋ヨリ攻入りシ敵ト今朝大池山ニテ出逢ヒ戦争ニ及ヒ味方兵ヲ山林ニ伏テ偽リ敗シテ高田村迄引上ケル所敵火急ニ追ヒ来ルヲ時分ハヨシト伏兵興テ打出シ又敗走セシ兵取テ返シ打立ケレハ敵散々ニ成テ敗走ス味方十分ニ勝利ヲ得分取ノ銃丸等尤モ多シト云フ○晦日終日小雨降城中無事銃丸ハ同断偕又城ヨリ東ニ当テ距離凡拾町小台山トテ会公墓所有リ城中ヲ見卸シテ最モ大切ノ場所ナリ敵此山ヘ登リ昨廿九日ヨリ胸壁ヲ築立大砲ヲ備ヘル様姿故城中ヨリモ大砲ヲ向ケ数発打込ト雖モ其功モナク遂ニ此日ハ備ヘ方落成致セシト見ヘ右小台山ヨリ破烈丸ヲ打込事多シ城中無事（欄外・朱書）「九月」○九月朔日曇天頃日ハ小台山ヨリ天守ヲ目的ニ散彈ヲ数百発打込ム事故出火ニナランヲ怖レ其鎮防方ニ屢々心ヲ尽ス故此日モ出火ニナラスト雖モ小銃丸ニ打貫レ死スルモ有リ或ハ大砲ノ散彈ニアタリ飛散テ死スルモ有リ今爰ニ話セシ人モ死シタリ又ハ並ヒ立テ居タル人叫アトモ言ス其休息絶ヘタリ実ニ露ノ命ト思ワレケリ○二日小雨降松山善藏小島祐左衛門塩川村大鳥圭助陣所ヘ使者トシテ出立此日午後五時早雲勇男塩川村大鳥圭助陣ヨリ使者トシテ来リ此者雜話ニ米沢勢ニ大隊援兵トシテ今日塩川村ヘ着陣ノ由會計ノ先用来リテ宿陣ノ札ヲ張りケリ之ニ依テ大鳥氏ハ隊ヲ引卒シ越後口ヘ応援トシテ出兵致シタリト話ス此日モ城中無事○三日曇天午後折々雨降偕此朝宰相殿ヨリ隊長佐川寛兵衛并ニ同人持隊百人御召ニ相成リ大書院ニ於テ御酒ヲ賜ワリ会公仰ラレケルハ籠城数日ニ及ブト雖モ各士勉強ニ依テ更ニ退屈ノ姿勢モ見ヘス去ナカラ城ヲ堅固ニ守レハ宜ナリト云ニモアラス敵ハ日々ニクリ込城下ニ充滿スルナリ遂ニ在々ヘ蔓延シテ領内ヲ圧倒スルモシレス実ニ無罪ノ万民塗炭ノ困苦咨嗟スルヲ坐スルニ忍ビズ又米庄ノ援兵ヲ倚頼スルニモ及バズ汝此精兵百人ヲ指揮シテ進撃ニ尽力シ城下ノ敵ヲ退ケヨ其攻撃ノ模様ニ依テ城中ヘ報知致ス可シ其時ハ城ヨリ総勢打テ出ヘシ又城中ノ各士モ急援ヲ心得怠慢有ル可カラスト仰セ在テ佐川寛兵衛ヘ太刀壹振リヲ賜ワリケレハ寛兵衛面目ヲ謝シ委細畏ル趣キ御受申上我陣所ヘ引テ

各士ニ向テ示シケル様フ只今ノ主命有リ難キ儀也依テ吾等ハ有無ノ勝敗ヲ決セサル内ハ城ヘ帰ルマシト思フナリ俱ニ協力ヲ尽シ奮励スルノ時到了リト思フ各如何ニ又生ヲ全フセント思フ者ハ爰ニテ離隊セラレト云ヒケレハ各士辞ヲソロエ今吾輩撰託セラレ誰カ死ヲ惜マンヤ累代ノ鴻恩ヲ報スル時節到来セリ必ス隊長ノ令ヲ背反スベカラズト一同誓ヒケレハ佐川寛兵衛サコソ有ル可シト大ヒニ喜ビ夫ヨリ各士ヘ白木綿ノ鉢巻ヲ渡シ合印トナシ此鉢巻ヘ書スルニ会津家ノ猛臣何之某慶応四年九月三日戦死スト書記シ各士紛々ト激威ヲ顯ワシ午後一時南門ヨリ電発ス偕モ此ノ佐川寛兵衛ナル者ハ先年京師變動ノ節モ鎗槍シテ薄疵数ケ所負ヒナカラ顯ワシ又此年ノ春モ城州伏見暴動ノ節モ鎗槍シテ薄疵数ケ所負ヒナカラ少シモ痿マス戦攻ヲ顯ハシタル人ナリ実ニ英雄トモ云テ可ナラン斯テ佐川隊ハ材木町ヨリ七日町辺ヘ進撃シ烈敷戦ヒ勝利ヲ得一旦ハ敵ヲ追立ケレ共雲霞ノ如キ大軍ユヘ遂ニ引返サレ勝敗分ラス此日ハ暮ニ及ヒケリ味方ノ討死モ多キ由城中ハ無事午後五時頃松山善藏小島祐左衛門塩川村ヨリ帰城未タ上杉勢モ塩川ヘ不着ノ由又敵モ城下ノ外在村ヘハ必ス妨害致サセサル由○四日晴天大小弾ノ来ル事多シト雖モ其防キ方ニ注意シテ火事ニモナラス先ツ無事○五日雨降午後四時乙女金吾越後口大島圭助陣ヨリ来リ城外ノ形勢ヲ話ス南口大内峠破レテ敵関山村迄乱レ入ル由又越後口ノ敵ハ更ニ進軍ノ模様モナク空敷陣スルノミト云フ又元吾カ隊中川部政次郎外四人成毛政吉外十人大内峠ニ於テ戸島隊ヘ合併シ防戦致セシカ遂ニ敗シテ入城右拾六人ノ者ハ廿三日敵乱入ノ節田島駒迄敗走シ其後戸島甲蔵隊エ合併シテ今日ニ到ル然ルニ戸島吾隊ニ組入僻論ヲ主張シテ人数ヲ返サス依テ軍事方ヘ掛合條論を建テ吾隊ヘ引取ル城中堅固○六日曇天夜ニ入テ雨降会公御親子陣場廻リ懇篤ノ御挨拶有リ城中堅固○七日晴ル城中堅固○八日雨降工藤衛守上州檜枝岐ヨリ引上ケ入城話シケルハ松平太郎旧幕府ノ陸軍隊ヲ二大隊引卒シ脱艦ニ乗組仙台石之巻荒浜ヘ上陸ノ由不日ニ確報在ル可シトノ外説有リト云又此日会藩阿部正作当隊

軍目申渡サル○九日雨降領内民屋ヨリ陣見舞トシテ備ヒ餅ヲ拵ヘ数拾荷ヲ城中ヘ運転ス又大根野菜漬物ノ類ヲ牛ニ脊負ハセ数拾駄附送ス城中堅固○十日小雨降大島圭助陣ヨリ松田六郎使者トシテ来ル此者話シニ城外ノ形勢ヲ見ルニ米沢勢ノ先鋒凡二三百人モ塩川村ヘ着スト雖モサシタル儀モナク只近□ヲ巡邏杯スルノミ又大島氏ヨリ出陣ノ旁ヲ謝シ述ケレ共挨拶モ無ク何事ヲ掛合フテモ隊長未タ不着ト而已斷リ何等ノ儀ニ哉更ニ不審ハレス又援兵ナラハ城中ノ危迫ヲ見テ徒ラニ傍觀スル儀モ有ルマシト吾カ隊疑惑ヲ生セシナリ又外説ニ軍艦五六艘脱走シテ仙台石之牧ヘ碇着船將ニハ榎本和泉守柴弘吉松岡岩吉等ノ由ニ風評有リケリト話シケル適々外面ノ様姿ヲ伝ヘ聞テハ早晩カ応援ノ来ラン事ヲ而已待ツ又此日城中ヨリ壱中隊進撃ニ出七日町大工町ニテ大ヒニ戦ヒ午後七時帰城深手二人薄手五人城中堅固○十一日曇天大小炮弹昼夜絶間ナシ散彈ノ雷聲モ昨今ハ耳ニ馴レ地上或ハ家屋ヘ落彈シテ雷轟スルトモ敢テ周章スル者ナシ城中無事○十二日曇天前日同斷○十三日曇天夜ニ成ツテ雨降此夜十二時頃ヨリ吾カ兵壱小隊不明門ヨリ打テ出テ三之城ノ敵ヲ攻撃ス夜半ト云雨中ナレハ敵ニ油断有リ遂ニ三之城ヲ追立勝利ヲ得ルト雖モ寡兵ニシテ続ヒテ打入ル能ハス十四日ノ午前七時引上ケ討死ナク手負五人○十四日折々雨降午前十時頃敵東不明之門外ヘ攻逼ス迅ニ兵ヲ増加シテ防戦ス又埋門外大手外ヘモ同時ニ逼ル城中兵士ヲ不殘郭堤ヘ配加シテ防戦ノ準備ヲ成ス所ヘ早クモ小銃丸ノ飛ヒ来ル事雨霰ノ如シ大砲ハ小台山ヘ数挺ヲスヘ三之城院内ノ三三ヶ所ヨリ破烈丸ノ散彈ヲ打込事雷動電光シテ飛来ル勢ヒ大地モ崩ル、カト恠シム又天守櫓ハ砲彈来テ打貫キ乍左蜂ノ巢ニ異ナリ此火ヲ防クニ疊布団ノ類ヲ湿シテ漸ク防消ス夫カ為ニ殺傷スル者最モ数多又銃士ハ東北ノ三門ニ迫ツテ乗破ラン勢ヒ端兵急ニ打懼ケルト雖モ城兵少シモ痿マス敵ノ近寄ルヲ待テ打出シ退ケハ止メ千辛万苦シテ午後七時迄闘戦スルト城中堅固ニシテ勝敗分ラス夜ニ入シヲ界ニ攻戦ハ畢テ定例番兵所ノ銃聲而已敵大砲ヲ烈発セシハ城中ヘ火ヲ附煽動致サセ



其透キラ計ツテ攻メ落サン巧ミナレハ此ノ彈火ヲ防ク事緊要ナリ偕モ此戦闘中即死スル者拾貳人手負拾七人吾隊ニテ喇叭教導役野崎全助外四人手負○十五日折々雨降此日モ昨日ノ如ク早朝ヨリ銃丸ヲ飛シ東北へ逼ル城中火ヲ能ク防キ堅固ニ守衛即死老人手負五人○十六日晴ル夜ニ入テ雨降此日ハ敵モ切迫セズ遠クヨリ銃砲丸打込而已偕モ西南当リ飯寺村辺ニ大火有リ砲声モ聞ヘケルユヘマシク兵火ナル可シ拒凡巷里位ヒ未タ其報告ナシ城中堅固○十七日雨降早朝ヨリ西南ニ当テ大砲聲夥多シク聞ユ其実報未タワカラズ午後六時大鳥圭介陣ヨリ報知有リケルハ上杉勢去ル十五日到着故軍議ニ及ブ可ク存ル処図ランヤ昨朝我等カ陣所へ攻撃引続テ飯寺村在陣ノ朱雀隊ヘモ同様併シナカラ格別ノ奮発ハ之レナク又説ニ空彈ヲ発スルトモ云フ其實際祥カナラス又上杉家背叛致ス上ハ頼ミノ綱切果タリ今爰ニテ戦死スル時節ニモ有マシ是レヨリ仙台表へ趣キ松平太郎榎本和泉守ニ参会シ機謀ヲ受ケ当城ノ援兵ヲ計ル可シ各士ニ於テモ堅固ニ籠城ヲ遂ケ我等カ良報ヲ待給フベシトノ懇切ノ口上ナリ各士上杉家ノ様姿ヲ聞テ驚愕ス又大鳥氏戦中ニ詳細ノ報知大量ナリト賞感ス偕又城中ノ雑話ニ上杉酒井ノ応援次第城中ヨリモ打テ出勝敗ヲ決ス可シト思ヒシニ敵方トナツテ進軍致ス上ハ最早是迄ナリ此上ハ籠城モ詮ナシ銘々粉骨細身シテ打テ出テ花々敷戦死スベシト勇氣盛ント見ヘニケリ働モスレハ討死スルハ会津ノ風土ナリ○十八日晴ル城兵打テ出ン事ヲ議スト雖モ深キ思召モ有之趣ヲ以テ老臣馳セ回り堅ク制シテ免サス城中無事昼夜砲聲絶ヘス○十九日晴ル本丸へ胸壁ヲ築立ル是ハ此日迄米表ニテ築立置シヲ漸々糧米乏シク相成ル依テ芝ニテ築換ル偕又此日進撃ニ出シ隊長秋月三郎儀材木町ノ闘戦ニ上杉ノ手へ擒ニ相成リシ由急報有リ其真偽分ラス俱区々ノ雑話多シ城中堅固○二十日快晴午後一時頃秋月三郎案内ニテ上杉ノ隊長千坂某上杉家ノ使者トシテ来城降伏ノ儀ヲ取償フ由未タ実否ハ分ラス砲聲昼夜絶ス城中無事○廿一日快晴午前八時頃老臣倉沢右兵衛降参ノ儀ニ付内応トシテ来ル加藤平内天野加賀守天野電四郎朝比奈虎之助

へ応接ス徳川脱藩ニ於テハ宰相殿尊慮ニ違背無之旨ヲ答ヘケル又午後二時頃會計方ヨリ至急人員ヲ取調ヘ差出サレ度趣キ申越ス依テ調ヘル所疵兵病院入ヲ余キ撤兵隊六十五人第三番隊百三十人何レモ役々共此処へ手当トシテ平均老人分金五兩宛合計九百七拾五兩渡サレケル又午後三時頃官軍参謀ヨリ御渡シノ書付毎隊へ御回シニ相成ル因之書写ス

一大旗ニハ降参ノ大二字ヲ書大手門外へ建ル官軍止戦之令ヲ伝フ一時計リ有テ重役礼服ヲ着シ兵器一切為持大手先官軍へ相渡ス然ル後肥後父子歎願書持参之筈

一肥後父子刀ヲ小性ニ為持一刀ニ罷出テ臣下ハ勿論脱刀之筈

一病氣等ノ節ハ駕ニテ不苦事

一兵士出城之儀ハ追々ニテ不苦事

一城中男幾人女幾人并ニ他郷へ脱走之者幾人ト云事帳面工相認メ差出シ可申筈

一兵士出城之上城地一切官軍へ可相渡之筈

右心得之事

米沢藩ヨリ参謀ヘ伺ノ覚

一婦人并二十四歳以下之者六十一歳以上之者ハ何方へ住居候共不苦候

尤モ此節御扶助筋ヲ願出候ハ、被仰付候事

但路頭ニ迷候節ハ御炊出ヲモ官軍ヨリ可被下トノ事

一士分何人 但 十五歳以上 一兵士何人 但 自国何人  
六十歳マテ 他領何人

一役々何人 但 他国引合何某  
内務掛リ何某

右一同猪苗代ニ於テ謹慎活命可相待事

一近習医師 拾人 一料理方塩辛 拾人

一女中之俱方員数不相構男子之俱方前条之半

一城ヨリ兵士隊出之節ハ大小相帯シ不苦

一肥後父子ハ駕ニテ不苦

一軍鑑御出張ニテ歎願書差出シ候上又々駕ニテ猪苗代へ引取候テ可然

但猪苗代トモ限ルマシ滝沢峠ノ寺院ニテ可然哉明後日軍鑑ヨリ御

差図可相成筈

一奥方俱ノ婦人ハ不相構男子ノ供方五人位ニテ宜敷下夫同断

一明二十二日四ツ時降参ノ旗三本繰出シナハ官軍御心得被成下候事

但刻限ノ儀ハ一時間位ニテ御宥免ノ筈

一肥後父子引取候節婦人ノ分ハ幾人附候テモ不苦候トノ事

右御軍鑑伺ノ通

辰九月廿一日

米沢藩軍事方

偕モ此日ハ米沢藩ヨリ降参ノ式接対モ之アリ愈降参ノ約議整ヒシ上ハ明  
早朝兵器一切取調官軍御軍門へ差出シ可申ニ付テハ夫々所持ノ兵器手入  
方入念ス期テ銘々思慮スルニ米沢藩ノ計ヒニテ降参ハ相整ト雖モ官軍ニ  
抗敵シ負罪ノ身ナレハ如何様ノ御所置仰セ出サレヘキヤト却テ安キ心ハ  
ナカリケリ又爰ニ猶モ愀愴ノ一話有リ其謂故ハ水戸殿家来元内訌ノ節諸  
星組天狗組ト分レ諸星方ハ主人エ附天狗組ハ脱走シテ攘夷ヲ主張シ常野  
ニ庄倒シ止ムヲ得サルノ場合ニ立到リ旧政府ヨリ陸軍隊并ニ諸侯ヲ差向  
ケ水戸家ヨリモ政府ノ催促ニ依テ諸星方討手ニ向ヒ数回ノ闘戦ニ及フ此  
時將軍家御目代若年寄田沼玄蕃頭御軍配ニテ遂ニ討伐シ其首タル武田伊  
賀ヲ始メ数名加賀ノ国へ追詰メ虜掠ノ上斬罪ニ所セラレ一旦平定ナリシ  
カ又今年ノ煽動ニ付テ天狗組余類ノ者発起シテ内訌シ諸星方ハ中山備前  
守ヲ始メ百六七十人脱走シテ会藩ニ合併シ数回ノ闘戦ニ多ク戦死シテ今  
八十人程籠城致シケルカ何レモレイラクシテ身ニハ破衣ヲ着シ真ニ氣ノ  
毒ノ様姿ナリ此夜右ノ士軍事方へ申出ケルハ吾輩儀ハ朝廷寛大ノ御所  
置仰出サル、共同藩ニ於テ必ス免スマシ遂ニ梟木ニ頸ヲ懸ルハ必セリ前  
見ヲ計リテ是ヨリ自国へ打テ出テ邪智奸佞ノ天狗組トシユウヲ決シ度会  
公ノ御前宜敷トノ儀ナリ依テ老臣ヨリ会公へ其向申達セシニ会公ニモ其

心ヲ察シラレシニヤ其意ニ得サセラレ分テモ手当方懇切トノ由夫ヨリ諸  
星組ハ夜中出城シ心太クモ水府へ向キケル後日二開ニ路次ニテ数回争闘  
有リテ漸ク水府へ着ノ処彼ノ藩士官軍ノ催促ニテ出兵寡兵ユヘ思ヒノ俣  
ニ勝チ働キ彈藥其他十分ニ持出シ乗舟シテ函館へ発舟セシトノ由偕モ此  
夜ハ発砲ヲ致ス間敷トノ事故城中質素ト静マリ敵方モ篝火ハ夥多敷見ヘ  
テ敵重ノ様姿ナレ共銃聲ハ少ク深夜ニ及フ程何歟ト物凄シ又本丸ニハ明  
日開城ニ付名残りノ酒宴連歌有テ諸長参会明レハ〇二十二日快晴早朝兵  
器ハ残ラス軍事方へ集束シ大手前へ降参ノ大旗ヲ立テル間モナク官軍砲  
銃声ヲ止ム重役礼服ヲ着シ兵器一切ヲ持タセ大手先官軍へ相渡ス午前十  
時肥後殿父子歎願書持参大手門前へ総督参謀ニ拝呈ス其文ニ曰ク

松平肥後歎願書

臣<sup>容保</sup> 乍恐謹而奉言上候拙臣儀京都職中蒙 朝廷莫大之鴻恩ナカラ  
万分之微哀モ不奉報其内当正月中於伏見表暴動之一戦旨意行違不憚近  
幾奉驚 天聰ヲ深奉恐懼候爾来引続今日迄遂ニ奉抗敵 王師僻土頑陋  
之訛誤今更何共可申上様無御座実ニ不容天地大罪惜身無所人民塗炭之  
苦ヲ為受候次第全<sup>容保</sup> 之処到ニ御座候得ハ此上如何様之大刑被 仰付  
候共聊カ旧恨無御座候臣<sup>父子</sup> 并ニ家来之死生偏ニ奉仰 天朝之聖断但  
国民ト婦女子共ニ至リ候テハ元来無知無罪之儀ニ御座候得ハ一統之御  
赦免被 仰出候様代而奉歎願候仍之從來之諸兵器悉皆奉差上速ニ開城  
官軍御陣門へ降伏奉謝罪候此上万一モ 王政御復古出格之 御憐愍  
ヲ以至仁之御寛典被 仰付候者冥加之至難有奉存候此段 大総督府御  
執事迄冒万死奉歎訴候誠惶誠恐頓首再拜

慶応四年九月

源<sup>容保</sup> 謹上

偕又続テ同家重役ヨリ歎願書差上ル其文ニ曰ク

同家重役歎願書

亡国負罪之陪臣<sup>長修</sup> 等謹而奉言上候老寡君<sup>容保</sup> 儀久々京都ニ於テ奉職  
罷在寸功モナク蒙無量之天眷万分之一モ未奉報 隆恩刺へ触 天譴遂

二今日之事跡ニ至リ 容保 父子城地差上降伏奉謝罪候段畢竟 微臣 等頑愚疎暴ニシテ補導之道ヲ失ヒ候儀今更哀訴仕候モ却而恐多次第二御座候得共臣子之至情実ニ難堪奉存候間代而 臣 等被処厳刑被下置度奉伏冀候何卒 容保 父子蒙 聖慈寛大之 御沙汰候様御執成被成下置度不顧忌諱泣血奉祈願候臣 長修 等誠恐誠惶頓首再拜

慶応四年九月

松平若狭重役

萱野権兵衛

長修花押

梶原平馬

景武花押

内藤介右衛門

信節花押

原田対馬

種龍花押

山川大蔵

重 花押

海老名郡治

季 花押

井深茂右衛門

重常花押

田中源之進

玄 花押

倉沢石兵衛

為 花押

右ノ歎願書ヲ差出ス処官軍御受納ニ相成降伏ノ式相済兼テ御内達ノ通リ出城活命相待ヘキ処猪苗代迄ハ隔里ノ事故明廿三日出城開兵ト事定ス此夜ハ分テ物静カニシテ篝火モ薄ク砲聲モ絶エ却テ物凄ク夜終ラ物思ヒシ

テ誰人モ唯歎息ヲノミスル計リナリ明レハ○二十三日快晴午前八時愈開城ノ都合ニ相成隊伍ノ順序ヲ乱サス埋門ヨリ出城途中護衛トシテ米沢藩前後ヲ守固ス夫ヨリ滝沢峠ニ罹リ左右ノ原野路傍ヲ顧レハ去ル八月廿二日当所大戦ヒノ節戦死致セシ徳川脱藩会津勢ノ死骸也何レモ袖ヲ濡シテ其有様ヲ悲歎ス斯降伏ニ相成ル儀ナラハ其時ノ苦戦モ益ナキコトナリト真ニ愀然致サヌ者ハナカリケリ夫ヨリ十六橋モ過キ午後七時猪苗代町ヘ着宿割ノ儀ハ会ノ老臣内藤介右衛門承リ周旋致スト雖モ式千人ニ余ル人員故宿所ニ差支夜十時過ニ漸ク宿処定マリケル諸若松ヨリ当所迄里程五里ト云○廿四日快晴此日帶刀御預リニ相成猪苗代ニ於テ謹慎御沙汰ヲ待ベキ旨申渡サル偕又會津公親子ニハ滝沢村妙国寺ニ於テ謹慎恭順トノ事又吾カ撤兵隊六拾余員ヲ六ツニ分配シ宿泊所ヲ設究ス元我カ會計ハ百姓兵藏夫ヨリ伝吾清助忠之助条吉佐助ノ六軒ヘ附換ス○廿五日快晴偕モ当所ノ風土ヲ見ルニ西北ニ万代山ト云高山ヲ脊負ヒ東南ヘ四里余ノ湖水ヲ受ケ田畑共ニ疲地併シ湖水ニテ漁舟ヲ浮ベテ川魚ヲ獵シ營業トスル者モ有リ此湖水ノ回りニ村里数拾ケ村有テ北ヲ猪苗代組ト唱ケ高式万五千石ト云フ又当宿ハ家数モ八百軒有テ僻地ニシテハ繁昌ノ所ナリナレ共商家ハ少クシテ濃家多シ又爰ニ上杉景勝時代ヨリノ古城有リ中古ヨリ會津ノ砦城同様ニテ番城ト成リシヲ八月廿五日官軍計入ノ節放火ニ罹リ残ラス焼亡ス又当所ヨリ白川宿ヘ福島通リ拾九里ト云フ○廿六日雨降万代山ヘハ大雪降ル会津藩玄武隊宿泊ニ差支ヘ我宿泊処ヘ拾人割入ニ成ル○廿七日雨降別条モナシ○廿八日雨降東風吹テ到テ寒シ別条ナシ○廿九日雨降夜ニ入テ止ム別条ナシ(欄外・朱書)「十月」○十月朔日曉方ヨリ雪降出シ積ル事二尺ヨリ三尺位ヒ何レモ驚キ宿亭主ニ問ヘハ此位ノ雪ハ驚ニタラス極寒ニ到レハ七尺位ヒヨリ尅丈位ニ到ルト云又寒キ事甚シ伊東利三郎雪中脱逃ス其意ハ知ラト雖モ推慮スルニ近々御処置モ仰出サルヘシト恐怖シテノ事ト察ス又美濃部藏人旅宿替ヘ別条ナシ○二日晴ル午後雨降朝比奈虎之助來臨伊東利三郎脱走届ヲ出ス別条ナシ○三日晴ル早朝二官



軍二大隊程仙台口へ出兵致ス○四日晴ル別条ナシ○五日曇天午後雨降別条ナシ○六日雨降別条ナシ○七日快晴夜二入テ雨降別条ナシ○八日曇天夜二入テ雨降別条ナシ○九日快晴仙台辺ヨリ来リシ人ノ話ニ官軍仙台へ攻撃数回未タ争戦最中也又脱艦ノ人数上陸シテ加勢ヲ致ス由又其内ニ異人モ交リテ専ラ差図致スト云此異人ト思ヒシハ榎本松平ノ兩人ノ事ナルベシ又或人來テ話シケルハ仙台藩モ九月中降伏ニ相成依テハ徳川ノ脱艦千代田形開陽回天長鯨丸等榎本和泉守松平太郎又陸軍大鳥圭助残兵ヲ引卒シテ右舟へ乗組仙台石ノ牧ヲ出帆シテ夫ヨリ未タ近海ヲ航海致ス由遂ニハ何地へ歟上陸シテ義兵ヲ上ル深慮ナラントノ説有リト語ル是コソ実話成ルヘシト何レモ信ス之ニ依テ官軍其海岸へ兵ヲ揉出シテ砲戦数回ニ及フト雖モ勝敗分ラサル由遠隔ノ地故風評区々也又此日錢通用方御達シ有一鑄古四文錢式拾四文文久四文錢拾六文銅壹文錢八文右通用可致旨又此日午前十時頃ヨリ西方ニ当リテ大砲声夥多相聞ケル故里人ニ方位ヲ問ヘハ是ハ若松ニ相違ナシト云之レ何ノ故ナラント心ヲ勞シケル夜ニ入テ其実報ヲ得ルニ是ハ官軍大砲ノ筒弘ヒノ由偕又当所ヨリ二本松口勝軍山ヘ凡四里又福島口伊王山ヘモ凡四里両道共ニ要害嶮岨ノ地也去々八月廿一日ノ破レハ味方ニ變心ノ者有テ斯ハ敗軍ニ及ヒタリ真ニ本意ナキ儀ナリト里人來テ話ス○十日曇天夜ニ成ツテ雪降積ル事二尺余此日病人ヲ取調ヘ至急差出スベキ旨達シ有リ 十一日晴ル此日御沙汰之有ルハ 朝廷格別寛大ノ恩召ヲ以テ死一統ヲ宥メラレ其藩々ヘ引渡ス可ク尤モ東京迄ハ官軍ノ御賄ヒタルベキトノ旨○十二日快晴病人ノ儀ハ猪苗代病院へ残シ置キ午前八時当所出立途中ノ護衛万事取扱ヒトシテ長州大垣ノ両藩之ヲ掌務ス大垣兼用隊ノ長山本重藏偕モ猪苗代ヲ過テ吉田村玆ニ七瀬川ト云河有リ一ト瀬ニシテ何故ニ七瀬川ト云フ哉ト里人ニ問ヒケレハ此ノ水原ハ万代山ノ北ニ当テ湖水七ツ有リ其流末故ニ七瀬川ト唱ヘル也ト云又爰ヨリ行程凡壹里歩ミテ峠有リ是中山峠ト云嶮岨ニシテ登リ廿町下リ壹里半麓ヲ中山村ト云夫ヨリ行程凡二里横川村当所ニ長藩ノ旅宿札ヲ掛

タリ吾輩ハ爰ヨリ十町程行キテ安子島村旅宿吾分數百姓惣吉方○十三日快晴安子島村出立堀之内村ハツ村福原村是迄溪谷原野ノ細道ナリシカ爰ヨリ仙台街道ナリ夫ヨリ郡山宿小休中食此所ヨリ東南ノ方小高キ所ニ三春城見エル宿柄宜ナリ守山預リ所ノ由偕午後当宿出立小原田村秀之山村笹川村拾貫内村行川村<sup>ナメ</sup>爰ニ行川ト云河有リ板橋夫レヨリ須賀川宿旅泊吾カ儕ハ新町白岩屋善助当宿凡半分兵火ニ罹ル八月の中ハ此辺ニテ數回撃戦有リ依テ所々ニ胸壁モ有リ死屍ノ墳モ有リ○十四日快晴当所出立矢吹宿当宿凡半分兵火ニ罹ル当宿ハズレニテ水戸ノ藩士急キ足ニテ我等追抜テ行ケル故様子ヲ問フニ水藩答ヘテ我隊官軍ノ催促ニ依テ越後地へ出兵夫ヨリ庄内ヲ廻リ白石へ着ノ所国ノ本城へ賊徒迫リ危急ノ趣キ急報有リ依テ御暇ヲ願ヒ帰路也ト云フテ急ケル吾等慮フニ此水戸城へ迫リシト云ハ過日若松開城ノ節本國へ帰ラレケル諸星組ナルベシ又道路ノ説ヲ聞ニ彼ノ人数僅カナレ共必死ヲ究メシト見ヘ途中ニテ太田原并ニ黒羽烏山杯ヲ打破テ水戸へ押寄せシ勢ヒ如何ニモ強兵ナリト敵ナカラモ適ト官軍モ賞シケリト話ス者有リ偕モ夫ヨリ白川宿へ着ノ処町入口ニハ嚴重ニ胸壁ヲ構ヘ其堅固ナル事耳目ヲ驚カス有様ナリ尤モ左モ有ル可シ此所ニテ奥羽ノ諸軍勢ヲ喰留メ數回烈戦ノ場所也又市中ニ到テ形勢ヲ見ルニ此近宿ニ稀ナ繁花ノ地ナリ又奥羽後詰ノ兵ト見ヘ家毎ニ表札ヲ掛テ市中ニ充滿ス依テ吾輩旅宿ニ差間ヘ西ノ入口町ヨリ南ノ方七町程奥日蓮宗妙国寺ト云寺へ旅泊ス○十五日曇天午前五時長藩中宗準藏人馬ノ引合トシテ來ル午後一時当寺出立行程二里白坂宿泊リ旅宿若野清左衛門齋屋武八原喜三郎ナリ偕此辺都テ小山ニシテ原野広々トシテ那須野原ニ続キシト云フ○十六日快晴白坂宿出立凡八町程來リ奥野ノ国境小高キ所ニ明神ノ社口式社有リ境之明神ト称シテ式社競ベテ建テ随分古社ノ由夫ヨリ坂ヲ少シ下リテ飯沼勝五郎小屋掛ノ榎有リ大木ナレ共古木故今ハ枯汚テ其形チ計リ現在ス又少シ下リテ其時ノ名主徳右エ門ノ家名今ニ榮ヘテ松本源三郎ト唱ヘテ豪家ノ百姓ノ由道ヨリ北ノ方ニ見ユル玆ヨリ行程三里芦野宿

中食又三里行歩シテ越堀宿へ泊ル我カ旅宿玉屋角之助○十七日快晴越堀宿出立鍋掛宿ヲ過キ太田原宿迄三里当所小休中食夫ヨリ行程二里佐久山駅エ泊ル大町ノ江近屋惣助方旅宿偕夜ニ入テ大垣藩横山某見舞トシテ来リ不自由ノ儀ハ何成トモ遠慮ナク御申越成サレ可クト懇切ノ挨拶有り又此宿ニ福原内匠ノ陣屋在リ○十八日快晴佐久山駅出立行程三里八町喜連川駅中食夫ヨリ式里拾町氏家駅へ泊ル横町丁子屋善助方へ旅宿○十九日曇天午後雨降氏家駅出立凡廿町歩行シテ阿久津川舟渡シ爰ヨリ拾町緒川是レモ同シク船渡シ爰ヨリ式里半白沢駅又三里拾町宇都宮駅小休中食夫ヨリ式里台新田村爰ニ練羊羹ノ名物有リ之ヲ求メテ此辺ヲ一見スルニ去リシ四月ノ廿三日此口敗シテ多クノ兵ヲ害セシト思ヘハ誰モ口ニハ出サ子ドモ心中愀愴シテ慮ハズモ歎息ス斯テ戦死ノ墳塚ヲ余処ナカラ追善シテ歩ムコト式里雀之宮駅へ着村田屋庄三郎方エ旅泊ス○二十日快晴雀之宮出立石橋駅エ式里小金井駅エ式里半当宿小休中食夫ヨリ式里新田駅又式里拾町小山駅エ着下町味方屋治助方旅泊偕当宿ヨリ拾町程北ニ壬生街道有リ之レモ去リシ四月ノ十七日争戦有ツテ戦死モ有リ○二十一日快晴小山駅出立壺田駅エ式里半野木駅エ式里半古河駅エ式里小休中食夫ヨリ中田駅エ式里半此所ニ利根川舟渡シ有リ一名坂東太郎川トモ云フ大川ナリ一渡リ越セハ栗橋駅ナリ当駅泊リ伊勢屋長治郎方エ旅泊ス○二十二日快晴栗橋駅出立式里幸手駅小休中食夫ヨリ式里半杉戸駅泊リ小島吉左衛門方旅宿夜ニ入テ雨降○二十三日快晴杉戸駅出立式里半柏壁駅夫ヨリ半里大沢駅又式里越ヶ谷駅小休中食夫ヨリ式里草加駅泊リ福田屋源助味増屋仁兵衛方旅宿夜ニ入テ長州藩士重友正助来臨話舌遠路ノ処是迄滞リナク護送仕リ明二十四日八千住駅ニ於テ其藩々エ御引渡シ申手続キニ相成長々ノ御徒然御不自由ノ儀モ隊長ニ於テ察入候得共負罪謹鎮ノ事故更ニ風情モ仕ラス最早今晚切ノ事故何歟ト存スレドモ心ニマカセズ依テ些少ナカラ酒肴料呈進致ス也ト懇切ノ口上御厚志ノ趣キ篤ク挨拶シテ受ル此金百五拾両ナリ○二十四日快晴草加駅出立式里千住駅エ着三町目千本

屋市右衛門方休息偕モ兼テ当宿ニテ旧主家エ引渡ス可キ儀ナレハ諸藩脱士受取トシテ詰合フタリ其形勢ヲ見ルニ銃鎗ヲ光ラカシ鉄棒捕縄ヲ以テ騒クモ有リ又ハ鎗長刀ヲ飾リ立白木綿ノ鉢巻タスキヲ掛ケ或ハ小具足ニテ身ヲ固メタルモ有リ今哉珍事出来ス可キ歟ト恠シム程ノ有様ナリ之ハ元諸藩ヨリ五人或ハ七人宛脱シテ第三大隊へ合併シ今此所へ同道致セシナリ此時諸藩エ引取可キ脱士徳川藩ヲ余クノ外它家エ三人歟四人位ノ事ナリ右ノ脱士ヲ受取哉否直ニ縛リ上ケ駕エ押込厳重ニ警固致スモ有リ又ハ前後ヲ銃鎗ニテ固メ引立テ行モ有リ何レモ縄目ノ耻ヲ受ケサルハナシ我等ハ其有様ヲ見テ専制ノ致シ方ト慨然トシテ言葉ナシ情ヲ愚慮スルニ仮令負罪ノ身ニモ致セ 天朝ニ於テ格別寛典之思召ヲ以テ死一統ヲ宥メラレ候上ハ大切ニ受取テ此上ノ 御沙汰ヲ伺テ然ル可クト存ルニ嚴重ノ縄目ニ掛囚人ノ取扱ヒ心得ザル儀ト嘆息ス併シ我カ主家ニテハ何レノ御取扱ヒ相成リ候哉ト安キ心モナカリケル処ニ午後三時頃第三歩兵隊ノ分ハ 朝廷エ御引渡シニ相成リ夫ヨリ五時頃迄ニ御家来ノ分御調査済百六名千住大橋ヨリ乗船シ隅田川筋ヲ下リ十二時頃築地エ着夫ヨリ門跡エ入寺致ス尤モ外出ハ禁ス偕モ寺中ニ諸士ノ親類又ハ懇意ノ者群参ス中ニハ戦死ヲ聞テ愁愴スルモ多カリ此夜ハ右ノ混動ニテ寝ル事ナラス明レハ○二十五日快晴此日モ同様聞伝エテ来ル者夥シ門跡在留○二十六日快晴前日同断見舞物多シ門跡在留此日奥州ノ諸侯歎願書ヲ披見ス依テ爰ニ記載ス

# 中村藩歎願書

僻地小邑之微臣謹而奉申上候<sup>臣</sup> 父子及ヒ家来共兼而勤 王之宿志ニテ先般 王政御一新ニ付別而忝意 王命遵奉仕既ニ討会之師ヲ差出候処豈図ランヤ仙米両藩賊ト通意謝罪之虚喝ヲ以テ隣並小国ヲ欺キ剩ヘ暴威ヲ以テ同盟ヲ要スルニ至リ驚愕無極乍去是非排群邪勦 王之道鼓舞可致筭ニ候得共僕隷相拳而<sup>臣</sup> 父子賊之為ニ蜜粉殲滅セラル、ヲ懼レ一時苟且之為賊へ陽從致遂ニ 天恕灼々今日ニ至リ社稷勦絶之 御所

置無疑事奉恐怖候何程小藩不得止申條如斯之形勢ニ立至リ候而者一国之民命一々御斷滅被遊候共遺憾無之事二者御座候得共全無挹情実モ有之前條大義ニ及候失討悔悟仕只今御軍門へ降伏仕謹而社稷返上匹夫ト相成無罪之人民共生命御救助被成下候様奉哀訴候仰願クハ 朝廷天地覆載之以御仁德無罪之民命御宥恕被成下且帰順実効ヲ以重罪ヲ相償候様被 仰付候ハ無限奉感戴候此段血泣号慟御軍門へ降伏謹而奉仰 天裁候誠恐誠懼謹言

辰八月

相馬因幡季胤判

御総督府御参謀中様

二本松歎願書

今般私儀名分順逆ヲ誤奥羽各藩同盟仕奉抗 官軍終ニ土地人民ヲ失ヒ何共可奉申上様無御座深ク奉恐入候上杉彈正儀者同盟最寄之儀ニ付一先米沢表エ罷越候処同藩ヨリ厚 叡慮之程奉伝承恐愕至極奉存候素ヨリ奉抗敵 朝廷候存念毛頭無御座候得トモ旧邑之儀者全遠境ニ罷在春来天下之事情モ隔絶仕恐多モ厚 叡慮之程モ具ニ不奉伺一時之行違ヒヨリ終ニ今日之仕儀ニ立至候段誠以奉恐入先非悔悟仕候隨而者兵器悉皆指上旧領寺院へ立戻リ恭順謹慎罷在家来末々迄急度謹慎申付奉仰 朝裁度奉歎願候此上者 御寛典之御所置被成下候様偏ニ奉歎願候誠恐誠惶謹言

九月

丹羽左京 判

大総督府参謀御中

天童藩歎願書

臣信敏恐懼頓首奉歎願候先頃奥羽各藩ニ相従出兵等仕自然奉抗 官軍候事ニ立至候処此度上杉彈正ヨリ厚 叡慮之程奉伝承恐愕至極奉存候素ヨリ勤 王之外他事無御座候得共臣若年暗昧且遠境隔絶事情ニ通徹不仕一旦名分順逆ヲ誤奉悩 宸襟恐懼至極先非悔悟何共可奉申上様無御座隨而者家来末々迄恭順謹慎罷在謝罪仕候此上奉仰 朝裁候何分宜

敷御処置被成下度偏ニ奉歎願候誠恐誠惶頓首再拜

辰九月十八日

織田兵部少輔判

伊達陸奥歎願書

臣 慶邦 恐懼頓首泣血奉歎願候今般会津 御征討之砌名分順逆ヲ誤リ於出先家来共 官軍ニ抗シ奉悩 宸襟候段恐懼至極臣子之名分モ不相立先非悔悟今更何共可申上様無御座候次第臣乍不肖モ素ヨリ奉抗敵 朝廷候存意者毛頭無御座候得共全遠境隔絶之僻地ニ罷在春来天下之事情形勢モ一々承知不仕恐多クモ厚キ 叡慮之旨モ具ニ不奉伺遂ニ右様之事件ニ立至リ畢竟臣兼而指揮不行届ヨリ致ス所ニテ如何ニモ重々奉恐入候次第ニ付此上ハ本城ニ罷在リ候モ甚奉恐入候間速ニ城外エ退去謹慎恭順罷在即チ出張之隊長参謀臣ハ嚴重謹慎申付奉仰 朝裁闔藩誓天地勤 王之外他志無御座候就而ハ同盟之列藩ヘモ早速降伏謝罪為仕候様説得尽力罷在候間悔悟謝罪之藩々一同御寛典之御処置被成下候様冒万死偏ニ奉歎願候誠恐誠惶謹言

辰九月

藤原慶邦印判

又徳川家エ御沙汰書ヲ拝見シテ書載ス

九月四日御沙汰書

徳川亀之助

其方領知七拾万石駿河国一円其余於遠江陸奥両国ニ下賜候旨被 仰出置候処陸奥国者自今未至平定候ニ付今般改而別紙之通駿河国一円其余遠江參河両国之内ニ於而都合七十万石下賜候旨被 仰出候事 又会津在陣薩藩伊地知正治ヨリ同藩大久保一藏殿ヘノ来状ヲ披見シテ爰ニ記載ス―此大久保一藏君ハ後ニ参議ニ昇進シテ内務卿大久保利通公ト称ス支那ニテ英名ヲ顯ス―

其後日夜攻撃不止候故賊徒遂ニ窮迫ニ及ヒ去ル二十二日松平肥後父子軍門ニ来テ降伏当時妙国ト云梵寺ニ蟄居謹慎同日大小之砲器不殘差出シ二十三日家来不殘猪苗代ニ引退大小相渡シ謹慎今日城請取之都合ニ



相成申候抑モ当城ハ方五六町位之平城ニ候得共石垣之曲折巧ニ妙ヲ得殊ニ必死之兵三千ヲ以テ大砲五十門小銃二千八百挺中々数月之間ニ可攻落ニ無之候得共初メ討入之砌リ殊之外急速ニテ糧米火薬ヲ城中ヘ不運入候内ニ攻寄致放火候故老若男女五千之者トモ食用ニ困ミ数千挺之銃砲ハ彈藥ニ乏ク攻圍三十日ニシテ落城ニ及候次第畢竟諸將士之勉勵ト皇運之天幸ニ由ル処ト奉存候今日須磨敬治郎平田伊蔵両士差立候ニ付不取敢此段得貴意候以上

九月二十四日

会津在陣

伊地知正治

大久保一藏殿

又去ル七日中戦争最中仙台家ヨリ触レ示サレケ文通ヲ披見シテ末筆ナレ共爰ニ挙ル

此度賊徒征伐ニ付仙台家エ御味方仕度輩ハ幾人タリ共相募候様可有之候尤モ戦功有之ニ於テハ御恩賞被成下候条其心得尽力有之候様可致候以上

辰七月

㊦

仙台軍事方

上西国助殿

又奥羽之諸侯連合之最初米沢藩ヨリ諸藩江出ス文章ヲ得テ書末ニ記載ス

討敵

初め薩長幕府と相乱る也其顛末開港を以て不勤 王と巧抵し専 尊王攘夷の論説を主張し遂に之を仮て 天眷を僥倖す 天幕の間之か為に紛紜し内に江州藩動揺兵乱相踵する然に己れ 朝政を専断するを得るに到る翻然変局媚夷万年遂に夷靴をして 紫宸に印せしめ万古未有の国辱を取るに到る之に因て之を見れハ其十有余年尊 王攘夷を主張し裏情唯幕府を傾す邪謀を濟さんと欲するに在る事明かに知るべし薩藩多年誦詐を同一にし上は 天幕を暴蔑し下は列侯を欺罔し百姓の怨嗟を成し外は万国の笑侮を取り其罪何ぞ問はざるを得んや 皇朝凌

夷極と雖も其の制度典章斐然是備古今沿革有と雖ども其乃所の損益を知るべし然るに薩藩専横以來猥りに大活昭大活法と号して列聖の徽猷嘉謨を任意廃絶し一ツには英夷に模倣せんと欲して 朝変変革遂に皇国の制度典章をして蕩然払地に到らしむ其罪何ぞ問わざるを得んや

皇統綿々万世一姓相待道種等定まらずんば則彼の支那西洋の如し勲閥門流なるべからざるは論をまたす然るに薩藩専横以來撰家華族を擯斥し公族公卿を奴隸に視し猥りに諸家を群め不逞の徒は己れに阿附する者を拔擢して之をして青青を行ひ紫を施かしむ綱紀錯乱下凌上替今日ヨリ甚しきわなし其罪何ぞ問はざるを得ん哉偕伏見の事

件私闘と公戦と執直と執曲とを知るべからず苟も 王者の師を興さんと欲せは須く天下と共に公論相定め罪案既に決し然後之を討すべし然

るに驗革のきわ猥りに錦旗を動し遂に幕府を陥れ列藩を劫迫して征東の兵を調発するハ之 天命を矯す私恨を報ずる所意の奸謀なり其罪何ぞ問わざるを得ん哉薩藩饕餮所過の地侵掠せざることなく所見の

伐標竊せざる事なし或は人の鶏牛を攘し或は人の婦女に奸し発掘殺戮残酷極る其醜穢狗鼠も其余りを 朝命と称す是れ 今上陛下ヲシヤキムコイ

をして桀斥の名を負ハしむるや其罪何ぞ問はざるを得ん哉又井伊藤堂榊原本田は徳川氏の勲臣なり臣として君を伐らしむ因州は先内府の兄

なり兄をして其弟を伐しむ小笠原佐渡守ハ壹岐守の父也父をして其子を伐しむ備前は先内府の弟なり弟をして其兄を伐しむ絶て之か名義を

飾て普く天下の無王土率土の浜無罪王臣とす嗚呼薩藩誣聖滅論三綱を淪め九法を斁り 今上階下の初政をして保平の板蕩に超かしむ其罪何ぞ問ハざるを得ん哉右之諸件に因而之を觀れハ彼の藩の所為 幼帝を

劫制して其の邪を濟し以て天下を欺くハ莽操卓懿に勝り貧賤無能の所致暴虐を極るハ黃巾赤眉に過き天論を破壊し旧童を滅絶するは秦政宋偃に超ゆ国の招堅其れ又何とか謂わん我軍之を座視するに忍びず視縷蹄奏至情を曲諫すと雖も雲霧壅蔽遂に 天閣に達するに由なし若手

を垂れ以て扶去せずハ又何に因而か青天白日を看る事を得べき爰に於て敢て誠意利鈍を問ず奮て此義拳を唱ふ凡四方の諸藩貫日の忠回天の誠を同ふするあらば庶策ハ我軍の不逮を助け 皇国の為に誓て此禍を屠り以て視敵の九法を振ひ視倫の三綱を興し汚朝を一洗し下の類俗<sup>タイ</sup>を一新し内ハ百姓の塗炭を救ひ外ハ万国の頭衞<sup>キョウ</sup>を絶ち以て列聖在府の靈を慰め奉る有れ若尚賊牢洛中に在りて名々大義を不弁或ハ首鼠の両端を抱き或ハ助姦党邪の徒あるに於ては軍有定律不被赦不日に義旗を西指し長驅を以て賊に迫るに至らハ彼將に我鳳輦を擁して親征と号し祢謂一同端を以て人心を動揺するあらん然らハ則ち我將に之輕重を権し之か後急を較へ以て錯置する所あらんとす凡四方の諸藩庶策ハ臨時勇断する所を知るべき也

辰五月

諸州藩々御中

米沢軍政總督府

此文書ハ聞取ノ仮記載致ス所ナレハ其真偽虚実誤字等写人ノ任スル所ニ非ラス見ル仁論責スル事莫レ此日モ門跡在留○二十七日快晴駿河ニ於テ謹慎罷在ル可キ旨御達シ有リ依テ此日乗舟致ス可キ所運送船手都合ニ依リ延日ニナル乗船ノ男女早朝ヨリ門跡ニ集群ス何レモ家族引纏メ駿河路江移転ノ様子夕刻ニ到リ空敷帰ル偕モ斯克ノ如キ舦裁ニ相成リケレハ會計方預備ノ金子ヲ惣人員江割渡ス○二十八日快晴西風吹正午門跡ヲ出立小船ニ乗シ品川沖ニテメリケンノ通運船ニ乗り移ル偕美濃部藏人持ノ人数ハ西風強ク相成蒸氣船ニ乗ラクレ小船ニテ東京ヘ引返ス吾儕ハ午後六時品川沖ヲ出船シ同八時神奈川沖ニテ碇泊シ船將横浜ヘ上陸諸用ヲ足シ明レハ○二十九日午前六時神奈川沖ヲ出帆乗合ノ男女總計千四百余人ト云吾儕途中附添ノ御目付前田某御徒士目付中村昌太夫也此日西風有リシカ海上安全午後七時駿河国清水港ヘ着船暗夜ノ事故上陸ナリ難ク依テ船中ヘ泊ス明レハ○晦日快晴午前五時ヨリ小船ニ乗移リ追々清水町ヘ上陸我等儀ハ下町福嚴寺ヘ小休食事等ヲ依托ス斯テ御目付衆ヨリ口達有リケ

ルハ明十一月朔日徳川龜之助様 天氣伺トシテ東京ヘ御発駕ニ相成リ右ニ付府中宿モ混雜故旅泊相成リ難ク依テ今日中ニ藤枝宿ニ在ル田中城迄馳着致シ度偕又彼ノ地ニ於テ謹慎罷在リ御沙汰ヲ相待ベクトノ事ニ因テ午前十一時頃清水町出立小吉田村名物桶鮓ニテ小休ミ夫ヨリ府中宿ヘ至着暫時休憩午後四時府中宿出立鞠子宿ヘ着ノ所既ニ六時過ニ及フ依テ当駅ヘ一泊致スト決ス我カ旅宿ハ河内屋庄太郎酸漿屋佐七方ナリ(欄外・朱書)「十一月」○十一月朔日快晴鞠子宿出途岡部宿小休ミ藤枝宿エ着午後一時田中城ヘ滞リナク入着ス元本田豊前守殿ノ住居ニ転住ス○二日快晴無事○三日快晴無異事○四日快晴無異事○五日晴天夜ニ入テ報知有リケルハ美濃部藏人外二十四人今五日鞠子宿泊リ明六日至着致ス可トノ事○六日快晴午前十時美濃部藏人外二十四人恙ナク到着○七日快晴別異ナシ○八日快晴別異ナシ○九日快晴同断○十日快晴軍備金ノ残りヲ配当ス又謹慎中主家ノ御取扱ヒ到テ丁寧何忝ツ不自由ハナシ湯殿坏ハ風呂桶ヲ五ツ立朝ヨリ終日有リ賄ヒ方ヨリハ時々見廻リ食物入念致シ医師モ日々診察典藥ヲ施シ差岡ナシ情ラ慮フニ青天白日ヲ見ザル負罪ノ身ニ置ヒテハ厚キ御扱ヒナリト恐感ス○十一日曇天別条ナシ○十二日曇天夜ニ入テ雨降午後一時大久保七郎右衛門元持隊四十余人連レテ入着同断謹慎元我隊牧野森之助病氣ニテ来ル又元我隊本田喜六儀我輩カ田中城ニテ謹慎ノ由ヲ聞東京ヨリ遠路ヲ尋来ル又此日新調ノ蒲団ト引替ニ成ル○十三日雨降午後止ム無別条○十四日雨降午後止ム別条ナシ○十五日晴ル此日惣人員ヘ白ノ胴服二枚宛御渡シニ成○十六日快晴別条ナシ○十七日同断○十八日同断○十九日快晴某ヨリ見舞トシテ上茶差送ル依テ目付衆ヘ伺ヒ候処苦シカラザルトノコトユヘ則チ入納ス○二十日快晴某組ヨリ見舞トシテヤキツ鯛干物数百枚到来ス届ケ済受納ス○二十一日晴某氏ヨリ見舞トシテ金山寺数百曲到来前同断ノ手都合又此日銘々衣類寸尺ヲ調べ差出ス可キ様達シ有リ○二十二日快晴別条ナシ○二十三日同断○廿四日同断○二十五日同断○二十六日同断某組ヨリ見舞トシテ饅頭到来○二

十七日快晴元兵士寛五郎門迄尋子来ル其後音信ナシ○二十八日快晴別条ナシ伊東利三郎尋来ル○二十九日同断○晦日同断欄外・朱書「十二月」○十二月朔日快晴嚴寒ニ相成ニ付座敷ヲ間毎ニメル旧本田氏ノ住居ユヘ広クシテ尤モ美麗ナリ○二日曇天別条ナシ○三日曇天別条ナシ○四日快晴此日達シラレケルハ徳川亀之助様去ル十一月十五日東京ニ於テ参内從四位少将ニ任セラレ同十六日参内直ニ從三位中将ニ任セラレ自今以後駿河中将ト称シ奉ル可キ旨御触達有リ○五日快晴別條ナシ○六日快晴外説ヲ聞ニ榎本和泉松平太郎大島圭助柴弘吉松岡磐吉ノ諸将士軍艦四艘海陸ノ兵ヲ引卒シ箱館ニ渡海シ松前城ヲ攻拔キ根城トナシ専ラ圧戦シ遂ニ官軍ヲ引受防戦数回ニ及ブト雖モ未タ平均ナラサル由又在ル説ニ彼ノ地ノ脱兵輒ク鎮定届キ難ク此上力戦致シナバ人数ヲ費スノミユヘトテ彼ノ英名ノ参謀西郷吉之助隆盛君説諭慎懃方出発致セシ由○七日快晴別条ナシ○八日快晴同断○九日快晴同断○十日快晴同断○十一日快晴同断○十二日快晴御通達有リケルハ徳川三位中将公昨十一日駿府御帰城ノ由○十三日曇天午後雨降 主上昨十二日府中宿 御旅館今十三日藤枝宿 御小休ニテ御滞ナク 行幸被為在候事○十四日午前雨降午後晴ル○十五日晴夜ニ入テ大雨降此日某ヨリ塩引到来 十六日雨降午後晴ル○十七日晴ル細川越中守殿帰国当宿泊リ○十八日快晴○十九日曇天午後雨降○二十日曇天○二十一日曇天銘々宿処書差出ス○二十二日快晴牧野森之助病死ス―此森之助ハ四月二十二日野州宇都宮關戰之節安塚村ニテ手負全快ノ後チ閏四月二十二日野州太田原口板室村ノ鬭争ニ股ヲ打貫カレ全快ノ後チ八月二十二日若松城下急援ノ節脇腹ヲ打拔レ都合三回手負ヒ全快致スト雖トモ此度病氣ノ原因ハ腹中ノ疵ヨリ発病致セシ由―△此日年超シト云フヲ聞テ悦賀ス○二十三日曇天別事ナシ○二十四日雨降伊東利三郎来ル○二十五日雨降別条ナシ○二十六日曇天夜ニ成ツテ雨降此日裕服渡ス但シ辭シ候者ヘハ下与ナシ○二十七日快晴異事ナシ○廿八日快晴目付衆ヨリ御通達有リケルハ

加藤平内始一同江  
右謹慎之儀向後御赦免ニモ相成候ハ、当主之分ハ御暇ヲ願候俱御家臣之列ニ御差置願候俱両様之内見込書差出シ可申部屋住厄介之者ハ父兄等ヘ罷越申度志願之者モ可有之候間其段モ銘々存意認メ差出シ候様達之候事

但明二十九日昼迄ニ取集メ御差出シ可被成候事

右之通り達シ之有ルニ付銘々見込ヲ以テ差出ス其大概左之通りノ雛形

覚  
私儀御家臣之列ニ御差置被成下候様奉願上候以上  
何々  
何々  
何之誰印  
辰十二月

覚  
誰姓名  
私儀何々之見込モ有之候間御暇被成下候様奉願上候以上  
右  
誰姓名印  
辰十二月

(朱書)「元身分取調ニ付明細短冊」  
紋所丸之内地紙二笹 歩兵差図役下役  
高五拾俵三人扶持 塩谷敏郎  
元歩兵差図役下役並勤方相務罷在候

(朱書)「下ケ紙」  
慶応元丑年閏五月江川太郎左衛門兵賦ニ罷出同三卯年正月小頭取締ヨリ御抱入被仰付直ニ歩兵嚮導役被 仰付同四辰年正月歩兵差図役並下役勤方被 仰付候

右之通りノ振合ニテ銘々思ヒタノ見込ヲ書出ス吾輩ハ素々農民之事此上士官之希望ナキ故御暇マヲ願フ列ニ加ワル○二十九日晴ル光陰矢ノ如ク





同	友常竹松	同	西川徳太郎	同	斎藤留次郎	小以五十四員
同	板倉広吉	同	戸張伝右工門	同	平野清吉	辰九月奥州仙台ニ於テ降伏謝罪同十一月十二日当城江着同様謹慎 元大
同	角田梶太郎	同	浅野丑松	同	飯島長治	久保隊卜唱ヘル
	松山三吉		八木順蔵		本田喜六	元隊長 大久保七郎右工門
	高木久蔵	加藤平内家来	五十川小源太	朝比奈虎之助家来	藤池守之助	元頭取 森川鐐太郎
小以百五員	外二歩兵二百人ハ去十月千住宿ニ於テ官軍江引渡ス					萩原芳之助
元草風隊卜唱ヘシ姓名左ニ書載ス						浅野恒太郎
元加賀守事						高木弥太郎
元隊長 天野花陰		元頭取 酒井卷三郎	同 近藤彦右衛門			青木録之助
小松定之進		松原善助	瀧金助			坪内若治郎
林市郎		鈴木弥七郎	我野二郎			小林善二郎
荒井主税		蔭山亀三郎	小浦八十吉			平尾又三郎
島田猛		本田利吾太	井上儀蔵			近藤愛蔵
朝岡金五郎		竹内兼吉	渡辺恒吉			片倉總治郎
翁修		中島錢五郎	和田勘次			田中幸治郎
岡村昇太郎		黒水啓助	近藤精二郎			大久保七良右工門家来
永田剛司		近藤寛蔵	矢田半平			長尾一
鈴木三郎		長島勝之助	佐々源之助			同 武田太郎治
中村金吾		長谷部鉦二郎	伊藤峰治郎			同 飯坂八之助
堀介		大谷魁造	田中源八			同 下僕虎吉
加藤太郎		渡辺氏太郎	永易時太郎			同 中渡修蔵
吉田熊太郎		山畑昇	森唯郎			同 森川鐐二郎家来
矢田兼十		鈴木一重	斎藤与武三			同 大沢志津馬
小串吉之丞		近藤卷二郎	山宮吉蔵			同 惣計式百三員
市川郡五郎		大内由介	深田虎之助			右之通りニ認メ差出ス○二十一日晴午後雨降謹慎明ノ人員引取トシテ父
市川三良五郎		春日熊吉	浜村吉之丞			兄或ハ親戚ノ者早朝ヨリ城内エ群参ス○二十二日雨降午後止ム牧野森之
						助墓碑出来ニ付小島助左衛門塩谷敏郎光源寺江罷越見分ノ上追善ヲ営ム
						刃譽勇猛信士卜唱フ此日モ人員引取トシテ群参ス○二十三日快晴吾輩兼

テ此日出立ノ手組ニ致シ東京ヘ志ス者三十四員申合セ其用意ヲ成シ加藤朝比奈松山友部ヲ始メ懇切ニ暇乞ヲ告ケテ田中城ヲ出立ス夫ヨリ岡部宿ニテ小休ミ爰ニテ和宮様御上京ノ行列ニ逢フ夫ヨリ鞠子宿葛屋ニテ中食此道中ハ氣俣ノ身ナレハ誰モ急カヌ路草ニ愉快モヒトシホ増ス物語リ漸ク府中宿ニ着キ中伝馬町小泉屋幸藏方ニ宿ヲ借り浅間ノ杜ヘ参詣スル者モ有レハ酒肴ヲ促シテ戯レル者モ有リ思ヒ々々ノ鬱氣ヲ散シケリ明レハ〇二十四日雨降当宿出立奥津宿寺下府中屋ニテ中食夫ヨリ蒲原宿三笠屋忠助方ヘ宿リヲ求メケル明レハ〇二十五日雨降当宿出立吉原宿煙草屋某方ニテ中食夫ヨリ沼津宿ニ到リ本町米屋藤兵衛方ヘ旅泊小島助左衛門池田永助内田鎧三郎岩城庄平沢田圭十郎杯ト長々ノ別懇互ニ別レヲ惜ミ且ハ無事ヲ祝シテ勞レモ忘レ終夜語り合ヒ鶏啼ヲ聞テ臥ス明レハ〇二十六日快晴互ニ暇ヲ告ケ外々ノ者ヘモ懇切ニ暇乞シテ別レケル夫ヨリ自分ハ同宿平町旧真友ノ浅田主計方ヘ立寄り打絶テノ疎遠ヲ述ヘ相互ニ無異ヲ賀シ懇譚ニ時間ヲ移シ浅田氏ニモ足勞ヲ厭ワス同伴到シ呉レ午後三時頃帰宅ヲ成セリ偕モ倩ヲ吾儕ノ頑愚ナル事ヲ慮考スルニ抗敵ノ異名モ不顧シテ只管僻慮ノ專制ヲ主張シ君臣ノ名義ヲ立ント欲シテ常野奥羽ノ各國ヲ經走シ時ニ望メハ身体俱ニ塵芥ノ如クニ取り扱ヒ二百余日ノ間砲銃ノ彈聲ヲ常ト思ヒ命チハ風前ノ灯ニ異ナラス寢ルニ枕ヲ当ルハ稀レナリ或時ハ飢ヘ又或ル時ハ凍ヘ山林原野ニ雨露モ厭ハス夜ヲ明シ遂ニ切迫シテ陸奥会津若松城ニ三十日ノ間籠城シ其困難筆モ及バヌ思ヒヲナシ若松城中ノ墳土トナルベキ斯期ナリシヲ松平肥後殿ニ於テモ雲霧晴テ始メテ厚キ 叡慮ノ程ヲ貫徹シ悔悟復罪ノ意趣ヲ官軍ノ軍門ヘ降伏謝罪ヲ申述致セシ所聞シ召シ届ケラレ若松城ヲ開兵シ同州猪苗代ニ逼塞スルコト十五日 朝廷寛大ノ思召ヲ以テ死一統ヲ宥メラレ夫ヨリ東京ヘ送附ニ相成リ銘々藩主江引渡サル徳川氏ニ於テハ各臣受取りノ上駿河路ヘ差送り田中城ニヲヒテ十一月朔日ヨリ謹慎申渡サレ 朝廷御赦免ノ御沙汰ヲ待ツ明治二年正月二十日 朝廷寛典ノ御処置ヲ 仰セ出サレ御赦免相成ルト

雖モ一端抗敵負罪ノ者ユヘ 朝廷江封サセラレ相応ノ家録ハ賜リ難キ趣キ之ニ依テ差向キ壺人扶持宛救助ス由ノ評有リ実以テ歎息究リケリ右等ノ儀ニテハ口ニ糊スル事モ能ハズ尤トモ江戸表テ脱走ノ砌リハ悖戾シ剩ヘ抗敵ノ名ヲ顯ラハシ兩罪俱ニ輕カラサルマシ吾儕頑愚ニシテ其罪タル事其抗敵ニ陥ル事ヲ弁知セスシテ身ヲ果サントスルノ形勢真ニ恐怖ノ到リナラスヤ又思フニ今日ノ況景ヲ見レハ何ノ名義モナク寸功モナク只命ヲ全キ而已ニテ保存スル事ナラス其頑痴ノ甚タシキ事譬ヘルニ物ナシ之ニ依テ我カ短智無尽ヲ掲ケテ後來諸君ノ笑ヒ草ニモ哉ト過テ改ムルノ諺サヲ思ヒ出シ反古日記ヲ春ル雨ノ徒然ニ拾ヒ集メ拙ナキ筆ヲ費シテ困苦ノ夢路ノ棧ヲ渡リシ言ノ葉思ヒハベリテ著記綴ル

塩谷敏良

智仁勇三冊之合紙數百六十二枚

紙數五十七枚

(国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系)

(二〇〇八年四月一五日受理、二〇〇九年一月二一日審査終了)